

信

仰

## まえがき

## 一 神社・氏神・石祠・その他

### (一) 熊野神社

入牧地区的信仰面の特徴としては、今井善一郎氏の御報告があるの引用させて頂く。『①入牧地区で特徴的なことは「先祖祭り」といふ名の祖靈信仰が強く、同族結合の強さを示している。②部落によつて、違った山に違った神の信仰を持ちながら、全体として山岳信仰の名残りを色濃くみせている。③山の神、東申講などの講が盛んである。』筆者としては、峠の熊野神社（峠様）に興味を引かれたので、一寸述べておきたい。

熊野神社の隆盛は、各地の熊野信仰と同じく中世以降のことであり、

熊野三山の御師、先達などの廻國布教の結果と察せられるが、それ以前の信仰の背景が興味深い。

碓氷嶺は、万葉集から、歌枕として名高く、また書紀においては、日本武尊東征に関連して語られている。そこには古くから、強力な峠の神、坂の神、山の神——が意識されていた（記・紀の説話からだけでも分る）であろう。

こうした信仰的下地に、密教的な山岳崇拜などの要素が連繋して、峠様信仰になっているのである。（佐藤 清）

所 在	社 名	祭	神	本 地 仏
上 州	新 宮	速玉男命		
県 境	本 宮	伊邪那美命、日本武尊	業 師 仏	
信 州	那 智 宮	事解男命	阿弥陀 仏	
		觀 音	十一面千手	

注（本地仏については現地では明かないが、平月社大百科辞典より引用）なお、神楽殿とも上、信各々別々にあり、社家も両国に分かれています。中世以来武士の信仰も厚く、近世は熊野講、峠講と称し農村に多くの崇敬者を持ち、最盛期十万五千人の講員を持っていたという。輕井沢町志より当社の由緒記を引くと次のとおりである。

「人皇十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征伐凱旋の際、武藏、上野を経て碓冰山嶺に登り給う途、坂本に到り憩いし給へる時、荒ぶる山神白鹿に化し尊を苦しめんと御前に来たりしを、其眼に蒜を打付け殺し給ふ。此時雲霧急ち道を遮り咫尺を弁せす（雲積山の唱今にあり）、尊道に迷い給へるに八咫鳥紀の國熊野山の櫛の葉を噛み持來りて尊の御前に落し、尊を齋導する状なれば夫れに隨い領土に達し給ふ。時に雲霧全く晴る。尊東南の方を望觀し妃橘媛を忍び給ひ、三歎して曰く「吾媛者邪」と、是より坂東の諸国を吾妻と云う事起れり。（日本紀及び諸史に見ゆ）而して尊曰く大祖神武天皇八咫鳥の齋導により熊野山を越え大和の土賊を全滅し玉へり、今我東夷を平定し爰に八咫鳥の瑞相に応ぜしは、正しく熊野神靈の加護ならん事を知食し、当熊野三社を齋請し給へり。時に景行天皇四十一年十月なりしといふ。夫れに例し毎年十月十五日当社の大祭典を行ふ。爰に奇異なる神業ありしは、古来毎年六月十五日当時大祭典の早晩紀の國熊の山より当社内へ郷の葉降り来れり。又十月十五日当社の笛紀州熊野神社へ降ると云ふ。彼八咫鳥止りし岩を烏岩と呼び（当社近傍東北方にあり）其岩より流出する河流を鳥川と云ふ。当社神壓として古来日本太一熊野牛王と称し、鳥島の群れたる形の刷り物を出す、是れ其八咫鳥の因縁なり、尊の登山の古事を伝へて止夫山と云ひ又尊の歎き給ひしを以つて「ナゲキアル山」の略語にや当社の裏山を長倉山と唱ふ。

注 止夫山は、留武山とも記し、鼻曲り山との字山の間の山をいう。

新田義貞が松井田新堀の鳥居坂と軽井沢の鳥居原、それに峠を結ぶ三角形の内を寄進したといわれている。

熊野神社は農作物増産の守護神としての崇敬が強い。

講は関東、信州にわたり分布し、熊野講、峠様などと称し、最盛期は十萬五千の講員がいたと伝えられているのは前述のとおりである。

講員は五人講、十人講とあり、最近は五人講が大部分であり、同部落内にもいくつかの講があり、御師は同一人でない場合もあった。この固定化された講社は、御師の家の財源ともなり、御師の間で年季賃入れ売買の対称ともなり、軽井沢町志によると元禄十三年に十一ヶ村二百人を七年年季で二両二分の賃入金を出したこと、享保年間高崎領内大類村外七ヶ村四百五十人を金三十八両で売渡していることなどが見えてくる。

御師は、代参および年一~三度のお初穂の収入があり、毎年一月下旬から三月彼岸までに講中の村々を巡回し、配札して（鳥牛王とその他のお札）お初穂と称し五穀や金を集めてあるき、代参の日などの打合わせをした。このとき御師の泊る家は一定していた。秋も同様に巡回したが、近年は春だけとなつた。御師は、家々をまわるとき、「こんにちは峠様です」といつてまわつた。各家では、土地の産物を奉納することになつていて、養蚕の盛んなところでは、小さな紙の袋にまゆをいれて納めた。これを「まゆばつは」と称していた。なお御師のお供として、村人が出でてくれた。（お伝馬として）

鳥牛王のお札は、苗代の水口にさした。害鳥よけとして、また、その年の増産を祈つた。なお、お札の中のさか鳥三羽を切り抜いて飲めば嘘を言つたものは血を吐くといい、また、妊娠婦が飲めば安産できるといふ。とくに、山梨県のある村では、鳥牛王を毎年受けている。あるとき、練入り道具が盗まれたことがあつた。近くのものが取つたに違いないということになつて、峠様へ行つてくればわかるということことで出かけ代参は、四月に入ると各御師の家で一日おきに代参者を迎えるに手伝つた。以前は一軒に百人ぐらゐも泊り、今は一晚だが四十年ほど前までは一晩泊りであった。到着した晩はおつきソバ、翌朝は朝食を食べずに茶菓子餅を食べて神楽殿にのぼり、太々神樂を奉納し、一時頃食事をし、翌朝早く出立した。講金は一円五十銭、また米一升ずつで五升の事

ことでもあった。参考までに曾根恒季氏の家の講帳を記すと

#### 大正四年の計

金毫百六拾武円也

白米七斗六升

#### 大正五年の計

金毫百四拾四円四拾錢也

白米毫石武斗六升

#### 大正六年の計

金武百円五錢也

白米毫石四斗五升

#### 大正七年の計

金武百拾八円四十武錢也

白米毫石壹斗八升

当時信州は米一升の代価を基準にし、十人講なら一斗分の講金を入れていた。一升は一升（一生）いよいよ」ということである。

全盛期は江戸時代であるが、鉄道開通前はかなり多く、代参者のワラジに名札がつけられ軒下にいっぱいいかざらされ寝るときは箱枕で足つかわせに寝た。風呂桶は軒先にいくつも並べられてあり、ソバは食べようだい、酒は飲みほうだいであったが、あまりこんでいて奥に座った人など物が届かないなどといつてぎやかなものであった。

#### 社 畠

熊野神社の社家は、上州側で曾根氏、信州側で水沢氏がつとめていた。古くから両者は度々争つたことがあったが、元禄年間に寺社奉行の裁定があり、中央に祭られている本宮は、上、信の社家が一年交代で守護し奉ること（本番と相番（翌年組））となつた。この地には名主などはいなかつた。（昭和四十一年信州分の水沢氏が本番である。）

盛時は祠官一人、祠掌が六十人もいたことがあり、人別帳などによると抱え人も多かつた。また大名通行のときは、宿の本陣まで迎えに出る

か連絡を出し、道中安全のための祈願をして鳥午王のお札を出していった。

#### 田遊び神事

一月六日の夜十一時～一時までの間に行なわれる熊野神社の特殊神事で、神前に牛と馬の形や鎌、鍬などのつくりものをお供えし、本殿前に井桁に薪を組んで参拝者を迎える準備をし、神事がはじまる頃から燃してあたる。神事は種籠きから取り入れまであり、そのときの祝詞は別記のとおりである。

このとき豊岡の占いもある。「峰様のはんじとう」といって、おみくじで晴雨、吉凶を占う。その際各地から講員の寄進したお初穂も一升あげそれを「まこうな。まこうな。福の種をまこうな。」といって参拝者の群れにまく。参拝者はこれを拾い七草のかゆに入れる。

#### 櫛の葉祭

七月十五日。現在ではかたちだけの祭りになつていて。

早朝、氏子、崇敬者がお宮のまわりをまわって、櫛の葉を拾つた。

（昔、碓氷峠の鳥が熊笹をくわえて紀州熊野へ行き、紀州からは櫛の葉を鳥がくわえてきて境内におとすという伝承からきている。）

#### 鳥午王のお札

江戸時代に、鳥午王をうける数が多くなつたので、紀州熊野の出張所として覚泉院というものが江戸にあって、鳥午王を発行していた。そこで、こちらの熊野側は寺社奉行に訴えた。鳥午王の真中に、こちらの熊野神社では、日本太一とし、紀州側では、日本第一とすることになった。

#### 神 楽

お神楽は七座（多いときは十三座あつた）。神主が舞つた。舞いはお能に近いもの。神楽殿は信州分と上州分とあり、神楽の奉納の多いとき



千 羽 鳥（新井）  
(撮影 池田秀夫)

剣の舞、かつこの舞。

熊野神社太々神楽奉額一覧

享保十年	上野国群馬郡大久保村
元文二年	湯中子村
寛保二年	樺田村
寛保三年	碓氷郡岩冰村
寛保四年	信州佐久郡大日向村
寛延二年	上野国群馬郡大久保村
寛延四年	碓氷郡土塙村
宝暦七年	群馬郡有馬村
宝暦八年	多野村
宝暦八年	多野郡藤岡
宝暦十一年	吾妻郡大前村
宝暦十四年	勢多郡津久田村
明和元年	群馬郡金古上宿
明和七年	群原村
安永元年	三之倉村
安永七年	碓氷郡五科村
安永七年	群馬郡北新井村

は、両方の神楽殿を  
別々に使って舞つた。  
た。現在は信州分の  
神楽殿だけを使って  
いる。

舞いは次の通り。

からすの舞い、千

鶴の舞、散米の舞、

天狗の舞、棒の舞、

剣の舞、かつこの舞。

安永七年	信州佐久郡岩村田
安永九年	上野国甘樂郡田篠村
天明五年	信州佐久郡村々
寛政四年	上野国群馬郡綿貫村
寛政六年	前原村
寛政六年	碓氷郡下後閑村
享和三年	碓氷郡陣場村
文化三年	信州豪種商人講中
文化四年	上野国群馬郡矢島村
文化七年	碓氷郡安中谷津
文化十二年	伊勢崎
文化十二年	群馬郡陣場村
文化十三年	碓氷郡安中宿
文化十三年	安中上町
文化十三年	武藏国本庄駅台町
文化十三年	上野国群馬郡矢島村
文政四年	碓氷郡安中宿
文政八年	上白井村
文政八年	勢多郡棚下村
文政十三年	碓氷川浦村
天保六年	多野郡吉井長根
弘化二年	碓氷郡安中宿
明治七年	甘樂郡宮崎鉢木平
明治十四年	大日向、六車、大仁田、磐戸、増沢、大塙、
明治十四年	小沢
明治十四年	吾妻郡長野原
明治三十年	群馬県群馬郡佐野上中居
明治三十年	甘樂郡秋畠村
明治三十一年	吾妻郡嬬恋村
明治三十一年	甘樂郡下仁田下栗山

明治四十年 山梨県北巨摩郡小泉村

群馬縣吾妻郡岩島村松谷、長野原、川原湯畑

明治四十三年 群馬縣吾妻郡岩島村三島  
吾妻郡岩島村三島

右の外年紀不明のもので、倉賀賢、佐位都下植木、甘楽郡宮崎、群馬郡有馬の各村々から奉納されている。また、太々神樂の奉納ではないが算額一面（安政四年吾妻郡三島皆原朝治郎祐政と明治五年のものとある）、劍舞の額一面（弘化四年群馬郡金古中沢源藏清忠）、砲術額一面（安中藩士のもので文化八年外二面）がある。これらは上州側神樂殿、信州側神殿に大部分が保存され、一部は隨神門などにも掲げられている。

神社の宝物 文化財

狛犬一對 明徳年間の作と伝えられ（東側ア形のものは前脚後補） 宝物台帳に記されている。

御田遊神事記

御田遊神事記  
信州分社司扣

抑御田遊之神事ト申スハ古天地未生之時於天津御虛成坐神之御名天之御中主神次高皇產靈神次神皇產靈神宇麻志阿志詞彌比古遼神天之底立神國之底立神豐斟神宇比地遼神妹須比智通神角櫛神妹活櫛神大斗能地神妹大斗之介神游母陀琉神妹詞志古泥神伊邪那岐神妹伊邪那美神爰其天神諸之命以而詔伊邪岐命伊邪那美命二柱神修固成是標在國而天壤才而言依給矣是ニ依リテ一柱大神天神ノ命ノ隨意大八洲國ヲ修理固成給奴後ニ天照大神詔神速須佐之男命曰於葦原中國聞有字氣母智神云宣爾就候詔翁故速須佐之男命受勅而天降坐而列字氣母智神之許而食物乞給其字氣母智神奮爾氣母智神自ノ鼻口及尻取出生種種之味物而於百取机種種作具而奉饗之時速須佐之男命立祠其態ニ而為奉進種種而忿然作色詔曰穢哉鄙哉寧以穢物養吾乎詔而迺拔効擊殺其字氣母智神而復命而具言其事ニ時天

照大御神甚堅坐而汝者惡神也不須相見一詔而乃一日一夜隔離而住矣故是後天照大御神復遣天熊之大人而看之時字氣母智神寒已死矣故其所殺之神身生物者於顙上生粟於眉上一生蠶子桑木於目生稗於腹生種種於陰生三麦及大豆小豆頂化為牛馬矣故天熊之大人悉取持而奉獻之時天照大御神喜之詔曰是物者宇都志枳青人草之食而可活物也詔而乃以粟稗爰豆為陸田種子以為水田種子又定天邑君即以其種始而令種天供田及長田則其秋垂頻八振莫繁然甚快美矣又於天香山殖桑木而養蠶其蘊舍口而抽絲養蚕織織之業自此時始有矣

熊野皇大神社御田遊大祭唱詞  
一去歲ヨリ今歲ハ門ノ松高奈

答 高毛同理余所ノ松加増余

一若宮殿乃御前仁一鍬打立天見礼波

飯煙乃煙熱穗立候

一本宮殿乃御前仁一鍬打立天見礼波飯煙

酒乃煙熱穗止立候

一新宮殿乃御前仁一鍬打立天見礼波飯煙

酒乃煙熱穗止立候

一那智宮殿乃御前仁一鍬打立天見礼波飯乃煙

酒乃煙熱穗止立候

一十二社殿乃御前仁一鍬打立天見礼波飯乃煙

酒乃煙熱穗止立候

一皇子等御前仁一鍬打立天見礼波飯乃煙

酒乃煙熱穗止立候

一末社等乃御前仁一鍬打立天見礼波飯乃煙

酒乃煙熱穗止立候

一氏子等乃前仁一鍬打立天見礼波飯乃煙

酒乃煙熱穗止立候

一閑八州氏子等乃前仁一鍬打立天見礼波飯

乃酒乃煙熱穗止立候

一度

一信濃乃氏子等乃前仁一鉢打立天見孔波飯乃煙酒乃煙熱穗止立候

答散利々々止福乃種乎時奈  
一時云々云止福乃種乎時奈

一度

一物大日本國中大小乃氏子等乃前仁一鉢打立天見孔波飯乃煙酒乃煙熱穗止立候

答散利々々止福乃種乎時奈  
一時云々云止福乃種乎時奈

一度

一夫熊野皇大神乃五穀種子百姓仁授与賜布

答散利々々止福乃種乎時奈  
一時云々云止福乃種乎時奈

一度

一是亦々々若宮殿乃福種乎時奈

答散利々々止福乃種乎時奈  
一時云々云止福乃種乎時奈

一度

一時云々云止福乃種乎時奈

答散利々々止福乃種乎時奈  
一時云々云止福乃種乎時奈

一度

答誰人仁著事人仁著奈

一是亦々々若宮殿乃御食杓コソナ

答トウチウ、ニマヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々本宮殿乃御食杓コソナ

答トウチウ、ニマヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々新宮殿乃御食杓コソナ

答トウチウ、ニマヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々那智宮殿乃御食杓コソナ

答トウチウ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々十二社殿乃御食杓コソナ

答トウチウニマヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々皇子等乃御食杓コソナ

答トウチウニ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々末社等御食杓コソナ

答トウチウニ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々氏子等乃御食杓コソナ

答トウチウニ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々關八州ノ氏子等乃御食杓コソナ

答トウチウニ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々信濃乃氏子等乃御食杓コソナ

答トウチウニ、マヒタル御食杓コソナ 一度

一是亦々々大日本國中大小乃氏子等御食杓コソナ

答トウチウニ、ニマヒタル御食杓コソナ 一度

一阿礼奈留女子手祭

答手仁手仁手祭光に麻糸祭 一度

一丸ゾ、ウレシヤ諸切々々止  
答刈リウレシヤ倉下サツブラ  
抑此牛止白者熊野皇大神乃御田遊之牛仁而候

次鳥オヒ

二丸ゾ、ウレシヤ諸切々々止

答刈リウレシヤ倉下サツブラ

一度

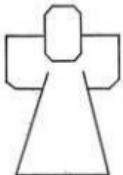
左右之眼於見夫有孔波如光日月ノ

左之角於見夫有孔基天下泰平国土安全トヲヒテ候  
右之角於見夫有孔基五穀能成福貴滿福登ヲヒテ候

以上  
神

## 配札

碓氷神社は神さんと呼ばれている。正月と七月にお札を配つてくる。その中に人形がある。これは各戸へ配られるが、家族はこれで頭や体をなで川へ捨てる。夏七月に來るので夏越大祓真麗という札と一緒に来る。正月には一年御祓真麗というのが来る。その外お正月様のお札、大神宮様、荒神様などが来るかこれも神の神主さんがもつてくる。



神主様では又、千羽鳥のお札をくれる。これは門に張つた

は正月様と一緒に来る。

これは門に張つた

り、田のある人は苗間の水口に千羽鳥の紙に

豆と米とをいって包んで上る。

## (二) 各地の諸神

### 箭立明神

滋野氏の祖先を祭るといわれ、熊野神社が岬に根をおろす前の地の神ではなかつたかといふ。現社家の水沢氏は滋野氏の子孫といふ。(神)

### 愛宕様

丸山の上に石宮があつて七月二十四日が御精進の日である。昔はその石宮までの間を道刈りしたが、今はしない。火伏せのあらたかな神だからといって、一切女の手は触れさせないで食物をつくる。臭いものはない。米を五合づつにナタマヘ、キニウリ、ジャガイモ等を持ち寄せて、男ショウだけで炊いて、御神酒の一升も上げて、朝飯から昼飯まで食べて解散した。この宿は村の世話人の家であった。(恩賀)

### 石尊様—セキントンサマ

石尊山の頂上に愛宕と同様に石宮があり、これも同様に八月二十八日、朝貢前に道刈りをして、米五合持ちよせて食べたが、今はしなくなつた。(恩賀)

#### 神明様

明賀の神明様は、入山神社に合併してしまつてからは全然お祭りはない。が、以前は神楽殿もあり、四月二十七日が祭日であった。(明賀)

#### 天王さん

神明宮の境内に天王さんの石宮がある。一月の初めの日曜日に天神講をする。(明賀)

#### コンビラさん

やはり同じ所にコンビラ様の石宮があるが、特に祭られている。(明賀)

#### 賀

#### 八幡様

境内に、あすなろの大木がある。ひのきになれ、さわらになれつたら、あすなろつていい。

ちょうど二三勘定できねえが、一八八段ある。

八疊敷の杉の大木があった。祭には西牧から頼んできて、神樂をぶつた。天氣祭の時は、裏のお天狗様に百八の餅を供え、寄つてさわいた。雨乞いは、八幡様の池をかんました。

#### 甘酒祭

秋の十五夜にする。昔は参詣人が多く、天保錢がますに一杯あった。

#### 鏡岩

抱番の時、おがらですだれのようを作り、直つてからここに納める。

#### 太郎の宮

幕府の費用でやっていたが、役人が、太郎の宮というのが此の辺にありますかと聞いた時、百姓が知らないといったので、費用が下らなくなつた。

た。(下平)

#### 八幡様の池

昔は池の中に岩があつて、桶の半切りのようなものに乗つて遊んだが、岸に戻つてみると、なくなつていて。

この池の鯉を食つた者は、ろくなことはない。

草が負けるか、人間が負けるかといふくらい草が生える。りゅーきゅーは、盆ござに、すげは、盆棚を飾つたり、すげ繩を作る。半日も日で乾かすと、なよくなる。(下平)

#### ハチジョースギ

八幡様の神木、まさきりで血が出た。よつびて切つたが一日たつと、こっぱがくつつく。そのあたりで職人は死んだ。(下平)

#### 飯綱様

信州戸隠神社の分靈といわれ、御神体は天狗様で木像である。また折願の折には白狐を上げるのでその数が多い。狐置・赤坂の佐藤姓の氏神は、狐置にある飯綱さま——お稲荷さんで、遠入の佐藤とは関係なく、先祖の八左衛門がこの地に入り、四人の子を分家して五戸となり、初めてナワカケをして五人組をつくったという。この時に祭った神様が飯綱様だった。飯綱さまは、狐置の部落の上方にあり、東面して社殿がたてられ、社有地は一反六畝余あるというが、大部分は杉林になり、共有林として利用されている。

飯綱大明神祭供体(飯綱権現縁起)は天明七年未(一七八七)に書かれており(佐藤伴平、佐藤文太郎氏の二本あり)、本殿の中にはた棟札には文政五年十一月十四日とあり、フニロの銘には文政五年戊四月吉日とあって本殿の建立を裏づけている。

祭りは、昔三月だったので、川向うの久保と一緒に立つたが、今は四月二十七日の甘酒祭の日になつていて。この日神社には村中から一戸一人づつが出てお参りをし、お神酒をいただいた。もとは赤いのばかりが村の入口から神社までずっと続いて、明賀・赤浜・岩の平などから

もやつてきたというが、遠い所では西牧（下仁田町）から来たのぼりも現存している。

お稲荷さんは、正東に向いているので、こういう神様は縁起がいいと

いうので、戦争中にはよく戦勝祈願に遠くからお参りにやつてきた。

お稲荷さんは、お産にいいとかいうのでお産のオガシヨをかける人も多く、オガシヨバタシには「お庭草をふませる」からといふ。

お稲荷さんは、お蚕の神様なので、神社に上げられているコンコンさんを借りていて、蚕があたる一農作になると二つにして返すことになっている。悪鼠退散にもあらたかなものだと信じられている。

石の鳥居を三つくぐるとハシカが軽い、というので、遠人の荒神さん、若宮のお諏訪さんと、お稲荷さんの石鳥居の三つをくぐりによく来ていた。

赤坂、狐糞とともに氏神がお稲荷さんなので、戸別の屋敷祭りはやらない家の方が多い。また屋敷稻荷をもたない家もあり、飯綱さんの境内に三基の稻荷さんの石宮があるが、これが屋敷稻荷を持たない家の、いわば代りの稻荷さんとして持っているものである。

もとは月の十五日と二十八日には必ずお稲荷さんに供えものをした。家の祝いごとの時も供えものをする。十一月十五日が屋敷祭りで、盆の葉に、オコワと生米を供えた。生米は水でいだものを皿に入れて上

げるもので、火を入れたものは供えなかった。生米は水でいだものを皿に入れて上げるもので、火を入れたものは供えないと、(狐糞)

次戸隠さんとは関係ない。



飯綱さまの御神体（飯綱宮）  
(撮影) 阪本英一 (狐糞)



飯綱宮のオコンコンサン (狐糞)  
(撮影) 阪本 英一

#### コンビラ様

小柏の北の方の五輪台——土地では三急という（九九一四）の上に石宮があり、コンビラさんが祭られている。讃岐のコンビラさんを勧請してきたもので、小柏がもとと栄えて十戸以上あったときからお祭りしてきたものだという。今は村が貧乏してしまって四戸にへってしまった。

お祭りは四月二十七日だったが、今は二十八日になっており、山頂にボンデンを上げた。十尺ぐらいの竹に表儀をつくり、ゴヘイを刻んで表儀さしに、タレを多くしてつくれたボンデンをかづぎ上げて、つくったもので、下の部落からよく見えたものだった。ボンデンのはかにはお神酒を上げるが、竹をキソギにして一本しづり合わせ、お神酒を入れてコンビラさんの石宮の御神体の前にたてて供えてきた。(小柏)

#### イナムラさん (福村山)

イナムラさんは赤坂と狐糞の神様で、セキソンさんとかセキトンさんといわれ、海拔九五二㍍の福村山のことである。入牧中のどこから見てもまんなかになる山で、頂上に石宮が祭られ、中には木のお札が入っていて福村神社と書かれているが、ふつうにはセキソンさんといわれている。ジュミヨウ（寿命）の神様で、七月二八日が祭りで、昔は女人禁制

#### 戸隠さん

戸隠さんは百姓の神さまになつた。実家が戸隠の近くなので、戸隠さんのお札をもつた人が来てくれて、その度に泊つて

だったので男だけが登ってお祭りをした。

祭りの日には、祭り番があつてこの人がポンデンをつくって背負い上げ、石宮のわきに立て、頂上近くのシメもとりかえる。供えものはお神酒一升と、家でできた梅（新漬で色づけせず、梅干にもしないもの）と、キウリの初もぎ、夏ダイコンを上げることになっている。この頭はキウリとオコワをもつてゆく人が多くなったが、キウリはちょうどなりだす時期なのでめいめい（各人）がもつてゆき、供えてから切って酒の肴にする。祝詞を上げたり、みんなで何かやることはなく、適当に押むだけで始まるが、家で不淨をきたした人は百カ日たたないと登らない。

靈験あらたかな神だからオナンシヨは上らなかつた。上つたからといつても別に罰はない。お産のけがれというようなことも問題にならない。

ぐあいの悪い人はオガニシヨをかける。ジュミヨウの神様だからどんな病氣でもよい。オガニシヨバタシには刀を上げる。もと木の太刀をつくつて上げたが、いまはブリキなどの刀になった。（赤坂）

セキソンさんのお祭りのときに雨の降つたことはない。イナムラさんは天下領だから遠入の人たちは信仰しない。（遠入）

赤浜のセキソンは、入山農協の向うの方の低い山にあって、男女の石尊さんがある。男の方の石尊が高く女は低い山である。

思質の石尊は峰に近い高い山にあるが、今はどちらも祭りはないようだ。

イナムラさんは欠かさないもんで当日雨が降つても休まず、ケデエ（みの）を着ても行つた。ボンデンは当番の人がつくつて今はリュックに入れて背負い上げ、石宮の隅りに上げ、お神酒、キウリ、オコワを供え、拝んでもらお神酒をのむが、山を下りてからは何の行事もない。明治の初めごろだというが、どこからか行者がやつて来て、「この山をもつとはやらせるから」というのでしばらく村に止まり、夜中にこの

山上でホラ貝を吹いたので、おつかなかつたと年老りが話してくれたという。



イナムラサン石宮と供えもの  
(撮影 阪本英一)

現在ある山上のア

ズマヤは七年ほど

前、観光的にみて必

要だからというの

で、建ててお祭りを

したが、そのときは

小畠から西は全部参

加したが、その他の

ときは赤坂と狐蕪だ

けでお祭りをしている。(狐蕪)

### 三宝大荒神

入山の佐藤一族の氏神である三宝大荒神は、入山の開祖「佐藤監物」が奥州信夫の庄から落人として天正年間にこの地に来るとき背負つてきました。「荒神さん」を御神体とする神さままで、土地の人は「いくさの神さま」と言い伝えている。

祭典は、以前は四月十七日が例祭だったが、神社合併後は二十七日が春祭りとなり、翌二十八日に続く。この日は入牧全地区の春祭りで、どの家でも甘酒をつくつて投げアマサケ祭りにあたり、五七七年目ごとぐらいで峰の神社（熊野神社）から来てもらつて神樂を上げもらうが、そうでないときには神職に来てもらう。お祭りには、人参・ゴボウ・ネギなどの野菜と、お供え——一升づきの餅でつくつたのを供える。

秋祭りは九月十五日で、この日は村のナイシヨ祭りにあたるので、神職も来ないし、特別の行事はない。

御神体は、木彫の高さ二十五寸ほどの三面神で、素朴な、荒げざりのものであるが、虫による被害が大きい。もう一つはゴヘイソクであつて、峰の神宮の関係のものである。

荒神さん御神体  
(撮影 阪本英一)



荒神さま  
遠入佐藤家の氏神  
石碑は佐藤監物の碑  
(撮影 阪本英一)



荒神さん御神体  
(撮影 阪本英一)

ここで紹介する神との関係であるが、祭りの時に神の神社のオーナーと、ヘイスクをもって来て各家庭にくばってくれるといふが、三宝荒神とのつながりは特に見られないようだ。

久保の部落の裏の方にヤクシシャンがある。四月八日がお祭りで、もとは町から露店などもきて店を出してにぎやかだった。お祭りの日には何というのかダンゴをつくっておいて、お参りに行つた人に誰にでもくれた。近在から大せいの人が行つて、にぎやかだったが、いまは久保、竜馬のショ (衆) らしいしか行かない。

久保の部落の裏の方にヤクシシャンがある。四月八日がお祭りで、もとは町から露店などもきて店を出してにぎやかだった。お祭りの日には何というのかダンゴをつくっておいて、お参りに行つた人に誰にでもくれた。近在から大せいの人が行つて、にぎやかだったが、いまは久保、竜馬のショ (衆) らしいしか行かない。

ヤクシシャンには、目の悪い人

がよくお参りにきてオガニシヨをかけ、直ったときだと思うが「め」と書いた赤や白のチヨウチンを上げるので、ずいぶんたくさん下っている。

「め」としゅうしたのも上げてある。

子どもが生まれた人で、乳の出ない人などは、ヤクシシャンに供えてあるオサゴをもらって行つて、オカニをつくって食べるといわれ、お返しには米を倍にして上げてお参りすることになっている。

もとは、一人でもかかえきれないぐらいのならの巨木があつて暗かつたが、今は切つたのではない。(竜馬)



お薬師さま (竜馬)  
(撮影 吉岡一峰)



入山神社  
(撮影 後閑比呂子)



久保薬師  
めのオガニシヨバタシ  
(撮影 阪本英一)



久保薬師本尊 (久保)  
(撮影 阪本英一)

### 入山神社

赤浜と岩の平を合せて赤岩といふ。赤岩の鎮守様で神景山ともいう。岩の平(山の神)・赤浜(天照大神)・明賀(明神様)・孤置(赤坂(飯繩様))の四神を、赤浜小学校の裏手に合祀した。

氏子は赤岩全村のみならず、北ノ牧・明賀・孤置・赤坂にまでおよぶ。二月廿七日が祭日、神職が祝詞、修祓し、氏子全員一戸五〇円集め、酒を飲んで親睦をはかる程度。ノボリは三年前まで立てた。久保の人がノボリを立てたが倒れて高压線にぶれて死んだ事件があったので、それ以後は立てない。(岩の平)



(撮影 今井善一郎)

諏訪神社 (村人は入山神社ともいふ)  
祭日、四月廿六日  
諏訪(入山)神社の氏子は入山全村のものである。



正面



仮宮  
(撮影 今井善一郎)

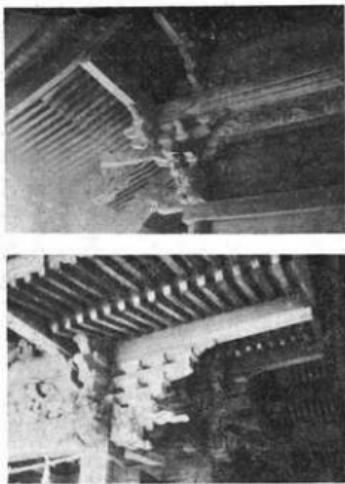
神主は峠の熊野神社の神主。上州側の神主三人が倒れたので、昨年から信州側の神主に頼んでいる。  
五月十五日は峠の熊野神社の祭日で、この村殆ど全戸から一人ずつがお参りに行く。(芦田谷)  
宗源宣旨  
入山の諏訪神社にある。京都吉田家より貰つたもの。



(撮影 今井善一郎)

## 諏訪神社本殿の構造

若宮の諏訪神社は輪宮の中に本社があるが、構造は徳川末期かと思われるが緻密な立派な御宮である。



(撮影 今井善一郎)

諏訪神社の彫物  
例えば鷹の羽毛などは木の杢目がうまく利用されて美しく彫り出され  
ている。(若宮)



(撮影 今井善一郎)

## 若宮八幡

昔はこの部落全部が峰岸姓だった。

明治以前のこと、或時盗人がきた。

「神様が悪太郎に連れて行かれるぞ」

と神様がいった。この声が聞えたので

村人全部出でみたら、御神体がなくな

っていた。これが高崎の農園の若宮八

幡になったという。農園の峰岸姓はこ

こから出たといい。盗んでいったので

峰岸姓を名のらねばならないといつてある。(新井)

## 二 講

## （）御獄講

高岩の上には御岳神社の石碑があり、五月五日には鎖を伝って頂上にのぼる。下の黒宮では火渡りの行事がある。ヌルデの木をもして、そのオキの上を渡ることをゴマという。村の人が集まって拝んで、お経を上げていると、神様がのる人がいる。その神ののった人がオキの上を渡る。その後に統いて渡ると、オキも熱くはない。みな渡り終り御岳経といふお経を読むと、のつた人も常人にかかる。火渡りをすると悪病を払うといふ。

また病人などあると、御岳を頼めといわれ、みてもらつた。よく神の人は、昨年八十八才で死んだ上恩賀の佐藤元作さんがあり、この人は戦後十年ぐらいの間はよくやつた。のせんには下恩賀の佐藤国太郎さんで、先年七十才余で死んだ。当時は、この人を先達として、木曾の御岳に、九月に登つた。部落中が一つの講社となつて。

高岩には七月七日にも登った。ミチガリをして、オコロモガエもした。紙でハイシン（御幣）をつくり、御岳・白神・八海・不動・天狗等に捧げて、古いものととりかえてくるのである。十年ぐらい前まではしたが今では全然しない。

高岩は、赤岩・白岩の二つの岩塊に分れる。また白岩を男岩・赤岩を女岩という。登はんの難易によってつけたといふのである。白岩の前方に行者穴がある。昔、行者がここに住み、煮たものは一切食べず、そば粉のみで生きていたといふ。部落内に行者様という黨があるから、話はその黨のことかもしれない。（恩賀）

恩賀の高岩（一〇八四四）の頂上にオンタケさんの石宮が祭られていて、もとはお祭りもあった。石宮は切石の大きいのが刻んであって、あんな高い山の上で刻めるものでなく、石もあの山のものとはちがうので今までどこから、どんなやあいに上げたものか不思議とされている。現在は国土開発に買われてしまったので、お祭りも聞いたことがない。（遠入）

若いころ火渡りをしているのを見たことがある。

病人が出て長く寝ていたり、ママが続いたりしたときなどやつたよう

だが、メリデの木を切って高く積み上げておき、火をつけて、シントサン（法印）と一緒に火のまわりを歩きながらお経のよなものを唱えてお祈りし、燃え切ってオキがしづまつてからスゲエがするようになるとその上をとばないように歩け（走らないよう）といって歩かせられた。とぶと火がおきて熱いからで、メリデの火は勢いよくても火力は弱いし白く灰のよなのがかかるから歩けたんだと思う。（狐蓋）

オンタケ講の火渡りは、メリデを積み上げ、センザ（センダツ）が先立ちでお経を読み、火が終るころ火をわたる。そのころは、センザは神さまがのりうつっていて、火をはたいておいて塩をまき、その上をハタシでわたる。顔は真赤になるほど熱いが、足の方は平氣だった。（小柏）母の産後が悪かったとき、ゴヘイを切ってお線香をたて、オンタケ

さんを一心に拝んでいると、不思議なことに線香の煙がゴヘイにすいつくようになって、その時には母の腹の痛いのが直っちゃった。ちょうど胃けいれんのようなものときたったのだろうが、なんとしても不思議なことだった。（小柏）

オイシカジ（御石加持） 子供の頭のことだったが、オフクロが病気のときオイシカジというのをやつた。昭和二、三年のころだったと思う。川から丸い、きれいな石をいっぱい拾ってきて、いろいろ火をたき、カギサマ（自在かぎ）に鉄なべ（ボーロク）を下げる入れ、オンタケ講の行者——シントサンがお祈りしながら石が赤くなるくらいにいり、そのころにはシントサンは神さまがのるというのか「フレテオガム」ようになり、そのうちに赤く焼けている石を素手でつかんで座敷中に投げつけてお祈りをした。その座敷には不淨の人は入れないでやつたのだが、ヤケドもしなければ覺もこげもしなかった。

病人を直すためとか、ママをくつたときなど、長い病気や災難つづきの時にオイシカジをやつたようだ。（狐蓋）

若宮・新井・芦田谷・岩の平・明賀・赤浜等で盛に信仰した。  
中坐 上原才太郎（明賀）  
前坐 柳沢 定吉（若宮）  
中坐 佐藤 元作（恩賀）  
前坐 佐藤国太郎（下平）  
中坐 半田小太郎（下平）

等の人々が熱心におがんだ。（赤浜）

ナカザには大体三十才以上の年令の人で、眞面目で気持のよい、正直で信頼のおける人になつてもらう。めぼしをつけて交渉してなつてもらう。中には頼んでも受けない人もある。どこの家人といふように血統的には特別はない。性質の遺伝の要素もない。  
講に加わる人はやはり信仰の厚い人である。これは代々加わるのが多

い。

またナカザの人は、政治的に尊敬されるというわけはないが、馬鹿にされることは絶対にない。有難がられている。欲をかく人、金や資格をもとるという人はならない。堅い一方の人で、眞面目の意味で尊敬される。メエザは神に何うのだからこれがナカザになることは絶対にない。

メエザはナカザ以上に神様を信する信念のある人がなる。

修行は川で水をあびる。どんな寒中でも上の恩賀・明賀・赤浜・岩の平などそれぞれ川があり、川のない中の村では井戸の水を浴びる。神を拝む家は廻り番である。始める毎日夕食後行場で水をあびて宿に行くのである。こもり堂は別にない。日が決つて、今夜はAさん、明日はBさんの家と動く、その家では拝んでから茶を出したりして経費もかかるから、講員の家を代る代る移るわけである。修行の間、断食はしない。

また滝にあたる。この附近ではこの下にある不動滝にあたり、一生懸命祈る。どんな寒中でも、全講員、素裸になって浴びる。勇気がないと浴びられないことである。

### 折 祷

メエザは床の間に神様に向って、御幣束をもって、ナカザの人の前でサガクジを切る。ナカザはメエザの後に幣束をもって坐るわけである。ナカザに神様がのるまで拝むのであるが、一日に一時間半位、一ヶ月位は拝むだけのことである。身体がブルブル震える位にはなっても、神様がのるまではかなり時間がかかる。なかなかタチビラキはない。

神様がのるとビッ飛び上がる。

お経はミソギの祓い、不動經、六根祓いなどで、力を入れて皆で合唱して拝む程神様がのるのが早い。これをカギツケルという。カギツケの間、講員の人は普通の食事だが、拝む人は何もたべない。酒を飲んだりするのは終えてからである、ナカザは疲れるから、神がのつて下つてからもんでもやる。のつてくると自分の事はわからなくなつて

しまう。

経の本に書いてある摩利支夫、八海山の御神言をおがむ、メエザが○

○がお下りになったか、と聞くと、○○神がのったという。然し普通は國常立尊、不動さんなどがのる。決つているようなもので、神言を知つている。神様をかえすのは、メエザを初めまわりの人がかえす。ナカザの人にかえせない。

ナカザは三人いた。ナカザを作るのに失敗したことはない。

ナカザの寿命は平均寿命に対して、長生きするようにも考えられる。

昨年死んだ人は八十九才、一人七十五才、一人は五十才で死んだ。身体をこわすことはない。寒中水を割つて冷たい水を浴びて鍛えているので、無理のようでもうではない。

木曾の御獄に三回登つたが、一番行った人は十回以上行ったであろう。経を拝み、先に行つた人に頂上の安否をきく。早く登れとか、荒れるから途中の小屋に泊れとかいわれる。御獄には徒步で近道を知つて、岩田一和田岬一諫訪一明神峠を越えていく。近道は一般道の半分で行けるという。木曾の大滝などで浴びて行をしたものもある。

木曾の山に登つても、ナカザの人は歩くのが速い（マエザの人とも違う）。ボーン、ボーンととんで行くようである。

修行のため他の山に登つたことはない。

### 講とケガレ

深い親戚、縁故を加えて、お産、死人のケガレのある人が、講社に出るとその人はオヒマチには出ない。日がたたないとい出ない。こういうのをイミをキテイルといふ。犯罪に對してはケガレの觀念はない。

恩賀では講の祭りをオヒマチという。五月の節句、盆の十六日（これをダイギョウという）に行う。そのとき講中に病人があると医者、薬を神様に聞く。

病人がある場合は、その家で拝む。すると神がのつて病気に対する指示をする、医者の方（東とか西とか）を教え、薬はトリクサでよい薬

があるかと聞くと教える。例えはAとBをどれとか一松の縁をとつて煎じるとかいう。

人間は困ったときの神だのみで、こうした拝みを行うと神託が体まるからよい。医者に見放されたので、神の力でよくなるより仕方がないと、いうとき、余計に神を信仰し、オヒマチでもらつて治ると「講社のおかげで」という。

神のたたりがある程喜ぶ。たたりを除ければ治ると考えるからである。道祖神様、馬頭観世音などがたたっているということも教えてくれ、どうしたら除けられるか方法を教えてくれる。たたるのは神様だけであつたたりを除ける方法を神様に聞くと、コロモガエ（新しい御幣束を切つてかえてあげること）をしろという。そして経文三百巻用意する。ミソギ祓いを百五十巻やれとか、六根祓い十巻をやれとかいう。除けられれば当分気持がよい。たたりを除けられると助かったと喜び、レオヒマチをする。そのときはオヒマチのあと、酒、肴でやり神様にも

講中の人にはナカザの人にやつてもらうことがある。神様が病人の着物を出せといい、呪いをする。

### 火渡り

不動證を唱えつつゴマをたく。講中の人がヌルデの木（ゴマンギといふ）を、一、三尺に細く切つて結え、四十、五十把並べ、火をつけて拝む。即ち火の塊の大きさは、長さ一丈、巾四尺、高さ一尺位で、みんな火になるまでその周囲を廻りつつ、ミソギの祓い、不動證など唱えて拝む。火は六尺ぐらいの上る。

赤黒いオキになる頃、ナカザに神がのつて「御獄さん、清水の祈禱」と大声を出して、ドスンドソンと一番先に渡り、次いで講中の者みんなが渡る。熱いという人は信心が足りないからである。渡り終えると再び全部の人がお話をあげながらまわる。するとまた火が赤くなる。これを

火をケエスという。そして焰が再び立つともう渡れない。

佐藤氏は二回以上火渡りをしたが、一度も熱いことはなかった。他所に行つて火渡りをしたことはない。ナカザ、マエザの人も死んだのに今はやらない。おえてしまった。

火渡りには女も渡るが、ケガレた人は遠慮する。

### お石加持

長く病氣をしていると、それも一二ヶ月から半年も寝ていると、側の人がキツネがついたのかなあと、「オメエどこから来た」あの家はもと狐がついたことがあるからと、つまらないことを聞く。「何かくいたいか」「油揚げくいてえか」これに対し「たべたい」などと狐がついたという。「どこから来た」「そこへ行け」というと、力がなくなっているから這い出す。たもとをみると毛があった。猫の毛かもしれないが狐の毛だという。狐がつくと神様にたのんでオトス。川原で石を拾つてきて、ホーローで石を真赤にやき、ナカザが病人のねてている座敷に手でもって（何ともないという）撒く。その後石が当った所はこげないという。またねでいる人の布団の中にもがらがら撒く。こうして狐を追払う。これをオイシカジという。

### オサキモチ

当地方にはない。甘藷の方には多い。オサキがつくということもない。キツネは利口だから、人についてもまた離れるが、ムジナは馬鹿だから離れないという。迷信はキツネつきも甘藷郡西牧の方が、当地よりもよいいことである。西牧にも御獄講があつたが、ナカザが死んでつぶれた。（岩の平）

### (二) 庚申講

久保、亀馬の十三戸が加入して統いているが、新宅に出たりした三戸は入っていない。

講の用具としては、庚申さんのカケジ（掛軸）、ふつうはオスガタと

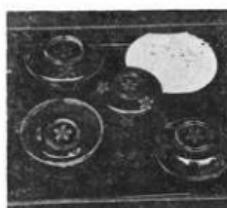


庚申まちの掛輪（竜馬）

（撮影 吉岡一峰）



庚申の幡（わんわん）  
（撮影 岩本英一）



講  
おの  
申  
（撮影 岩本英一）

よんでいるものと、わん・親わん・ひら・さら・が各十数組、講のものとして共有になっている。オスガタと用具は、講員の家を順番にまわして保管し合い、月々の庚申の日、またはサルの日にカケジを出し、保管している家だけで祭りをする。その日は、オマンジニウ・オハギ・コワメシなど、何でもいいからカワリモンをつくって進ぜることになって

いるが、その家の行事で、他の家人たちには関係がない。月が変ると次の家におくられる。しかし

オスガタを動かすには「寒」と「土用」には「動かすと火事がおこる」といわれて動かしてはいけないことが、講員が全員参加するのは十二月になつていて。講員が十三戸なので、一年に二回かかる家もできるが、講員が全員参加するのは十二月の一回だけになつていて。

庚申講は年一回、十二月に全員参

加してもたれる。講の宿の順番は、以前はくじ引きで決めてきたので、おのの順番が固定した。

庚申は「仏」だから、魚なしのお精進でやる。材料は宿から出してや



庚申講用具（久保電馬組）  
（撮影 岩本英一）

るが、米などは少しづつ集めることにしている。講のごちそうは、トウフ・アブラゲ・里いも・ごぼうの煮たもの・きんとん・豆、なますなど七品以上で、それそれを一人前にふつう以上の量で盛りつけで出し、オコワなど、おせんに出されたものは、残らず全部片づけねばいけないことになつていて。

オコワなど一杯目は軽く、二杯目はややそれより多く、三杯目はオタカモリにする。このときは女

シヨがネリツケルようによ盛つてくれるので光の強飯のようになる。このときはまた、誰のでもかまわず他人のお茶わんをとって盛りつけちゃうので、まるで「戦争のよう」さわぎになり、食うには食うが統けて食べずに席を外したり、ボヤボヤしているとおわんをふんだくつて（とつて）山盛りに盛つてしまう。そのためにおわんをふところにかくしたり、ひっぱりっこをしたりするのでおわんのふちが欠けちゃい、ぬりもはげてきたので、昨年あたりから宿になつた家の茶わんを借りて使うことになった。

昔は、何でもよいというので、ボタモチをつくつたり、モチをついて出した宿もあったが、要領の良い人は食べ切らないうちにふところの中へ入れちゃうのでオシイにならないために、モチ、ボタモチなどはやめることにして、ふつうはオコワになつた。昔はオシイで泣いたという話を聞いているが、出されたものが全部食べ切れなければ譲は終りにならないきまりになつておらず、昭和十五、六年ころまではオコモリの意味で宿に泊りこみになつていたが、十七年ごろから泊らないで家へ帰るよう

になつた。しかし

ればいけないといわれている。(竜馬)

### (三) その他の

庚申のオスガタ  
久保電馬(阪本英一)  
(撮影)



戦後の食料難のときでも続けてやつたので、今まで約三百年は統いているという。

この日は、講に入っている家では、魚、肉などのナマグサはすべて食べてはならないきまりで、家中が一日中お精進である。

この日は夫婦寝はしていけない。カタワの子が生まれるという。

庚申さんは百姓の神さまだから、カケジ(掛袖)は猿田彦命だと思う。入るものもぬけるのも自由だが、他の地区がみんな止めた中でここだけ統いているので、一つには片意地もあって三百年の伝統を守るという気持ちにもなつていい。新宅などの百姓をやつていない人——つとめなどは入っていない。

講にオナシユが出てもかまわないことになつておらず、久保、竜馬のことだけなら、講の日にムラウチのこと

をきめてよいことになつておらず。(久保)

保・竜馬)  
庚申のときは、庚申のカケジをかけ、

その前のオゼンやチナブダイの上に、昔は一錢、いまは十円ずつ上げて拝み、それから講を始めた。お庚申は、始めてから途中で地震が来ると最初からやり直しをしなけ

んの石宮がある。低い山なので名はないが、三峰さんとよんでいる。昔から講があつて、現在でも竜馬では十人の講が統いており、毎年代参に一人が行ってくる。時に二人になることもあるが、ある年などは講員賃費が行つたこともあつた。昔は代参に行くときは、行きも帰りも道中シャベルことは禁じられており、三峰ではナマグサは食べない。

三峰さんは「火難、盜難、災難除」の神さまだ。



三峰さんのお札  
(撮影)

竜馬の三室荒神さ

んの上の方に三峰さん

のオカリヤがあり、代参から帰ると

講員が集まつてオカ

リヤを修理し、ゴヘイをとりかえてから

お神酒を上げる。ほ

かの供えものは何も

なく、下へおりてからも特別の行事もない。(竜馬)  
山の上の三峰さんは三部落、竜馬、久保、竜馬の人たちがいつしょに登ることになつておらず、朝飯前に行つてお参りしてくるので、朝飯がちょっとおそくなる。(久保)

この地方には三峯講と城峯講の二つの講があつた。殆ど同じ事をした。昭和の初頭から中止になつておらず、講の代表が参詣に出発すると、講員はお仮屋を作る。代表はお山へ行つて、お大様を借りてくる。これは箱に札が入つてゐるもので、借りて来てお仮屋に入れておく。火災、

盗難、厄病除け等の効験があった。両講とも春四月頃いった。一講は戸から十五戸位でできていた。岩の平は主に城峰へ行った。鬼石へ（當岡、小幡を通り）出ていた。（岩の平）

#### 甲子講

講金をとらない。妙義の中の嶺に行き、一晩泊る。藪が五十貫とりなければならない。ければ、五十粒の藪を借りて来る。商のもとでを借りて来て、倍にして返す。

#### 戸隠講

五穀豊穣を祈る。神主が米一升ずつ集めて歩く。代参の帰りに麻を買つて来る。（下平）

#### 天神講（天神待）

天神講は子ども組の講で、一月二十五日にやることになっているが、最近では、そのころの日曜日にやっている。男の子と女の子では組が違つて、どちらも会費と物（米・ごぼう・んじん・しょうゆ・さとうなど）を出し合つて、一番大きい子の家が宿になつて、その家の母親が手伝つて料理をする。料理の内容は、その時々の参加者の多数の意見で変わらるが、スシや、五目めしなどが多くつくられる。

講が始まる時は、参加者が、一人一字ずつ寄せ書きをする。半紙を何枚もはり合せて長くつなぎ、「奉納天満大神宮」と書き、紙のはしを

のりではりつけ、ひもをつけて竹の棒の先にしばりつけ、天神さんの石宮のところへもつてゆき、立てて拝んでくる。天神さんは、久保の薬師さんとのところにあり、その前で男の子はお神酒を用意して一杯ずつ飲み、オコワなどそのときの料理を供えてからゴフのように少しづつ食べる。女の子はとくりなどに水を入れても行って飲む。

講は、お星と、夕食の二食やることになつていて、宿に泊るようなことはしない。もとは大きい子も参加したが、今は中学生はやらない。また、その年の四月に小学校にアガル（入学する）子は「お客様」といってオヨバレすることになつていて。（久保）



馬頭観音像（坂本上宿）  
(撮影 中村和三郎)

一月二十四日、子供達は毎年宿をとりかえて借りて、天神様のお祭りをする。一人の出し合いは米三合ぐらいとお金は百五十円ぐら（昔は二十銭ぐらい）出す。お星と夜、御飯を食べる。泊らない。天神様へは半紙二つ折にしたのをつないで「奉納天満大神宮」と書いて、下の新井にあるお宮に上げる。昔は男女別だったが、今は一緒にする。三村（新井・若宮・芦田谷）で二十人ぐらいである。（芦田谷）

#### 精進祭り

七月二十七日、組中の人が隣組長の家によって、あり合わせの肴で酒を一升飲む。愛宕様という火伏せの神様を祭る。酒を飲む前に山の神の掃除をしてくるわけだが、戦後は止めた。（小柏）

妙義登山、春の花見ごろ、「二、三才ぐらいの子どもをおぶつてお参りする。やけつり（ヤケド）をしない」という。（小柏）

#### 伊勢参り

代拜が盛んだった。出かけるときは隣近所を呼んで大振舞いをした。家では、屋敷にわらと青竹で三尺四面くらいのお仮り屋をたて、なにご幣束をたて、帰えるまで朝晩オタキアゲをした。帰つくるとお仮り屋は火をつけて焼く、このとき竹のはねる音で、代拜の人が帰られたものという。（下宿）

#### 観音講

入山全体で、馬を飼っている者だけです。寒い頃だった。年に一回ぐらいい、餅をついて、これを馬に食べさせ、自分たちも飲食し

馬の神として、武州の上岡までお詣りに行つた。（明質）

### 十九夜様（十九夜念佛）——お産の神



十九夜さま  
(阪本英一)  
オスガタ



十九(恩賀)  
念佛 十九  
(撮影)

十九夜さまはお産の神さまで、女だけが集まりお祭りをする。

十九夜さんには、小柏から一人で行くが、米二三合（だんご）やすしに使ふと一五〇円くらいが会費になる。朝から宿に行ってみんなで手伝つて料理をする。お昼を食べ、みんなでおしゃべりをして帰りぎわにお盆仏をやる。長くてわからないので聞いているだけだが、夕方おそくなれる。（小柏）

### 十九夜和調

きみょうちようらい　十九夜の  
なむやをないの　かんぜおん  
ゆらいをくわしく　たずねれば  
ちえある人が　あつまりて  
わかき女の　たいやくに  
なんざんよけの　きとうとて  
くみずあらため　身をきよめ

九日九日　おけれど  
とらの三月　十九日

十九夜おねぶつ　はじまりて  
ちえある人も　なき人も  
たがいにさそい　さそわれて

あめのふる夜も　かぜの夜も  
いかなるしんの　くらき夜も  
いとわづたがわづ　はたいなく

けたやおどうに　あつまりて  
わが名を千べん　となれば

はらたつたびに　とがゆるし  
げんざいきとう　みらいまで  
かならずすくい　とらんとて  
だいしだいの　おんちかい  
しちかんおんの　その中に

人の好き好きで何を出しててもよいが、オヨリ、おすしなどのカワリモノをつくつてやる。昼食をやつてから夕方の五時ころまでもおしゃべりしていることが多いという。講の範囲は、久保と竜馬が元で小柏から一人だけ参加している。（久保）

にょいりんぼさつ となれば  
あまねくせじょう すぐわんと  
ろくどうちまたに たちまう  
かなしやにょにんの みのさわり  
けさまできよき はやにこり  
けがれふじょうに さだめなし  
あらいすすいに こほしみず  
てんじんじん すいじんも  
ゆるさせたまえや かんぜをん  
にょいりんぼさつと となうれば  
ながくうてなの くをのがれ  
してめいどへ ゆくときは  
四方の空が くもはれて

ふく風さえも るりのこる

みみょうかんじて てんよりも  
みみょうのはなが ふりくだり

ぜひのこうみょう かがやいて  
花のてんかい さしかけて

十やく五やく まぬかれて  
みぎやひだりに となうれば

はちまんよじょう ちのいけも  
かすがのいけど みてとおる

じごくじごくの もんとじて  
なんなくとおる おんせひに

さきだたまへや 父母も  
われもろともに こくらくへ  
みちびきたまへや かんせをん

ごくらくじょうどの すずしきさ

みょうほうれんげが はなさきて  
十六せかいの しょぼさつも  
十六くようと きょうだらに  
てんよりてんきょう あまくだり  
じゅうにおんがく ねりくよう

いざや十九  
このじょうどへ 入りぬれば  
なかくみらいで うかぶべし  
たすけたまえや みだにょらい  
しくぜんぼさつの ありがたや  
なむあみだぶつ

三月十九日 村の女衆が朝から集まつてや。昔は一軒前、うる米  
斗、小豆五合ずつ出し合つて、米を洗つて乾して、粉にひいて、ふかし  
てついてオマルにした。あんを入れて、またまんじゅうもつくり、これ  
等を重箱に盛り合わせて、一軒前二十七八個にし配る。子どもたちに  
も食べさせて帰してから念仏をする。

念仏には彼岸念仏、十九夜念仏、善光寺様、子ども念仏等がある。こ  
れ等は比較的新しく伝えられたものだ。この村から嫁いだ先の下仁町  
八川に念仏の上手な婆さんがあって、この村でもした方がよからうとい  
うことになって、そこから教えにきたのだ。その婆さんは大変上手であ  
つた。

最近は少しずつ衰えてきたようだ。（恩賀）

十九夜様はお産の神様という。旧の一月十九日、月が上るまでお日待ち  
して、すしなど御馳走を作つてたべる。米を出し合い粉にして団子を作  
る。

村中の女一戸一人出て、宿は巡番であるが、子供が出来る人の家を宿  
にしたり、またお産が軽くすんだのでお礼に宿をする場合もある。  
(芦田谷)

(三返ゲー・シ)

(恩賀)

米粉、小麦粉でオマルを作り、月の上るまで起きている。これを信仰すると自分の思うことがかなうというが、女としての遊びのようでもある。

(吉田谷)

## お念佛

不幸のあった場合、会葬の夜、一戸一人ずつ女が出て、またお彼岸の中日に、年忌の当った家で御詠歌をあげた。(岩の平)  
村中一戸一人、春秋の彼岸や不幸のできたとき、その晩と翌晩に行う。念佛が終るとその主人が御馳走してくれる。  
念佛は「父(母)が亡くなつて某年たつたので。」といって頼む。(芦田谷)

下仁田町の西之牧には偉い念佛の先生がいて、その師匠の碑が建てられてあるくらいである。この地方の念佛も、この師匠の弟子たちから教えられたのである。恩賀の方はナカマルから教えてもらつたが、こちらはヤガワのタカダテの、おげんさんのお母さんが来て教えてくれたものだ。(明賀)

## 彼岸念佛

帰命頂礼 マイ年ノ

オシガンサマトテ春ト秋

(ナムアミダブツ ナムアミダブツ ナムアミダブツ――) = 三返ゲー・シ

ゴセンゾサマガ マシマシテ

シガソ七日ノ ソノウチハ  
(三返ゲー・シ)

チャトウ チヤムケモオロカナク

コウハナタテテ エコウシテ  
(三返ゲー・シ)

ゴセンゾサマノ ゴユサンデ

貴明ちょうらい御不こうの  
此の世の別の  
死での世い だびの道  
だびの道とは 申せども  
じぞうばさつの みちびきで  
きょうかたびらも きられしが  
六道錢や ずだ袋

わらじいそいそはき給い  
あとへ一足 さきに踏み

金剛杖を さきとして

此の世でおんそ えんどうし

はたてんがいを さしかけて

どちらみよははちで 送るなり

野邊までおくる かえるなり

十三仏もかけてある

前に香花立ちならべ

七日七日をえこうして

四十九日が其の中は

百七ほさつが四五なさる

九十九えんの仏ぼさつ

死の出たたびじもまろいなく

ただ一すじにまいるべし

(下平)

(下平)

貴明ちょううらい有がたや

月々まちたさんやまち

とりわけ正月一日は

みまちたちまさんやまち

川のせに立つ屋根むねの

実る一心のささき水

鳥のこくから犬のこく

いいねのこくとなりぬれば

此の世のかんもじょうじして

大願成じゅ致すべし

寺送り

貴明ちょううらい我が親の

御寺まいりがおこのみで

きよかたびらにもちころも

寺の大門おわり上げ

御ねり上げたるいとくには

小金の御堂立ち

西なる御堂見てやれば

しゃかとだるまがお立ちある

中なるお堂見てやれば

二人の親のいはい立つ

次なる御堂を見てやれば

我等ふうふの住なす

もん平

貴明重采 申しきて

御庭はるかにながむれば

(下平)

(下平)

切りしばあつくおしきある  
石だん高くつみ上げて

もん平すじょがお立ちある  
前に折花香をもり

御きょうくんじて花ぶりて  
もうじやも我等もうかぶべし

十六日  
きみようちょうらい毎月の

十六日に集りて  
お念仏こうぎょうなし給ふ

これもまことにごぜの為  
お念仏申したりやすくには

冥土へおもむくその時は  
みだのさんぞがましまして

みちびき給へやありがたや  
極樂淨土の四方門

一度にさらりとおしひらき  
老若男女に至るまで

たすけ給へやみだ如来

(下平)

坂本宿の講

(明賀)

頼母子は非常に盛んだった。ことに信越線開通の疲弊によつて生きる道を失つた宿の人々は、金融組織として頼母子講をつくり一時は宿中にたくさんできた。十十五人で組をつくり、親になった者から掛金を受取つたが、その時宿は親の家でされた。多く一飯を振舞うのを常としめた。講ではしばしばセリをやり、高くセツタものに落ちた。講の組織員は配当を楽しみにしていたものである。大体定期が決まっており、毎月一回ずつやられた。明治中期から大正頃までが特に盛んだった。落ちる



念仏供養塔（坂本字原）  
(文化8年)  
(撮影 萩原進)

百万遍供養塔（坂本字原）  
(撮影 萩原進)

金は大体四、五十円程度であったがみんなのためには助かったものである。ほかの宗教的な講は数も少なく熱意もなかつたが、頼母子講（無恩）だけは実際にうまくいったものである。（坂本字原）

本 石尊講 神奈川

県の大山の阿夫利神社の石尊さまの講があり、石尊講とよ

とが阿夫利講とよ

んでいた。各戸一

人ずつ出て毎年七月二十八日に集まりをやった。祭の日は、四間ぐらいいの竹竿を四十二本そろえてポンデンをつくり、川へいってこれを立てて水浴びをした。これをすると厄除けになると信じられていた。終ると座敷をひらいて祝つたが、女手は一切借りないで男衆だけでウル米二合とモチ米五合を揃出しあつて餅をついて食つた。宿は廻り番であった。「宿ミソ、木損」といわれ、宿に当つた家はミソや薪木はその家の損とされた。祝い座敷は星食であった。餅はアソブにしてそれぞれ土産として自宅に持ち帰つたものである。石尊講は現在はやらない。（坂本字原）

庚申講 原部落にお庚申さまをまつる庚申講が一組あり、一組の人

数は二十人ぐらいであった。料理は精進料理で宿にあたつたものがした。最初米の飯が出、次ぎにヒエの飯が出、最後に高盛り飯が出された。現在はもうやつていない。（坂本字原）

三夜講 むかしは旧暦でやつたが、現在は新暦の毎月二十三日の夜行なわれる。女衆の講は男は参加しない。幸い三夜講があるので信仰と結びつけてこの夜講会合を一べんにやつてしまつて便利である。集金もこの日にやることが多い。むかしはこの集りの時に念仏をやつたが今はやらない。団子をつくつたがそれも今は略されてしまった。如意輪觀音さまを祭るのだと云う。「サンヤサン」（宵の明星）が空へあがると拝人で帰ることになっている。（坂本字原）

御嶽講 横川に「文さん」という御嶽教の行者がいて、信仰するものだけが集つてやつたらしいである。（坂本字原）

その他 碓水蛭熊野神社の峠講はあまり盛んではなかった。むしろなかつたといった方がよいと思う。ほかに相州大山の阿夫利講、伊勢講、棟名講、三夜講といった講などはほとんどない。（坂本字原）

（資料）思質念仏

かいこうじょうこううけたつこう

こうみょうおんたいへんじょうかい

くようじっぽうむりょうぶつ

けんもんふくみしようぢやくめつ

かしゃくしようぢやうしょやくこう

かいゆうむしとんぢんち

じゅうしんぐいしょりょう

じゅうしんぐいしょりょう 下平

しつさいがこんかいさんげ

ありがたやじつけほのかずかず

かみほんせんたいしゃくの

下平）

りかいりゅうごうそうかいの

(そうちな 下平)

にほんのぶつじんのこりなく

このねんぶつのどうぎやうは

(どうじょは 下平)

もうすわれらもきくひとも

心をしずめておあわせ

なむあみだぶつともうすべし

こうみょうへんじょうじっぽうせかい (下平欠)

ねんぶつすじょうせつしやふしや

なむあみだぶつ……

がんにしぐとくびょうどうしん (以下下平欠)

いつさいとうはうばだいしん

ねんぶつどうぎょうおうじょあんらく

なむあみだぶつ

ふどうそん (十三四)

きみょうちゅうらい ふどうそん

しゃかも(ひ)にょらいにちえもんじ

ふげんばさつにぢぞうそん

みろくばさつにやくしそん

かんのにせえしにみだにょらい

あしくだいにちこくうぞう

じゅうさんぶつのそんたいは

おののはいたてまつる

ひがんねんぶつ (彼岸念仏)

きみょううちゅうらいまいねんの

おひがんさまとてはるとあき

ごせんぞさまのましまして

(お通りで)

ひがんなのかのそのうちは (欠)

ちやとうちやむけもおろかなく

(つゆぜん供養したならば 挿入)

こうのけむりでおくりやる

(にうかぶべし)

ひがんねんぶつ

きみょうちゅうらいおひがんの

ひがんねんぶつこころざし

こころざしたるおかたには

いや (一) にくどくをあたえべし

に (二) にはこしそんはんじょして

さん (三) にさいなんみわけて

めいどえゆくときは

たたてんがいをなびかせて

ごくらくじょうどえりたもふ (う)

あさま

あさまがおちぞうさま

なにとてしゃくじょおふりやる

おいもわかきもみなよりで

おねぶつもうせとおふりやる

おねぶつもうせとおふりやる

こがねのおみみどがみつをたて

ひとつのおみみどにやちちこさま

ふたつのおみみどにやははござま

みつつのおみみどにやわかふうふ

なむあみだぶつなむあみだ

あさとくおきてにしみれば  
さんどのみださまおたちやる  
おがむとすればくもやかかる  
くもがじやけんでおがまれぬ  
なむあみだぶつなむあみだ  
ただいまもうしたおねぶつを  
こがねのおぼんへつみあげて  
あややにしきをうちかけて  
みださまおまえにさしあげて  
おいとまもうしてゆきもどる  
われらもかえろうやどやどえ  
さらばさらばのひとまごひ  
なむあみだぶつなむあみだ  
がんにしぐどくびょうどうしん  
いつさいとうほつぼだいしん  
ねんぶつどうぎょうおうじょあんらく  
なむあみだぶつなむあみだぶつ  
ひがんねんぶつ  
きみょうちゅうらいおひがんの  
はあきひがんのそのときは  
ごせんぞさまがましまして  
ひがんなのかをいこうして  
ごせんぞさまがおよろこび  
しそんはんじょうまもるべし  
せんこうじ  
きみょうちゅうらいせんこうじ  
さんごくしちのみだにょらい  
がつかいちうぢやのこ(二)こんりゅう

えんぶだごんのみほとけは  
はくさいこくでしょうめいで  
わがちょうにてはよしみつ(義光)が  
さんせのごえんのみほとけは  
しゃかむにょらいのごかいげん  
もりやのだいじんあくしんで  
つのくになにはのほりいなり  
なんばがいけえしすめしは  
こうみょうなおもかがやきて  
ほんだこたろうよしみつが  
れいきゅう(ちゅう)みたつるちよくをうけ  
づ(る)しおきめてわよかけで  
おいたてまつるしなのなり  
かわなかじまえあんちして  
ひとたびまいるともがらは  
にょらいのごほんをいただき(い)て  
にょらいのごえんをむすびては  
またのものよはなだとせん  
たまのうてなもついつか  
のこりとどまるひともなし  
やどかりのよにゆめさめて  
ろくぢのみょうじをとなえれば  
れいきゅう(ちゅう)よむねにはぐんじして(にもくんしして)  
にじゅう(二)ばざつおくびくい(おんがくと)  
しうんたなびくれんだいもん  
(おうじょうじょうどにいたるまで  
じゅうあくごあくのざいにんも  
ひきとりたまえやくらくえ  
挿入)

たすけたまえやみだによら

ひがんねんぶつ（とうば）

きみょうちゅうらいもうしきて

このおいへ（おんぐ）をながむれば

おくのひとまでこだ（た）いしょ（しょう）の

ごいちもんじがあつまりて

おようずくしのありがたさ

いつせさんせのことがう

たてた（立ては）おうちがごはんじょう

ことわねんぶつ

きみょうちゅうらいじぞうそん

きのかわらのものがたり

きくにつけてもあわれさよ

ふたつやみつやよついつつ

とおにもたりないおきなごが

おやのおんじょうをおくらずに

してめいどえゆくときは

ぢゅうにほさつがたちよつ（り）て

ぢぞうばさつがかちをとる

しゃか（ぱ）とめいどのかいなり

さいのかわらえすられて

ひろきかわらえあつまりて

こずなよせてはすなあそび

こいしあつめてとうをくみ

一じょくくんではちちのため

一じょくくんでははのためと

さんにきょうだいわがためと

なみだでくみしそのとおを

かしゃくのおにがあらはれて

つみたるとおをふみくやし

またもやつめとせめられて

はなぞのやまえとかけあがり

あとよりぼだいをとげしこは

いろよきはなをつむとかや

あとよりぼだいをとげぬこは

はなもひとつみためず

ひのいりあい（と）のそのころは

ひがしえむいてはちこいし

にしえむいてははこいし

こひしにいしとなくこえは

うええはせじょうのそらまでも

したえはならくのそこまでも

ひびきわたるにかぎりなし

そのときのけのじぞうそん

あめみいでさしおもいつつ

やれなんじらはなんでなく

われらがちちはおれるなぞ

るりのころもでいだきあげ

おくれしかみをなであげて

ぢひのおんめにおんなみだ

よるはころものおんそでを

よきやふとんとおもひつ

なきなきねむるあわれさよ

それをおもえればあけくれに

こをさきだしをおやおやは

にしをむいてはてをあわせ

やぞうばきつとおがむべし

十六日

きみょうちゅうらいまいいつき  
ぢゅうろくにちにあつまりて  
おねぶつこうぎょうなしたまう  
これもまことにこぜのため

おねぶつもうしたりやすくは  
めいどえおもむくそのときは

みだのさんぞ(ど)がましまして  
みちびきたまえやみだによらい  
こくらくじゅうどのしほうもん  
いやどにさらりとおしひき

ろうじゃくなんじょにいたるまで  
たすけたまえやみだによらい  
かんせん

かれたるこえだにさくはなは  
はなはちりてもはるさけど

いきてかえらぬしでのたび  
こしいおややつまやこも

しょじのたからもうちすてよ  
ひとりゆくみのあわれさよ

たすけたまえやかんせん

きみょうちゅうらいかんせん

かれたるこえだにさくはなは  
はなはちりてもはるさけど

いきてかえらぬしでのたび  
こしいおややつまやこも

しょじのたからもうちすてよ  
ひとりゆくみのあわれさよ

たすけたまえやかんせん

きみょうちゅうらいおぞうそん  
なのかなのかにいこうして

四十九日となりぬれば  
わらじはばきのひもをとき

四十九日

ずやかんむりぬぎすてで  
あなたのこいけでみをきよめ

みだのじゅうどえまいるべし

たすけたまえやじぞうそん

やくしそん

きみょうちゅうらいやくしそん  
これにてしばらくながむれば

かずあるはしら(拂人)まるばしら  
ごう(御)てんじゅはしきにて

さんじゅうではりくるみ  
(だれきのはなまでも)

みなしんちゅうではりくるみ  
まえなるらんまのほりものは

くぐやくほうう(お)かりうじに  
これにましますごほんぞんは

まいるどうしゃにふくさづけ  
たすけたまえややくしそん

じふこう

きみょうちゅうらいじふこうの  
そぶつだんをはいすれば

十三ぶつがかけてある  
前にはこうはなたてかざり

四十九えんがぶつばさつ  
ひやくしちばさつがひなさる

七日々々にえこうして  
しでのたびじもまよひなく

ただすみやかにうかぶべし  
たすけたまえやみだによらい

一しょぐるま

きみょうちゅうらいしょぐるま  
してこしょうになるならば  
のせてひきたいこしょぐるま

ひきひいてはちものため  
ひきひいてははのため

ひきわがためと  
くらくじうどえひきつけて

こがねのだいぼくうえてある  
えだのながさやはのひろき

はちまんよじょうもはばかりて  
はるのひがんにはなさして

あきのひがんにみがなりて  
そのみをひとつぶいただけば

せんにちせんやのりきとなる  
ふどうそん

きみょうちゅうらいふどうそん  
みねよりおつるたきのみず

ちゅうごうしごうのそのひとを  
むすびとどめるかみもなし

ましてにんげんさだめなし  
おいきがあとにこりては

わかきがさきにたつこともある  
なんとちぎりしおやこまで

しようめいかわればおそろいや  
いややのやどもかきづして

のべえはやくとともにをする  
のべえはやくとともにをする

のべのおくりにぎやかよ  
のべからさきはただひとり  
ひとりゆくみのそのつらさ  
あとをみれどもこえしれず  
まえをみれどもかげしれず  
あめかぜあらしでみちみえず  
なみだおさえてしじんたつ  
たすけたまえやふどうそん  
ありがたや

きみょうちゅうらいありがたや  
あさひだいにもこくうぞう  
につこうはるなにいぞほこね  
ぎおんきよみずかもかすが  
びしゃもんぜんのまえだちに  
てんよきちじょといふほとけ  
ぶんぶせかいのためじやとて  
あまのゆわどえこしをかけ

ざんのちゅうしにぎんのだい  
かみおんでんのおゆわいで  
じきとうおねんぶつありがたや  
ありがたや

きみょうちゅうらいありがたや  
にぎのひがんのおちゅうにち  
みをしじんにこりをとり  
あさのむつからむつまでも  
しんふらんにざをしめて  
ねんぶつとなえるその人は  
ごしきのいろがたなびきて

これらに加えて、  
これらに加えて、

十九夜

きみようちゅううらい十九夜の  
なむやによいりんかんせおんね  
ゆらいをくわしくたづねれば  
きいあるひとがあつまりて  
わかき女子の大役に  
なんざんよけのきとうとて  
しみずあらためみをきよめ  
くにちこここのよおけれど  
とらの三月十九日

十九夜おれふべはしまりて  
きいあるひともなきひとも  
あめのふるひもかぜのよも  
いかなるしんのくらきよも  
いとはずたがはずたいた(な)く

十九復どうえあつまりて  
わがなをせんべんとなれれば  
はらたつたびのつみほどし  
げんざいきとうみらいでは  
かならずすぐひとらせんと  
だいしだいもおんちかき  
七かんおんのそのなかで  
にょりんほざつととなえれば  
ろくどうのちまたにたちたまえを

かなしや女人のみのさわり  
（血の池じごくえたちいでて  
又も女人の身のかわり）

6

あらいそぞしてこす本  
てんじんちじんすいじんも  
ゆるさせたまえかんせおん  
によいりんほさつとなえれば  
ながく(や)うてなのくのがわ  
してめいどえゆくときは  
ふかきさんすをあさくみて  
しほうのてんもくはれて  
ふくかぜさえものりのこえ  
しきょくうくんじてんよりも  
むみょうのはながふりかかり  
じひのこうみようかがやきて  
はなでんがいさしかけて  
ちゅうあごくあくもまぬがれて  
みぎとひだりにともないて  
はちまんよじんのちのいけも  
かすかないけどみてとおる  
ちごくちごつのもんじて  
なんなくとおるおんせいも  
さきだちたまえ父母の  
われもろともにごくらくえ  
みちびきたまえありがたや  
こくらくじょうどのゆたかさよ

みょうほれんげのはなさきて  
じゅうまんよじんのしょばさつも

### 三 山の神・十二講

正月十七日、山の神をするから来て下さいといつて呼び集める。宿では大山祇命と書いたかけじをかける。よつ膳で出したが今はやらなくなつた。怪我をしないようにといつて十七日には立ち木を切つてはいけない。ユミハリギといって分れてくつ木、さるすべり、もみじは山の神様の遊び木だから切らない。東かも枝、西まと木、三本とも負けず劣らず大きくなつた三つ股の木も切らない。山仕事をするものは朝から汁かけめしはしない。どうしてもする時は、お汁の方にめしを入れる。

(下平)



山の神のオヌガタ  
(撮影 阪本英一)

庚申待にはこれはたべない。(恩賀)  
現在は正月、三月、十一月の十七日の晩に行なうが、昔は十一月から三月まで毎月行なつた。宿を順番にきめて、米などを持ち寄つて、宿で白飯、豆腐汁をした。昔は子供たちまで村中全部が集つて飲食したが、今は主人だけである。掛軸を出して供えものをする。必ずサンマかイワシ等を供える。供えたものは、参会者が、一箸づつでも必ず食べれる。(明賀)

十、十一、十二、一、二、三月の十七日が祭日。冠をかぶつた人が狼を引く國の掛軸をかけて祭る。山で怪我をしないように、山の木が大きくなるようにと折つて、鉄砲ブチをする人や山仕事(製炭、木材切りなど)する人達が祭る。

神様は石碑に「山の神」と刻んである。

祭の宿は巡査制で、夜男の人が集つて、酒を飲みながら祭る。また村中の子供を呼んで普通の御飯、魚などをたべる。石碑には宿の主人が赤

飯、魚一切(イワン、サケ—ニコマタギーなど)を供える。(岩の平)  
炭焼や山仕事をする人達の信仰する神様で、一月十七日に村中が順番で宿をきめて、そこに集り、お祭りをし御馳走をたべる。御馳走は、塩引(皿)、油揚(平)、豆腐の味噌汁(わん)、其他コンニャクの白あえ、煮豆などがである。

村中の子供全部を夕飯により、子供が帰ると大人がきてお酒を一杯飲んで炭焼の研究、農産の種の話などして、御馳走を食べ和氣あいあいの中に解散する。

今やっているのは新井・若宮・芦田谷・狐萱・赤坂などだが、子供はよばない。

山の神は大山祇の命、山犬がお使いである。

伐つてわるい木は、弓張り木、これは元が一つで別れて一本になつていて木のことである。又三つ股の木も伐るのをきらう。伐つてはねられて死んだ人が明賀にある。(赤浜)

春の十七日だけである。

庚申待も昔はやつたが、暮の十七日の山の神の晩に来年の山の神と庚申待の宿を決める。どちらかを選んで、くじ引きしてきめる。

庚申待も、山の神と同様にするがただ山の神が尾頭つきを食べるのに

昔は山をやったので、十一月、一月、三月の十七日にお祭りとした。今は十一月、三月の二回、村の人が一戸一人、米五合位もって宿の家へ

より、御馳走を食べる。酒・肴・肉などたべる。肴というものはキンピラ芋・厚揚・コンニャク・チカラなどでその後で夕飯を食べる。酒は宿の家で二升ぐらい買う。床の間に山の神の掛物をかけ御線香を上げて拝む。(芦田谷)

山の境界、尾根にある。石宮のあるところもあり、山に行ったときに拝む。男女衆が寄つて飲み食いする。昔は子供もよんだ。宿は巡番。

祭日、十二月、一月、三月の十六日、米を五合ずつ持寄り、御神酒代として昔は二~三錢持寄りあとは宿でもつた。ネコ足膳に黒塗りの茶碗で御飯をオツコモリに盛り、これをゴフクで皆で分けてたべる。昔は一戸の主人にオシイ(強くすすめる意)してたべさせた。オシイをしてたべられないのをたべさせるのを喜んだ。うんと食べゴー仕事をするようとの意である。

祭神、山仕事の守護神とされている。オテング様とは違う。炭焼き、マキ切りの職に従事する人が信仰する。正月にはオシタメを山の神の分として供える。(新井)

狩獵の人は十一講をやつた。十一講は山の神だといつてはいる。坂本では庚申講のことも十二講とよんでいる。山仕事や山林業をやる人が多く組織している。庚申講は十一~三人がヨリでやり、猿田彦命の掛軸をかける。高盛り飯を食う。(坂本)

十一月から四月までの毎月十一日に十二様をまつた。主に山小屋で馬方などもよんだ。大きく祭るのは十一月と正月の初十二講である。餅は醤油樽のまわりに三本タイをうつてしばって白のかわりにしてついた。最近はない。大正四年の秋に鳥淵山でした。三十人ぐらい集つたので二斗もついた。白米をたくとき、ふきだしたら湯をしぱり、スリコギでついておき、きり株の上でヨキでついた。ナベで砂糖

味噌を煮て、それをつけて食べた。餅を切るのは糸できつた。大根の輪切りのような形になつたもの。

ゴヘイ餅・バンダイ餅と同じような方法で飯を煮、釜の中でシリコギでよくねりつぶし、ナラの木の一只五寸ぐらいために切つたものを割り、それによつた餅をはりつけてゴヘイの形にし、いろいろのまわりにつきさしあぶり、味噌をつけてはあぶり焼いた。一人五合ぐらいはゆうに食べられるほどうまかった。この時山の神に一本あげる。雨の日などによくした。(道全)

山の神の祭りは、正月、三月、十一月の三回あって、いつも十七日が祭りだが、十六日に宵祭りの形でやる。部落に石宮があり、そこでオミキを上げ、オカシラフキを上げてから講が始まるが、宿がきまつており、宿の家すべてを負担する。本講でヒラ・ツボ・汁・肴・飯をもり、オミキを一杯ずつ(重ねる)まわしてからオカンをしたものが出されて飲食となる。(赤坂)

山の神の祭りは年に四回あって、十一、十二、一月の十六日で、二月がないのはこの頃雪が多くて炭もやけないからやらない。宿はまわり番で、村中から一戸一人は出ているから、「ケエヤク」のようなもので、このとき必要なことはきまる。三月の山の神のときにはPTAの役もきまる。ふつう米五合ずつ集めるが、あとのものは宿で出してやる。

この四回のほかに炭がうまくいったとき、高値で売れた年など四月ころもう一回やるが、不淨のあつた人は山の神には参加しない。(狐萱)

山の神は男の神さまで、十二月、一月の十六日にやり、久保、竜馬は別々にする。久保は五軒で寄つて山の神のカケジ(掛け)をかけ、カケジの前に頭を下げて拝んでから始める。宿はコブチマワリ(毎戸順に)なつており、餅米だけは集めるが、他は一切宿が負担する。さしみ・煮魚・やさいの煮つけなどをダシホーケ(出し放題)、酒は一升といううことになつてゐるがノミホーケ(飲み放題)といわれてゐる。男のいない家は女ショでもよい。(久保、竜馬)

毎月の十二日が十二さまの講だが、むかしは、山事をしている人がよくやっていたが、今は国有林や、何かの山を買って焼き子を入れ、山の中でやるのが十二講となつておる、村ではやらない。以前、炭がよく売れるころは、サトで雪でも降るとウサギでも追つてつかまえて酒を飲み、十二講をやつたものだが、最近は木炭の検査員などを招んで飲むのが十二講だ。(赤坂)

## 山の神の祭り

十七日は木挽が十二講で山の神をまつる。十二日は炭焼きがまつる。

(道全)

## 山の神の好物

山の神様は焼味噌が好きで、「おれのまねをすると貰うするぞ」などと。うますぎて多くたべるからだらうといふ。

山の藤も十二様の好きなもので、きられるのをやがる。昔の人がふじでわらじをつくつたら、天狗様がふじのわらじをはくなといつたといふ。

山の神の御眷族は狐だといふ。山の神と天狗様はおなじだらうが、絵にはちがうよう書いてある。

山の神の絵は、坊さんのような姿で棒を持っている。(道全)

## パンダイモ子

美濃の方や木曾から来たキヨリたちがときどきついて食べたもので、パンダイモチは小屋に住む人のものだから土台のある家に入っている者(住んでいる人)はついて食べるものではないといわれた。だからコビキサマと仲よくして山に入っている人は食べてよいといわれた。

ふかしたウルチ米を、木のかづ(株)の上で、マサキリ(斧)のミネでついて、サトウミソをつけ、火を燃したオキの上に、木をさいてつくたくしにもちをさしたのをのせて、ひらべついたものがガニ色のように焼いて食べるが、ウンマイもんだった。(赤坂)

## 山の禁忌

山の中で根元が三本になつてゐる木があつたら、これは天狗さんの遊び木だから切つてはいけない。これを切ると必ずケガをしたり、ママ(不幸)がおこる。

## 山の石祠

大字坂本字兵庫にある山神様は、三月十二日、九月十二日に旗をあげ(サラシの旗)であつた。石祠の正面には「山神」とあり、側面に「嘉永六歲癸丑三月吉日」とあり、その台石には次のような銘がある。狛節が多かつたことを物語る。



坂本駅狛節中  
渡辺仁左衛門  
佐藤平左衛門  
中村庄兵重可殿  
佐藤平左衛門  
篠 庄之輔  
井田安堵  
井田安堵  
二 (撮影)  
十 (撮影)  
太田藤次郎  
太田藤次郎  
佐藤新之助  
同 物兵重  
山 中 島吉平  
武井忠太夫  
土屋内八  
同文太夫  
羽根石  
佐藤与兵重  
大井忠左重門  
小池小左重門  
中山谷兵重

四屋敷神

稻荷様

十一月十五日、屋敷御稻荷様を祭る。カシラツキの鱈、赤飯を山にあら祠にもっていく。山といつても一丁と離れていない。(芦谷田では屋敷内にあるのが半分、山にあるのが半分である。)

お供えをしてから振返ってみると神様は食へないという。（若宮）

各家庭ではカリヤを作り、平らな石を圓き、赤熱メサシ油あけなど供える。供えると家に帰るまでうしろを向くな、うしろを向くと神様が供物をたべないといふ。(岩の平)

神社の形をした種荷様が赤浜の上原佐十郎氏宅の裏にあり、正月彼が日、初種荷といつて村中の女が集り、団子、赤飯など各人持参しての日に、お茶をのむ。(岩の平)  
神社でお茶をのむ。(岩の平)  
種荷様、屋敷の裏の石垣の上に石宮がある。一日、十五日の月二回オサゴを上る。(芦田谷)

四月二十七日が祭日。甘酒を作りオコワをたいて、神社へ各戸一人ずつ出て御神酒を供えて飲んだ。この稻荷様は正東向き。お董が軽くす

(久保)

オイナリサンのオスガタ(久保)  
(撮影 阪本英一)

向き。お蚕が軽くする。  
鳥居を三つぐぐる  
と、ハンカが軽くする。  
むなどの効験がある  
る。蚕が当るようすに  
コンコンさん（白  
狐）を借りていって  
拝み、あとで二倍に  
して返す。



きいなり(坂本)  
(撮影 井上清)

今から十数年前、わたしの家を不幸がおそった。それは、当時五十才の父が死だし、ついで七十七才の祖父、三十才の妻、生後一ヶ月の長男があつついで死亡、といふことができました。

それまでは、三夫婦そろい、珍しい家庭だ、とまでいわれていたのでした。

妻が死亡したのは、その年の  
月十六日の夜明けらしいのです。

自宅にいたわたしは、用事をすませて、床にはいったのは十二時ころです。どうしたことか、寝つきが悪く、そのうえに悪いやな夢ばかり見ていました。そのいやな夢が、十六日の午前十時ころ現実となつたのです。

それは、こういうわけです。

わたしの家の勝手には、いろいろはあるのですが、その周囲に、妻の両親および近親の人々が六人ほど、青い顔をして難譲しているのです。これは、わたしのが朝がた見た夢なのです。そのメンバーがそつくりそのまま、妻の遺体をわたしの家まで、高崎の病院から運んでくれた人たちなのです。

さて、無事葬式もすませたのですが、淋しさは日に日につのるばかりで、卑怯のようですが、酒でまぎらわす日が続き、時には、お墓までトテツクリを持って行って飲んだものです。しかしつまでも悲嘆にくくれているわけにもいかない立場がありました。

人にたのまれることがあり、わたしもかえってその方が淋しさを忘れることとなるので、そのことを引き受けたわけです。それは、子供さんとの勉強を見てやる仕事です。

その一人、典家の末っ子です。その子の父親は厳格なのですが、母親は眼の中に入れても痛くないようなかわいがりようでした。

その子が、わたしの家に来るのは夜であり、そのうえに山道を二十分も歩く距離にあるので、父親か兄がちよちゃんをつけて迎えに来るので

態になったようです。

そして、ある夜、十時ころのやみ夜のことでした。

父親が、ちよちゃんをさげて、裏木戸からはいって来ました。不審に思い、わけを尋ねますと、「行く行くわけを話しますから、わたしの家まで来て下さい。」ということです。

わたしは、夜もおそいし、山道のことなので、いちおうためらったのですが、わたしの「身上のこと」と関係がある、というので出かけました。

途中、だいたいのいきさつを聞きながら、その家につきました。杉林

の山道は、今考えると、全く無気味でした。

わたしは、母親の前にすわらせられました。すわせられた、といふのは、ほとんど命令的であったのでした。十一、三年前のことなので、記憶ははっきりしておりませんが、その時の状況は次のようでした。

その時の母親の様相は、ふだんと全く異っておりました。

「そこに、おわりなさい。」「お連れしたのはわたしではない。稻荷様です。」

「あなたの不幸は見るに忍びない。あなたの不幸は、あなたの家の稻荷様の向きがちがっているからです。」

「現在東向きになっているが、稻荷様はその家を守るのであるから、家の方へ向なさい。」

「これからすぐ帰り、すぐそうしなさい。もしそうしなければ、あなたの命は、裏木戸をはいると同時になくなるだろう。」

以上のようなことをいわれた記憶が残っています。

その母親は、わたしの家の稻荷様の向きが東向きか、家の方を向いているかは知っていないはずですが、すべてその通りなのです。わたしは、ふたたび家の者につきそわれて帰つて来ましたが、もちろん家にはいる前に、稻荷様の向きをその母親にいわれた通りに変えました。十日ほどたって、母親はもとのようになつたと聞きました。そしてその子供さんは、無事高校に入学できました。

その後、わたしは意識して坂本の稻荷様の向きについて気をつけていますが、家の方を向いているものと東向きのものは、半々くらいのようです。

わたしは、わたしの家庭内の不幸を心配し、信仰してくれたその母親に、いまでも感謝しております。(教師 S・N四十三才)(坂本)

## 五 道 祖 神

—ドウロク神—

道祖神は火の神、子どもの神だといって、子どもが風邪をひいたとき、おさごを持って行って供えた。(明賀)

峠では、正月十三日に柳の枝にまゆ玉をかざり、これをやいて食べたり、道祖神は峠の両側で祭り、信州分、上州分とあった。松引きは「エト、エト」といって引き、この晩各家では賽錢をもってお参りし



道 神 崇原 (坂本大原) 進  
祖 (撮影)

た。子供達は、お供えの紙で御幣をきり、オンベをつくった。この御幣をもつた子供達が家々をめぐる。「ガキ大将にふりこまれないよう！」などといつてめぐった。

(純)

一月八日にオボタ（ボタモチ）

をつくつてもつて行つて、ドウロクジンさま（道祖神）に進ぜた

り、スリッケたりして家中が風邪をひかないように拝んでくる。よその家のオボタをもらってきて食べるよいといつている。（遼）

ドウロク神の火事見舞

二月八日の朝、ボタモチをつくって家族の数だけもつて行つて、オハシなどで少しずつぬりつけてくるが、もつて帰ったボタモチはオゴフとして食う。風邪をひかないようによいことだが、どうしてボタモチをぬるかといふと、ドウロク神は村の入口に立つていて、村の中に入ってくる人たちや神さまを見はつけていた。厄病神が村へ入つてゆこうとしてやつてきたのをみて、このまま村へ入られたら村の人たちによくない、困ると思ったドウロク神さまが、うまいことをいつて「オレンチへ寄つてゆけ」というので一晩泊らせて、その晩自分の小屋を燃してしまひ、厄病神が行こうとして書いてきた村の中の行先の書きつけを燃してしまい、わからなくなってくれた。その火事のお見舞にボタモチをもつてゆくのだという。

この日、子どもたちは朝、ボタモチをぬる役をするだけでなく、カド（門）をまわつて各家からナニガシカの銭をもらい、昔はお神酒を買ひ、菓子を買ってドウロク神の前でお祭りをした。（狐董）

ドウロク神の馬 子どものころ一月八日になると、おじいさんが、わ

らで高さ一尺ほどの馬を作つてくれ、おもちを入れる儀のようなものもつくつてくれた。これにおもちを入れてひっぱつて行つたが、ちょうど

雪が降ると馬を抱いてもつて行つたことが多かつた。こうしてドウロク神にボタモチをぬりつけていた。これがすんだ後は馬はどうに使ってもよかつた。おじいさんという人は信州の柏木からムコにきた人だったの

で、特にこうしたことをやらせたのだと思う。（竜馬）

ドンドンヤキ この日に花嫁はマイダマや、イカなどを焼いた炭を顔にぬりつけられる。ドンドンヤキの前になるとアソコン家の嫁さんが今

年だなといって楽しみにしている。（竜馬）

ドンドンヤキには、厄年の人がミカンを投げる。厄オトシになるとい

う。ドンドンヤキの松小屋は、一戸一人ずつの大人が出て大きい小屋をつ

くることにぎまつていた。このごろは子どもが主になるようになつてしまつていて。

十四日夜、村中が集まつてから火をつける。この火でマイダマを焼いて食うと風邪をひかないといわれ、書初めを上げる。字が上手になるよ

うにといふことである。

この火では、用意したワキザシシリデの木でつくつた刀一を男の子の数だけもつて行つて、こがして、一本だけこげたのを持ち帰る。またこの炭をヨメサマの顔にぬる。初ドウソウ神の時は、嫁さんは必ず行かなればならないきまりで、ぬりつけるのは若い衆のしごとなつている。（狐董）

## 六 先祖祭り

入山の開祖佐藤監物に関する先祖祭りがもたれる。

大先祖佐藤監物は、源九郎義経の家臣佐藤忠信の子孫にあたる人で、

天正年間、武運つたなく戦に破れた一族をひきつれてこの地に逃れ入り、時節を待つうちに帰農したというが、奥州信夫の庄からここに入り、元和九年二月十二日、八十余才で大往生をしたと伝えられている。この人には四人の男子があり、それぞれ分家して遠入、久保、小柏に移り住み、一人は五料に出て家をおこしたといわれ、監物は晩年末子のところに住み、久保で死亡したので墓地は久保にある。遺言で、「二月は寒いから三月十二日を命日としてお線香をたててくれ」といわれたといふので、三月十二日が先祖祭りとなっている。

この日は部落中の女シユが墓子などをもって集まってきて、大本家でお線香を上げ、オネンブツを申す程度で、現在では他部落からは来ない。

大正十二年が、監物の死後三百年忌にあたるので、関係する人々によりかけて墓金し、当時の金高にして七百五十円をかけて、監物翁頭碑碑をたて、盛大なお祭りをした。近く三百五十年になるので何かしたいものと考えている。（遠入）

狐萱、赤坂の先祖祭りは八月二十八日である。この部落は天領だった所で、入山とは先祖もちがう。

この土地の佐藤は、「佐藤出雲守」という人が先祖だといわれ、この土地に入つて村を開いたのは佐藤八左衛門といふ人だつた。八左衛門には源太郎、徳右衛門、四郎右衛門、五郎兵衛といふ四人の男子がいてそれぞれ近くに分家して村の基ができるといふ。赤坂はその後に発展して分村したときにつくられた部落で、狐萱の子村にあたるものだといふ。八月二十八日を先祖祭りとする理由は明らかでないが、昔は本家——当主佐藤伴平氏宅に集まってお祭りをしたものだといふ。明治二十年ころから各家が順番に宿することになった。

祭り番には一月一日、四月二十七日、（甘酒まつり）七月二十八日、イナムラさん、八月二十八日、（先祖祭り）があり、十一月十五日の飯綱宮の祭りの当番もある。



先祖の墓（狐萱）  
先祖祭りのときしめをかける（撮影 阪本英一）



先祖祭りのボンデン（狐萱）  
(撮影 阪本英一)

谷急山の南にケイゲンが穴といふ疊八丈敷位の岩穴があり、天狗が住んでいるという。岩の上に人をさらつてゆき、一週間位してその穴に花などがかざつて（女だったといふ）いたのを発見したといふ。御獄講で

## 七 灵異現象

### (一) 天狗様

は赤坂、狐萱中から一戸一人づきで参加し、宿に集まつて、ボンデン・ゴハイ・シメをつくり、御先祖の墓とみられる古いお墓三カ所へお参りし、ボンデンをたて、お神酒とお線香を上げる。その他特別の供えもない。宿に帰つてからお神

お日待して拝んでさがした。その女の人の履物には土がついていなかつたという。

その穴に若い衆が行つた処、天狗様が翠丸をあぶつていたので、デケエナ、オメエノハデケエナといったところ、フテエヤロウダといつて木

を引きさいとじこめた。

ある猟師がケゲンが穴に泊つていていたところ、夜中に木の倒れる大音がした。翌朝周囲を見たが何もそんな様子はなかった。(赤浜)

江戸時代の事、上原ブンという婆さんが十七八の娘の時急に居なくなつて見つからぬ。皆してたづねたら中木山のケゲンが穴へ行つた。そここの岩室の前に草履がぬいであつたので見つかった。草履に土がついていなかつた。怪我一つしないでいたといふ。(赤浜)

### 角内の天狗

角内山には天狗がいた。賽銭をさらおうとした人が天狗に投げとばされた。そのじいさんは「お賽銭おくんな」といえばよかつたのに、だまつてもらおうとしたから投げられ、高崎の五万石の田ぼまで投げられた。上原多三郎さんがそれをみつけ家の人によらせた。この投げられた人の着物は襟がきれていた。天狗は襟をもつて投げるのだといふ。

(道全)

○天狗様は、三ツ又の木に住んでいる。その上に窓木がある。天狗様がいるところは、木や草が社のまわりはされている。御眷族がたくさんいるから草木がされるのだろうといつてゐる。最近は留守ながすれていない。(道全)

### 鳥天狗と相撲

明治時代に、坂本の渡辺リキさんという人がいて炭焼きに入つた。一週間も燃そつても天狗にじやまされてもえないので、小僧がきて「明日相撲をとるべや」といふので、翌朝まつてみると、相撲をとつたらほり落されて倒れてしまつた。近所の人が山へ見てみると道具があつてリキさんがいない。さがしてみると下の段に目を

光らせていた。夕立にあつたので息をふきかえしたのだろうといふ。その後リキさんは馬鹿みとなつて生きていた。このとき相撲をとつたのは鳥天狗だといふ。(道全)

### 天狗の足音

まだ若いころのことだが、オヤジと一緒に山へ入つてオヤンザワで木を切つていたときのこと、オヤジの切つてあるすぐ下の方で木を切つていたが、近くでミシリ、ミシリという大きな音がしたので、「誰もいねえはずなのに何だんべ」というのですぐにオヤジと二人で下りて行つてみたが、その辺には誰もいなかつた。みんなが天狗のしわざだといつていた。(遠入)

### 天狗のしわざ

オヤンザワでは、店のサクサンが炭をやくまきを割ろうとして、マサキリ(マサカリ)をふり上げたところ、カナグ(刃)だけとられてしまつて、棒だけぶりおろして切れなかつた。すぐにまわり中をさがしたが、いくらさがしてもカナグはみつかなかつた。お天狗さんがとつたのだとということになつた。(遠入)

### 天狗のたいこ

雨が降つて霧がまいたりしてお天気の悪い日には、オヤンザワにしごとに行つていると、「ヒヒヒヤラドンドン」という笛、太鼓の音が、どこからともなく聞えてくる。この音は誰彼といふことなく聞いている。精神の悪い者ほどよく聞えるが、お天狗さんのことだらうといふ話だつた。(遠入)

### 二 狐

#### 狐の嫁入り

谷の反対側に沢山の提灯がならんで見えるようことがあった。狐の嫁入りといつた。狐にだまされる。

婚礼などの帰り、よく引き物などをとられる事があった。

また、道に饅頭が落ちていて、拾って家に帰つたら馬糞だった、などいう話もあった。(赤坂)

明治の頃は、キツネに化かされることが多いので、子供が途中まで迎えに出ると、キツネが化かしにきたと思って油断しないでおこってきた

が、家の近くまでくると、キツネでないのがはっきりわかるので、おこりつ顔がなくなったことがある。(道全)

汽車は明治二十六年から通つているが、一号トンネルの上が松ノ木坂いい、ここがキツネの巣だとわかつていた。スシをキツネにとられそうになった人、どじょうをとられた人(耳だけは残してあつた)の話もある。(道全)

### あんまに殺されたキツネ

弘法の井戸」というところがある。

峠を越しているあんまの手を引いてくれる人があった。どんどん手を引いて横道へ入るので、手つなぎをつけて杖で引く手をなくしたら、キツネの尾を杖ではたいてとうとうキツネを殺してしまつた。(道全)

キツネは物をとり尾をふつてくる。豆腐屋が昼間キツネにだまされて

豆腐をふりまつたことがある。

幼児を背負つた児が、ソバ烟を、おう深い、おう深いといつて着物をまくつてとおつてゐるのを見た人がある。(道全)

### 十三塚の古狐

十三塚には古狐がいた。坂本の人がこの狐にとりつかれたとき、案の人が泣いてゐると「泣くずらあるか、おれは一八〇〇年も生きているん

だ、これからたんと人を喰うんだ、芝居だら三番だ」といつたという。「どうりやなおる」といふと、「鶏料理をさんざ喰わせりやいく」といつたという。

むかしはとおりきつね、とおりおおさきというのがいて困つたといふ。(道全)

### キツネのチョウチン

湯の尾根というところを夕方登つて来たら、上方の山で、赤いようなチョウチンをすうと(たくさん)つけてゆくのを見た。今から五十年前のことだった。(赤坂)

### アブラゲをとられた話

いつごろだったか赤坂のサダサンが、難井沢の矢ヶ崎というところでアブラゲを買ってびくに入れて帰つて来たとき、ワシタビ(矢ヶ崎の下の方)で休んで一服吸つてゐるうちに眠くなつてしまい、そこでウツラウツラして寝入つてしまつたらしく、しばらくして起きてからトコトコ歩いて帰つた。家へ着いてから「バアサン、アブラゲを買って来たから猫に食われねえよ」といつてビクを渡し、おばあさんがビクをみたところ「何も入つていねえで」という話で、どう考へても自分で出したことはないので、ワシタビで眠つたときにキツネに食われちゃつたんだな、ということになつたといふ。(赤坂)

五十年前、坂本で夜中の三時頃狐の嫁入りがあった。山に提灯が數多く並んで見えた。こうした時はすぐ近くの足許に狐が居て化したのだといふ(芦田谷)

### キツネノツキ

昭和初年のことだが、工場へ行つていた娘がおかしくなつて、お湯に入れといふと「浮んじゃう」というし、いろいろもつと近づいてあたれといふと「足が燃えちやうから」だめだといふような変なことをいうよくなつちやつた。

キツネがついたんだといふので、オヤジがそうするといふのを聞いて來たので、「アカの針金(銅線)を細かく切つて鉄砲に入れ、えんの下にぶちこむとキツネが逃げ出す」といふので、その通りにオヤジサンがやつたが、それでもだめだった。その後三峰さんに行けば直る、といふので娘と一緒に連れてお参りに行こうとしたが「行けば死んじゃう」と本人がいふので、オジゴと兄が三峰までお参りに行って、行き着

いたと思うころ病気が直っちゃった。

昔は少し病気になつたり、体のぐあいが悪いときなど、すぐにキツネがついたのではないかというので、いろいろやつたのだろう。（狐薑）

前の家のオバサンがキツネツキらしいといい出したのは四月ごろで、その人は六十すぎていた。どんなことかといふと、病人に知らせずにアブランを買って来てしと頼んでやると、お使いが帰ることになると「もう帰るなあ」といい出す。「何が帰るか」と聞くと、「おめえなんかアブランを買ひにやつたんべえや」という。また、お客様にきたいからというのでお客にやるときなど、「子どものおみやげだから」といつてアブランなどをたくさん買ってゆき、川近くの草の中へひょいとふろしき包みを入れるから後から行った人がすぐにふろしき包みをとってみると、中には何も入っていないこともあった。

キツネを追い出すというので、四月から六月までの間、口でおどしたり、たたいたり、いぶしたり、いろいろとぎやくいたしたが、そんな時に麦畠の中を物すごい速さでとんで行つちやつたり、山の中をとんで行き、とても病人とは思えなかつた。

病人が急に足や股が痛くなり「こんちきしおう来たな」というので、すぐに着物をひろげてみると狐の毛があつた。狐の毛は寝床にもあつた。その家は、しばらくの間空屋になつたので床下にキツネが住んでいた。キツネツキといふのも、キツネが病人の食いものをねらうのだといふことがいわれている。

このおばさんは、こんなことが何度かつづいた後、城峯にお参りに行くというので家人がお参りに行つたが、そこへ行き着いたころ死んだ。

（狐薑）

前のおばさんが六十才を越していたが、四月ごろ狐ツキになつた。油あげを買って来いと言うので買いに行つて戻るところになると、「もうだれそれは帰りそうなものだ。どうしてお前なんかに買い物物を頼んだ」などという。帰る時には、「おみやげを買って来い」というので、買って

連れいくと、草の中にそれを突っこむと、もう無くなつていて。桶の向こうまで行くと、離れたような顔をして「何で来たか」などという。

そして、久保まで、麦畠の中でもどこでも一飛びにとんで行く。家へ連れてくると、まだ離れないでぶり返す。何回もくり返した。城峯神社にお参りに行ってやつと離れたが、病気が治らずに死んだ。死んだ時は衰弱していて、肛門が開いていた。四月初めから六月まで、毎日のようにこんな騒ぎをくり返していた。回りの人が狐を離すために、病人をたたいたり、いぶしたりしていじめると、いじめた人の足が痛くなるので、見ると白い毛がついていた。結局、縁の下に狐がいて、病人の食い物を横取りしていたものだった。家はしばらく空き家になつた。（狐薑）

姉が狐につかれた時は、「お湯にはいれ」というと、「浮かんじゃうからいやだ」「いろいろにあたれ」というと「足が焼けるからいやだ」と言って、おかしい。親父が縁の下にアカをぶちこんだが、だめだった。

叔父が三峰さんへお参りに行つたら、到着と同時に正氣づいた。学校の近所にムジナがいて、姉がサナギくさいので取つた。そのムジナを取つたら、赤渕のばあさんが病気で寝ていて、庄と寅（人名）にじめられて弱つたと言つた。ムジナの方が狐よりはなれない。（狐薑）

母は恩賜の生れである。弟は遠入から嫁をもらつた。弟の家に居た母が具合が悪いというので迎えに行つた。それは、妻が今にも子供が生まれそうな腹をしていたので、おばあさんに行つてくれといつたが、お前の母が悪いのだから、また生れたわけではないから行けといわされて行つたのである。すると留守中のその晩産気づいた。隣居家にいたおばあさんは赤ん坊を取上げ、子供を片付けたら孫の水がのみたいといふ。孫に水をやれといって持つて行つたが、おばあさんはそれではない孫を取り上げた水がのみたいといふ。そこで変だということになった。他に食べたいものはないかと聞くと、油揚がたべたいといふ。これは狐に化されたのだろうというわけで、どこから来たか聞いたら〇〇山から来ただといふ。それから半年寝ずるするしていったあと死去した。

狐がついたというので、三峰山に行って神様を借りてきてオカリヤを作って祀ったこともある。(芦田谷)

### (二) ムジナ

ムジナは犬と同じようで、尾が丸い。タヌキは尾が平らなので見分けがつく。(狐薈)

坂本から日暮に鮭を買って帰ってくると、鮭がかじられるので、背負いなおしたら帽子を落したことがある。ムジナにでもとられたのだろうという。また、「夏目には、急に前が暗くなり、向うからソダをつけた馬がくる。右へよけるとソダが右へ下へよけると下へとくることがあった。岩の上に化かされてあがっていた人もある。赤飯を背負ってきたといふ。ムジナは先に立つ」という。(道全)

明治二十年代のことである。碓氷峠越えでムジナを汽車がひき殺したことがある。松の木板あたりまで汽車がくると、ムジナが赤旗をふつて度々だまして止めるのでなやまされていた。汽車を止めないではしつた大きなムジナをひきこらしたという。(道全)

河原で大きなムジナが死んだことがあった。それからそこを通る人が化かされなくなつた。(道全)

オオシカゲ(大日影)のオガマで、ジイサマが炭がまの炭をかき出していたら、どこから出たのかデッケエさむらになつて出て来て、カマをかいてるところをまたいで通つて行つたというが、ジイサマは全然知らずにいたところ、一緒に歩いて行つていた孫がこれをみていてオッカナガッて、「いま行つたでつけえさむらいをジイサマは知らなかつたんかやあ」と聞いたが、当のジイサマはちつとも知らなかつた。こんなことがあったのでこの孫は、それつきり山へついて行きたがらなかつたのうが、タヌキかムジナの「コオラのへたやつ」のしわざだつたんだんべえということがだつた。(道人)

オレのオフクロは、また竜馬田にオレの家の空屋があつたころ、エンジュウサンのわきを通つたら、人間の姿をして体中が光つている大

きなもんがママ(土堤)をかき上つてゆくのを見たという。オフクロはおつかながつて逃げて来たことがあつた。

そのころだったが、ムジナがタメに入つて死んでからはそんなオバケは出なくなつた。ムジナは見たが、コオラをへつて毛がバリバリしていた。(遠)

ムジナがつくと、馬鹿だから離れないという。

気がになったのをキツネがついたという。聞いてみると、表を通つたらお婆さんが「寄つといで」というので寄つたという。帰りなさいといふと、○○をくれれば帰るといい、求める御馳走を作つてやつたら出て行つた。そして転んだら狐が離れて病氣も治つたといふ。(芦田谷)

ムジナには、マミムジナ(笛筆)と本ムジナとがある。ムジナが化けるときは入道になることが多い。ミコシ入道などともいふ。(道全) 狐薈の正四郎さんと寅次さんとがむかし炭やきをしながら、ちょうど穴へ入つたムジナをみつけてこれをとつたところ、赤浜のオサトサンといふ人がその頃長く病氣で寝ていたが、その人が「今日は正と寅にひえ目にあつた」といつたというので、みんなで不思議なこともあるもんだとおどろいた。ムジナをとつたという話などオサトサンには話してないことを知らねえことなので、歩けない人が知つているなどはムジナがついていたのだろうということになった。ムジナは犬のよう足で、尾は筆のようなもので、タヌキの方は尾が平なものだ。(狐薈)

### 四 山 犬

ハップウ平といふ所がある。そこに炭焼きが一家して山小屋生活をしていた。ある晩、子どもがあまり泣くので、「山犬様食っちゃつてくれろ」と言つて外に出した。しばらくすると、子どものなき声が止んだので外に出てみたら、すでに子も着物だけになつていた。(恩賀)

送り犬と迎え犬というのがある。送り犬は家へきてもなかない。ころぶと首ねっこをもつて起してくれる。送り犬がついてきたときは、塩を

出してやる。迎え犬は、人のくるときよそで見ている。

迎え犬、送り犬は人間に喰いつかないが、喰う犬は後からきて一、三度頭の上をとびこしてから喰いついてくる。これをよけるには、夜道にキレモノをはなすなどいう。頭上をとび越すときタワクリガマなどを刃を上にして頭の上においてあるくとよい。また、タバコの火を時々おとしていくとよい。

山犬は道ばたに待っているときもある。そのときは「山犬様すこしとおしてくんなんし」といつて通ると後へ下つて見送っている。

まったくないと信心していると不思議にみない。心で信心しているうちはみたり、みなかたりするという。（道全）

下仁田の初鳥屋にも佐藤性がありこれは恩賀の佐藤が別れて出たものという。ところで、この両方の佐藤は、毎年元日に食べるそばを交換した。大晦日の朝、一ぱん鳥がなくのを合図にそばを持って出て行った。そしてアマイケの下のイノカワラでいきあつて、そこで交換することになっていた。

ところがある年、山犬様に襲われて二人とも死んでしまった。以後交換の風は止んだ。以後そこをイノカワラという。（恩賀）

（五）その他

オーカミ

明治三年、某が山小屋で生まれた時、狼がまわりでうなっていたので、一晩中なたをといでいた。

ソンマステバに馬の死んだのを捨てると、月明りの晩に、狼が食いに来たら、馬が動いた。

おりり、おいかみ 夜道を帰つて来ると、そばにくついて来る。途中で転べばだめ、腰になわをつけてずつて来ると、狼は川を渡ると足あとが見える。（下平）

オサキ

オサキがつくと、人の家の粉箱から粉を持ってきてしまう。よく銅つておかないとフチがわるいので、主人ののどを食い破つて人の家へ行く。オサキはお鉢をしゃもじでたたくと寄つてるので、ふだんお鉢をたたくと言われる。（狐販）

オサキというのは、ていねいに銅うと他人の家から粉箱の中へ入つて粉をもつて来て飼い主の粉箱に入ってくれる。銅い方が悪いとその主人を食い殺して他人の家へ行つてしまつ。飯のついたシャモジでカマのふちや、飯びつの口をたたくと集まつて来るという。（狐販）

ネズミのような動物で、シンシヨウがどんどんよくなると、あの家はオサキを飼つているといわれる。人間には見えない動物で、鉢の端をたたくと忽ち寄つてくる。（新井）

鼠位たが人には見えない。飼う人があると、他所から食物などを持つて来て飼主を福にする。

めしひつのフチをたたくと出て来て食物を食うという。（西田谷）

イタチ

山小屋でイタチに押しつけられて起きられなかつた。板割りじいさんを呼んでも声が出ないことがあつた。気がつくといいさんはお前が屋間イタチをかまつたんべえという。どこか遠くでイタチがさわいでいるという。イタチ除けは、イタチに化かされたときは股のぞきをするとけるとい。（道全）

ホイタチ

日中崖の上にのぼつてゐる人がいた。どうしたのだとくと、道が川になつて歩けないからだといつて。（道全）

力マイタチ

何でもないのに突然足のふくらはぎなどに切りきずができる。長さ三寸、深さ五分位、血が出ない。カマイタチという動物が切るのだといふ。（芦田谷）

切られたときは痛くもないし血が出ないで、あとから出る。傷口は五

分位で長さ三寸位、足の肉のあるところフクラッパギなどがよくやられる。結えておくと治る（新井）

### 河童

河童は昔ズウズの滝あたりに住んでいた。

ある時希さんが田の草とついたら河童が出て来て、手伝つてやるべ

といった。希さんはお午すぎまでは小豆の粥煮をやるぞといった。

しかし爺様は用心に鉄びんの蓋をふんどしの間に入れておいて、尻の穴の用心をしておいた。その中河童がソツとよって来て爺様の尻をさわつたが、あいやだいやだ爺さんのケツはカナッケツダ。俺行っちゃべといつて帰ってしまった。という（赤浜）

おばあさんが、ようどめの滝の下へ、竹の皮捨いに行つたら、裸の子が岩の上にいた。こんなところにあそびに来ちゃいめえと思ったが、もんじかと声をかけたらとびこんだ。淵で馬を洗ついたら、馬のしづぼにとりついて、馬屋までずられて來た。馬の力でずり上げられ、鉢の水がなくなり、力がなくなつたので、馬屋の柱につながれていた。おしめばあさんが、すり鉢の水をぶつかけたら、なわを切つて逃げた。（下平）

かみおさかの話だが、鎌を淵でといでいると、くもが来て、指に糸をまきつけるので、その糸を岩にひつかけていたら、「よーいとな」と声

がしたと思うと、岩を淵にひつこんだ。（下平）  
ユリのオバケ

十八の年だったと思うが、前の家のオジゴのぐあいの悪いとき、医者避けにゆき、人力車の後押をして來たが、夜中の時ごろ山道を行くのでダミの木が茂つて道路にかぶさっているところを通りかかったら、にしゃがみこんじゃつた。そのうちに白えもんはだんだん近づいて来る

のでふるえながらみていたところ、ユリの花を一本植えた鉢をてんびん棒で担いで来たもので、いいあんべえにふうらりふうらりしていたものだった。軽井沢あたりに売りに行く人が夜中に出かけて来たらしかったが、おつかねえ思いをさせられた。（遠入）

### ススキ

ずっと昔のことだが、赤坂の下の方の道で、村の人が夜そこを通るたびに通つた人の誰もが「ぞおう」として気持が悪くなつてしまつておつかなかつたが、ある人が勇氣を出してその辺のすすきを刈りとつたら変な気になる人がなくなった。すすきの穂が首のところをなでる（なぜる）ようになつてたわけだった。（赤坂）

入山の精進場では、明治四十三年の大水で入山で家とともに流れて死んだ人がいた。その後あいている家に広瀬は「わしはこの家を借りたんだ、ここにとまつてゐるものはあたたかいものを運せるからやら婆を見せないでくれ」とたのんだら出なくなつた。奥座敷の職人の間には白髪のばあさんがでた。つかまえようとしてもつかまらないので、供養したらそれから出なくなつた。（道全）

### のろい釣

上宿の八幡宮社殿のかたわらに、のろい釣のうたれたという、かしの古木がある。女がするもので男はしないという。白装束でかみそりを口にくわえ、髪を振り乱し、ろうそくを持つて、人目につかぬ丑三つ時に、頭のないきを打つという。（上宿）

### 生まれかわり

もう昔のことだというが、松井田のある長者の家で男の子が死んだという。親たちがそれは悲しんだというが生まれかわつて来たときにとうでので仮の背中に、住所と名前を書いてやつたのだという。ところがそ



玉神のオスガタ部分  
(撮影 阪本英一)



玉神のオスガタ  
(撮影 阪本英一)



馬頭観世音  
(赤坂千ヶ瀬)  
(撮影 阪本英一)



右 ホーソー神  
奉祭祀意口殿患瘡  
左 天神さん  
奉勸請天満大自在天  
(久保)  
(撮影 阪本英一)



トボロの上に掲げられた駄馬(恩賀)  
(撮影 都丸十九一)

## 八 そ の 他

これから間もなくあるところの家の牛になって生まれて来ちゃったといふ。背中に毛巻きに本当によくわかるようになつて生まれちゃつたので困つたという。そのことがわかると親は困つたというが、牛方がその牛をひいて来ちゃあ長者の家の前を通るので切なくて、牛方にゼニをくれちゃあ帰してやるんだというが、帰してやるたあまたしばらくすると来るので困つたと。

仏にしるしなどをつけてやるもんじゃあねえそうだ。いい家に生まれて来りやあいいが、こんな牛のよんなものに生まれちゃあかわいそらだものう。(遠入)  
久保である家で赤ん坊が生まれたあ死んじやうので親がくやしいといふので爪を切つてやるたあまた生まれて来るのでこれも困つたといふ。(遠入)

無縫仏というのには、旅にきて、あるいは仕事にきてこの地で死「亡」し、  
埋葬したもの、または古くは立派な家であったが今は死に絶えて、祭る  
縁者のいなくなつたのをいう。こうした無縫仏は、お盆のとき盆棚の下  
に祭る家がある。マンジュウ、ボタモチ、テンブラその他季節のなりも  
のお供えする。(岩の平)



石 仏

(撮影 今井善一郎)



石 仏

天明の供養塔

松井田町水谷入口（山口）にあり

(表)

天下泰平 願主

水神砂除供養塔

五穀成就 坂本中

(裏)

天明三辛卯年七月六日夜

干時文政五年壬午四月大吉日

金井三郎左衛門

佐藤甚左衛門

永井善左衛門

セハ人武井好右衛門

施主 佐藤助藏

(道全)

# 民 俗 知 識

## まえがき

この項としてはまとまりを欠くが、呪い、予兆、禁忌に関する資料をまとめて、ここに入れておく。

呪いとしては、民間療法的な内容を主としていて、他地域と大同小異の傾向を示しているようだ。

予兆の資料はごく少数であった。禁忌の資料もまとまっていないがもっと、山村生活の体験を示すよう

な資料がほしかったように思う。(佐藤清)

## 一 呪

井戸にフルイを半分見せて、メツバを治してくれたら全部見せてやるといふ。(新井)

不動山の小柴不動尊の滝水で目を洗うといふ。(上宿)

他家に行って窓からオムスピをもらってたべると治るといふ。(岩の平)

(イボ)

イボ水というのが岩ノ平の奥の沢(村の南)にある。イボ水の沢とも

いう。これをつけると治るといふ。(新井)

他人の手と向い合せ、人指ゆびで自分のイボと他人の手の一部を指さし「イボ、イボ、一本橋渡れ」と三回唱える。こうするとその人に移つて自分のは治るといふ。(岩の平)

オシキベットウ(イボ蛙)に小便をかけるとできる。(上宿)

お女郎ぐもの果をイボにまくとれる。(上宿)

はね石の弘法地蔵から小石を一箇かりてきて、さするとよい。それら倍にして納めてくる。(上宿)

## 蛇除け

山に行くとき、蛇が出てこないよう、

「かやとの中で寝寝して、わらびの恩を忘れたか、アビラウンケンソワカ、アビラウンケンソワカ、アビラウンケンソワカ」と唱える。(新井)

## 着物

申の日に着物をたつと、ヒヤヤイ即ち燃えやすいといって避ける。申の日でも「このきぬは、あらきえびすのきぬなれば、いつたてもときをきらわづとよし、アビラウンケンソワカ、アビラウンケンソワカ、アビラウンケンソワカ」と唱えると燃えないといふ。(新井)

## ムシバ

歯が痛いとき、右手にニンニクをすってつけておくと治る。(新井)

歯の熱は、里芋をつぶし紙にぬつてはっておくとれる。(上宿)

乳のみ歯をねじて抜くと、ねじれ歯になる。(上宿)

## 拔曲

歯を抜くのに麻糸を巻いて抜く。上の歯は屋根の上に、下の歯は縁の下に捨てる。(上宿)

上の歯が抜けると縁の下、下の歯が抜けると屋根の上に投げる。このすると次の歯は早く生えるという。(岩の平)

## 六三除け

三本辻に線香を立て、この線香のトボレないうちに治して下さいといふ。六三の神は歎が深いので、沢山線香を立ててもらう。(新井)

## コウデ

障子の穴から手を出し、ナベ、ツツビンのつるをくぐらせ、男なら女の子の末子から手首をしばってもらう。(新井)  
男は女の末子に、女は男の末子に、なべづるを通して木綿糸でしばってもらうとよい。(上宿)

## シャツクリ

水を茶碗に汲み、箸を十文字において飲む。新井の箸の下でナムアミダブツといって飲み、次に若の宮、芦田谷、赤浜の順に夫々ナムアミダブツを唱えて飲むと治る。

またリンゴをすって、その液を少しづつ飲むと絶対治る。(新井)

急に驚かすと治る。(岩の平)

烟を動物が荒すとき、「峰岸藤次郎」と書いて烟に立てるといふ。

て烟に立てるといふ。この人は狐が近寄らぬ程

の鉄砲ブチであった。(新井)

かみなり除け

仏さまに線香をあげる。いろいろにたてることもある。(上宿)

## とげ

栗のいがを煮だした水にとうじれば抜ける。(上宿)

六算除けとして算盤をはじいて、その玉の上に灸をすえた。神經痛や



腹病の時などやった。奇妙に直ったものである。(赤浜)

疱瘡の流行したとき、昔疱瘡除けということをした。子供が二才ぐらいいになったとした。サンダワラの上に線香を立てて川へ流すのである。赤紙を折つて一緒にのせることもある。(赤浜)

## 耳だれ

下宿の白山寺のお堂に、おわんに穴を開けて供えるとよい。こよりに葉たね油をつけて、耳の穴をこするとよい。(上宿)  
正月餅の最初の一切れをちぎって荒神様に上げるといって、ホドに入れる。

## カギツルシの呪い

毎年新しい襷をなつてカギツルシにかけておく家がある。またこれにシャモジを下げておく家がある。子どもが炉におちた時はじきかえしてくれるという。(明賀)

## 二 予 兆

草葉の間のくもの糞がすつきりと朝露で見えると天気はよくなる。  
木の葉が風で白くひっくりかえると、下から風が吹くから雨。

不動龍の音がよく聞えると雨。

ゲコゲコ雨蛙が鳴くと雨。

ヘビが木に登ると雨。

煙草の灰がよく燃えないと晴、途中で消えると雨。

紫の花のツツジ、ヨウラクの咲くときはイモタネ(里芋)のシン、白ばらの咲くときは豆蒔きのシン、ジュシヤ(灌木)の黄い花が二三月頃咲くときは味噌煮のシン。

大雪は豊作のもの。

十五夜が盛ると翌年は大麦があり、晴れると翌年は小麦があたる。

(新井)

ヤギワ（道のそば）でヒーヒードリが鳴くと人が死ぬ。という。（新井）あるとき鉄釜のふたをしないでうどんの湯を沸かしていたところが「村中に鳴りわたる」ようになり大きな音で鳴り出して、その後は使ったびに鳴るために、「こんなのが鳴るのは災難が来るというエイシングの悪いこと」だからとしのうので、オヤジサンが鉄釜を神だなに上げてしまい、使わないでおいた。

そのころセフロガマの湯も鳴り出したので、これも災難が来るとい

うので外して神だなに上げおき、ちょうどやつて来た古道具屋に両方とも売り払ってしまった。

そんなときはいろいろあるもので、家のイナリサンのわきにある御神木の杉の木に、えりにえつて雷が落ちて枯れてしまうことが続いた。すぐそばを高压線が通っていてながら杉の木に落ちたのだから、オヤジが「おらあがっかりした」といったのをおぼえている。

それからというもの、オフクロ、姉、兄など、六人もつづけて病魔で死亡してしまった。みんな災難の前ぶれだった。（狐置）

鳥がなくとカラスナキが悪いなあという。山仕事の危い事をしているときなど特にそういう。（新井）

### 三 禁忌

ヤシキヘビ

兄が死ぬ前の年のこと、神だなに一尋以上の青大将が出てきたことがあった。ヤシキヘビだから決してかまつちやあいけない、とオヤジがいつたので放っておいたら、ハリから部屋中動きまわしたが、それから見えないようになつたら間もなく兄が病氣——セキリで死んでしまった。

（狐置）

ニワトリ

明治四十三年の大水害のため、この付近で田畠で満足の土地は一つもなかった。横川に通じる道を開けるのに、村中が出て、カチ通り（人が歩けるだけの道）を開けるのに二十日以上かかった。このときには恩賜の村が流れ、サルが出た。そのときには「ニワトリが神だなに上った」という前ぶれがあったという。この水害では十七人の死者が出て、今でもそのときのまんま（まま）の烟もある。

### 山の禁忌

山に入つては悪い。日は特にない。

伐つては悪い木としてユミ木（元が同じで、上方でまた一つになる）三叉（三本の枝が同じところから分かれている木）これ等は山の神のアスピ木という。これ等の木を伐つたために山からころがり落ちたなどの話があった。（狐置）

ユミハリ木。枝と親木がまたくつく場合や、さけたのがまたくつか合等がある。ユミハリ木を伐るとけがをしたりする。伐つたらお神酒を上げろとも言つた。（明賀）

三叉の木（ヤマシバの木に多い）マド木は山の神様の木といい伐ることを喜ばない。

サルという言葉を避け、ワカイシ、エテコーなどという。（新井）

一月十六日、早く出ると山の神の矢が降るといってゆっくり行く。女はいつでも山に行つてもよい。

蘿籠は梅干をもつていくと当らないといい、また朝梅干を出すことを嫌う。（新井）

苗間に種もみをほぼす日は戌の日を喜び、戌の日を忌む。犬も食わないと言つて。

朝は太陽が藤に伝つて上るので藤をもしてはいけない。夕方は籠をもすな。（明賀）

死人、月経時の禁忌

死人があつたり、月経期間は神社にお詣りしてはいけない。餅つくとき手合せしてはいけない。三ガ日の神棚に進めない。オミソのつくり込みをしてはいけない、オミソがくさるから。若しするときはお守りをつけてしろという。（赤浜）

屋敷に植えない植物

はちすの木（仮ばな）や、つばきの木は植えない。つばきの花は首が落ちるといってさける。いずれも墓地には植えている。（上宿）

いろりで燃してはならぬ木

（上宿）

桐の木、うるしの木はもすな。

# 郷土芸能と遊び

## 一 民謡

### (一) 馬子唄

江戸時代天下の二大街道であった一つ、中山道の要衝に当っていた坂本宿は、碓氷峠の麓の宿場として栄えた。天下の嶺の箱根には及ばないにしても、碓氷峠は難場として知られた。急坂を上り下りする馬方が歌つた馬子唄（馬方節）は、信州側の追分節といわれ、これが越後追分となり、北海道の江差追分となつたといわれている。その追分節も今はわずかの者が伝承しているに過ぎず、採集するにも困難である。現在古い馬子唄を伝承しているのは入山の武田市五郎、坂本宿の新井馬之助（七十二才）の二人である。物故した武井宇吉翁がよき伝承者であった。いま馬子唄の歌詞のいくつかをあげておく。

碓氷峠で坂本見れば  
女郎が化粧して客を待つ  
碓氷峠の権現さまは  
わしがためには守り神

西は追分東は関所  
せめて関所の茶屋までも

一に追分二に軽井沢  
三に坂本ままならぬ

浅間根越しの小砂の中で  
アヤメ咲くとはしおらしい

雨が降りやこそ松井田泊り  
降らなきや越します坂本へ

浅間山なぜそのように焼けしゃんす

號三宿もちながら

(註) 三宿は「三引く」で一千才から三引くと十七才で娘盛りのことをい  
う。

碓氷峠の水沢様は

おんべ振り振り約子うる

(註) 水沢は峠の熊野権現の神官、「おんべ」は御幣束、約子うるは峠の大

坂城や照る照る追分巻る  
花の坂本雨が降る

女郎は二階の格子の窓で  
私しア鶯目で報らす

碓氷峠のアノ風車  
誰を待つやら来る来ると

人の悪いのは鍋島薩摩

暮六つ泊りの七つ立ち

(註)

宿場にとつては長く滞留するほど有難い。九州の鍋島(佐賀)や薩摩(鹿児島)はその日の午後六時に着いて翌日の午前八時には出立するので人が

悪いという。

松本丹波くそ丹波  
こそといわれても錢出さぬ



馬宿の馬つなぎの環

(坂本宿)

(撮影 萩原進)



馬宿の馬小屋(坂本)

(撮影 中村和三郎)

片側女郎屋だ片側  
川だよ  
しつかり歩けよハ  
イハイハイ  
お国は大和の郡山

お高は十と五万石  
茶代はたった三百  
文

(坂本宿)

四 サンヨゾキの唄

①富士ーのなえー ャレー ャレー ャーレ白雪ヤ ナーエー 何かさ  
てなー 朝日でとけるー エー サーホイ ドサン(つく) ドサン(つ)

碓氷峠の権現様はわしがためには守り神  
西は追分東は関所せめて峠の茶屋までも

雨が降りやこそ松井田泊り降らなき越します阪本へ

黒毛よ泣くなよもう家は近い森の中から灯が見える

碓氷峠阪本見れば女郎が化粧して客を待つ

碓氷峠のあの風車誰を待つやらタルタルと  
浅間山さんなぜ焼けさんす腰に三宿をもちながら

一に追分二に軽井沢三に阪本ままならぬ

風車石ー明暦三年軽井沢宿本陣佐藤氏の奉納

源氏車を風車石とよんでいる。追分節に「碓氷峠のあの風車たれをまつ  
やらくるくると」とうたわれていたのはこの石のことである。(峰)

(入山)

（二）木遣り唄

サーーーみなさん ヨーイトナ  
サーーーとりついて ヨーイトナ  
サーーーオテコの衆 ヨーイトナ  
サーーーお若いしょ ヨーイトナ (明質)

（三）子守り唄

①ネンネン カンカシヨウ ネンネシロ ネンネシテオキルト チチク  
レル  
②ネロテバ ネネーノカ コノガキヨー  
③ヤーマノキージノコモ ナークナヨ ナークタオタカニトラレルゾ  
(明質)

く。

とけーてーえーなえー ヤレヤレー ヤーレエー 流れてなえー 三島

へおちるー エーサホイー 三島ー なえー ヤーレー 女郎衆のなえー

あけじょーなえーずー エーサホイードサン ドサン この唄一筋ごとに途中にサンヨウ サンヨウ サンヨウと入れる。

(明賀)

②おまーえーナエー 百までナーエー わしゃ九十九までー エンサ  
ともーにーナエー ヤレヤレー しらがのナエー はいるまでー サホ

イドサン ドサン (明賀)

#### （四）端唄

話はおよしよ仕事のじやまだ

話でやつとくれよぼつばと

オテンマ仕事の際など、おしゃべりしていくなかなか仕事がはかど  
らぬ場合などこう唄う。(明賀)

#### （六）木挽唄

ハアー木挽さんかいの、コイツハ山にも住めど

(道全) コラ、七間三尺はその日の役目、それからむこうはあの子の分だよ

#### （七）春駒その他

正月になると春駒まわしがきた。

明治四十五年頃坂本の宿で行われた旅芸人から聞いたものは「法界  
節」「うかれ節」「浪花節」「船屋の歌」「祭文」「義太夫」などであった。

ゴセもよくきた。

## 二門付芸

### 三河万才

毎年正月になると三河万才が訪れてきた。戦争中になつて来なくなつた。星間は家ごとにまわり、夜は宿屋などを借りて村の人に見せることもあった。正月の寿ぎことが多く、家の柱を一つ一つ褒めながら歌うようこともした。祝儀さえはずめば夜おそくまでもやってみせたものである。年によつて訪れる人はかわつてることもあり同じことでもあったようである。(坂本宿)

三河に百八才まで生きた人がいた。三河の大名はその人に、赤い着物と頭巾を買って祝つてやつた。あまりの嬉しさに大名の家で柱をほめたりおどつたりしたのがはじまりといふ。そのとき、大名は、一反のながいともに一日おどると数ヶ類をくくれ、一回もらいに行つてはいかんといつたと、その万才の文句は、  
あんぶくたつにいたつた  
にいたつたらおろせ

おろしてみたら喰いころだ  
ながいもんで申そつか  
みじかいもんくで申そつか

どうせ申すなら

ながい文句で申さんせ

京の三十三間堂

二つ合わせて六十六間堂  
こいつもずいぶん長いな  
まだまだながい文句で申そつか

五十ばかりのじいさんが

七十ばかりのばあさんと

朝から晩までもつづくらつづくら

こいつもずいぶん長いな

次は太夫さんの番だよ

(道全)

### 三 人形芝居

藤木人形（現在藤岡市藤木）と八城人形（松井田町八城）の人形芝居がよく宿へきてはやったのを見たことがある（坂本）

夏になると宿の空き地で盆踊りが行われた。九月十五日のお祭りとかお盆のときであった。やぐらを組んで輪になつて踊るもので、文句は「甚九」「おけさ」「伊勢音頭」などであった。素踊りのほかに手拭い踊りとか笠踊りもあった。離子は太鼓ぐらしきなかつた。揃いの浴衣を着てやつたこともあった。唄は越後の唄が多かった。（坂本宿）

### 四 盆踊り

タケ引き  
十五センチくらいの竹を割ったものを使い、手の甲の上にのせて返えしてあてさせる遊びで一種の賭け遊びである。

#### 釘打ち

五寸釘を使い、これを地上に投げて突きさしたものが次ぎのものが二番目を打ち込み、倒せばそのものの手にとられる。こうして三人五人で釘打ちをして遊んだものである。

#### 銀杏打つつけ

銀杏をもつて打つつけあい遊ぶものである。

鳳船上げ  
大正頃までやつた。タケの骨に紙を張り下に $\oplus$ とし麦ワラを燃して煙をつめ十月頃の夜空にあげた。よくあがつた。 $\oplus$ のところに石油を缶につめて燃してあげたこともある。

#### 針バクチ

子供が御年始に歩くと、半紙という（今の半紙の三分の一位の）紙を何枚かずつ貰つた。之を元手にして、その一枚の上に多くの縦横線を引き一つの樹目毎に「トカモカサカモトヤトカモカサカモトヤ……」と同一の文句を繰り返して書き中央に墨で小円をかいたものを作り、木綿針をもつて来てこの紙の上に投げつけ、つき立てる。その針の当つた文字によつて、トは一枚とる。カはかける。サはサラウ。モはモ一枚出す。ヤはやる。などの符号として紙のやりとりをする。真中の黒い小丸に当ると總ざらいにとつてしまふ。こうした小賭博で、子供に大流行した。一日（一樹）は二種強位であった。

#### ムサシ＝牛ムサシ

牛追いが十六人、これは豆を用い、真中に一厘程に紐をつけたのを牛にして、牛小舎へ追いかむ遊び。一クイは食えるが、三クイ食うと、追り、アメフリバナ（ツリガネソウ）で遊んだ。そのほか男児は次ぎのよくな遊びをした。

#### 朝鮮ムサシ

これは三重の四角をかさ中央に道路をつけ、甲乙二人してやり、子を動かして三つ揃えれば相手の子をとる。(三樹)

### 陣屋

地上に丸を書いて、二組に分れた子供の団体が、円の中の相手の子供をとりつくらする。

### 竹馬

鉄砲打ち、これは竹馬の片足跳をして、一方の竹馬を鉄砲の形にして打つマネをする。片足になる處に枝が必要なわけ。

カツブンカキ、これは竹馬の一方をかしげて他方の竹と身体の前方でスリ合わせる。ガリガリとカツブシかく様な音がする。不安定な姿勢がむづかしい。

高い竹馬、これは足をのせる台が七尺もある高いのを作る。

雪合戦 雪の打ちつけっこをする。二組に分れて投げ合う。

### 雪湯

これは遊びではないが、雪を据風呂につめて、わかして入る。楽しい事であった。

雪は多く、一尺以上もつもった。井戸が遠いので雪で湯を立てたりし、これを雪湯といった。

### 兎追い

鉄砲打三四人と子供が組んで兎取りにゆく。子供は兎を追い出す役。

雪が降るとブッケックラしたり、兎追いをした。また鉄砲ブチを三、四人でやるのを、子供もそのあとを追った。(新井)

### コマ

鉄心のズングリゴマというのをやった。他の子供のコマと打つけっこをして対手を倒す。

### 風上げ

風は二尺位の買い、紙でしつぼをつけて上げた。

買ってくるか作ってあげる。ウナリはつけない。煙の中であげて遊んだ。

### 藤バクチ

藤の葉をこいて軸だけにし、六本出して、ふると、藤と藤との間に穴が出来る。その穴に別の軸を入れて、入るだけ周囲の人からとる。バクチの一種。子供の遊び。

藤バクチは藤の葉をこいで六本出して振り、穴に入っただけ取る。二十本入ると皆から二十本取った。(新井)

### 力クネッコ

カランボのこと。ずい分した。登校の途中、かくれた子をそのままおいて行つてしまはれた事件などもある。

### 石投げ

川向うへ、石をほうる遊び。遠くへやるのが上手のわけ。

### ハリバクチ

六、七才の恥かしさを知らぬ頃、正月におめでとうといって村を廻つた。すると塵紙を三、四枚くれる。これが三、四十枚にたまると、一、三枚つし出し合いハリバクチをした。糸を一尺位つけて、ハリを口に挿み、さうとさして、ささつただけ取る遊びである。(新井)

### ズングリゴマ

これでブッケッコをして遊んだ。

### その他

女子はマリツキ、ナンゴ(赤い切れ小豆)、オハジキ、竹ナンゴ(ミの方は負、皮の方はカチ)などして遊んだ。(新井)

# 人の一生

## まえがき

この地域は概して裕福ではなかったという。特に女性にとってそうであったようである。中には涙を流して昔を思い出し、その苦勞ぶりを語る人さえあった。これは家庭における主婦の座の問題で取り上げられるであろうが、女の地位が如何に低かったかは、昔の結婚の形式から既に芽生えていたのかもしれない。女は働いて子を生む道具であったとさえ言っていた。こうした中に若者組、娘組の発達しなかつた理由があるのかかもしれない。或はあまりにきびしい生活条件が根底にあったのであるうか。中山道から西に入った入山地区には、坂本の宿場の華やかな世相は、思ひもよらないことだったらしい。

人の一生。それは一人一人がこの世に産声をあげてから生々しい歴史である。而もそれは貴賤を問わず、人間にとつて最も密接な貴い生活体験である。然しその中には、既に消えさったものもあり、知らぬ間に取り入れられた新らしいものもあった。むしろ現時点は、新旧交代といふか、混在する姿がみられる。そして、嘗ての恩賜演習場問題が、それの大転換期となつていることを、誰もが肯定している。

ここで調査されたものを、誕生から結婚まで、第二の人生に出発する儀式、そしてこの世を去るときに行われる葬儀と三つに分けて記述していくことにした。

(池田秀夫)

## 一 誕生から若人まで

### 概観

あらたな生命の安らかな誕生を祈る気持は、産泰様、水天宮にかけられる。勢多郡城南村荒砥の産泰信仰は、この山奥までしみわたつていだ。山村ではあるが、十二様への安産祈願は、東上州の勢多郡東村のように強くない。

八幡様を信仰する人は、馬の色から白いものを忌み、八幡様の鳥居をくぐらぬといふことさえ持ち、その他の産の忌みもかなり深刻である。

お産は坐産で行われた。坐産の方が楽だと中年の婦人は述懐する。

生まれた子供に着せるウブギは、昔は生前に特別に用意せず、布でもめてしばつていたというが、如何にも素朴な習俗であった。子供は朝から晩までびくしきつけられた。子供なりに山や家で働くことを教えられている。その中で昔の子供は、簡便、単純なものではあったが、その環境にある材料で、自らの遊びを考え出していた。遊戯の項目でもふれるであろうが、子供バクチなどその例であろう。老人は今の子供が、与えられた遊びにふけっているのと比較して、懐しい思い出にふけっている。

どこの村でもみられたように、ここでも古くからヨバイは行われていたようである。それは青年会の活動が盛になる以前のことと、この奥またの山村では、普通のことであつたのかもしれない。それが結婚の前提としてのものでないにしても、不純という意識はなかったようである。そうした社会が極く自然の姿であったに違いない。

#### (一) 妊娠・出産

岩田 帯

妊娠して五ヶ月のイヌの日に、さらし木綿の七尺五寸三分の長さのものを、妊婦の腹に巻く。こうすれば安産するといわれ、昔は殆どの妊婦が岩田帯をしめ、今でもつけられるようである。(坂本) 妊娠すると五月目の犬の日に腹巻きをした。腹巻にはお産婆さんが大という字を書く。(芦田谷)

禁 忌

妊娠中仏様を見るとあざができる。火を見ると赤いあざができる。鏡

を鏡中に入れておくとよい。

妊娠中の者は、八幡様の鳥居をくぐってはいけない。応神天皇が三年も腹にいたから。

八幡様ののり馬が白かったから、一般に白い着物を買わせなかつた。

白い兎も食わなかつた。気分的によくなかった。(下平)

産後二十一日たたねばイロリのそばに行つてはいけない。けがれるといった。

また日向には手拭をかぶつて出る。けがれるからという。(若宮)(芦田谷)

産がすんでおてんと様にあたると、ばちがあたるといった。横川では腰巻を表に干さない。(下平)

安産祈願

生れる一ヶ月位前に、産婆様の掛軸、仙台の塩釜神社の軸をもらつてかけ、安産を祈願した。(赤浜)

お産の時は産婆様へ行つてお札をもらつてくる。(麻ヒモ、ローリーク、オサゴ、御封等も) また水天宮様のお札を少し呑んだりした。これは札売りがまわってきたものである。この呑んだお札は、赤坊が手に握つて生れるものだという。(芦田谷)

産婆様のお札を、妊娠五ヶ月の犬の日にハラオビの中に巻いておく。お礼語りはない。

昔は水天宮のお札を呑むと、水のように安らかに生れたという。このお札を子供が握つて安らかに生れてくるともいい、お札は他所の人が持つて廻ってきたものである。

お産をするものの枕許に立てておくと安産するという。(若宮)

#### 出 産

今は子供を生む時は横川から産婆をよぶか、こちらから産婦人科の病院に行つて生むが、昔は村に二、三人の取上げ婆さんがいて生ませてくれた。(取上げ婆)

お産になると鶴の初生みの卵のままでたりなどした。また産婆の枕元に簾を立てかけておいたりする。お産は畳を上げて、板の間でした。昔は坐つて産んだ。(芦田谷)

初産は実家に帰つて行ない、二回目からは婚家で行う。

取上げ婆さんは村内の上手な人。そのときだけ後々までの関係はない。

産部屋は奥の部屋、畳をはいで板の間に米俵をほどいて薄い布を敷き、坐産であった。お産のあとは布をとり二十一日間坐つて。便に

おつかつて寝た。坐つて産むのが楽である。(赤浜)

南向きの部屋に、アキの方を頭にして産む。

近所のお婆さんに取上げてもらうのだが、こうした婆さんは三人位い

た。今は横川の産婆さんに頼んだり、病院でお産する。取上親には盆、暮に届けをし、また死ぬと葬式に出る。（若宮）

昔は蒲団を折って、よりかかって産んだ。奥の部屋が産部屋になつた。（下平）

赤ん坊が生れるときは、昔はお産婆などいないから、近所の年寄りがとり上げてくれた。（遠人）

### 産婦の食事

産婦のたべ物は、青物・油揚・梅干などを悪いとし、卵・かつぶし・味噌・おかゆなどを喜んでいた。（芦田谷）

油物、アオモノ（菜、きゅうりなど）はいけないといい、卵、腰筋に味噌をまぜたのが常食で、すっぱいものをたべると乳があがるという。（若宮）

産後一年間程は油物をたべられず、ゴマさえくれられなかつた。油物をたべると乳児はオデキがでたり、目が悪くなるといったものである。産後一週間位はオシャで、早く起きる程自慢したもので、早い人になると三日で起るき人もいた。（赤浜）

### 産婦の死

産後一年間程は油物をたべられず、ゴマさえくれられなかつた。油物をたべると乳児はオデキがでたり、目が悪くなるといったものである。産後一週間位はオシャで、早く起きる程自慢したもので、早い人に

なると三日で起るき人もいた。（赤浜）

産婦が死んだとき、川ばたに赤いキレで旗をつくり、立てておいて、側に竹のひしゃくで、通る人に水をかけてもらい、布が切れれば成仏するのだと。（下宿）

### ヘソの緒

二寸位の長さ（一握りの長さを標準にする）に切つておいて、桐の箱に入れてしまつておき、腹の痛くなつたとき煎じて呑むと治るという。最後の子のノチノモノと一緒に入れる人もある。（赤浜）

六日位でとり、大切にしまつておく。産の始末したものは墓に捨て

る。（芦田谷）

六日位たつと落ちるので、墓に埋める人、嫁に行くとき持たせる人とある。（若宮）

ノチノモノは墓にいけるのが普通である。（赤浜）

エナは墓地にいける。（下平）

### （二）生児儀礼

#### 初湯

産婦の寝ている部屋の床の下に捨てる。（若宮）

うふ湯は、てんと様に見せてはいけないので、床の下に捨てる。（下平）

初湯は縁の下に捨てる。（赤浜）

#### カニババ

うんとカニババを出す子ほど丈夫だという。（赤浜）

赤子が生れるとき、乳をのむ前にホーリーの汁かマクリなどを少しのませる。これは身体の毒を吐かせるためである。（芦田谷）（若宮）

赤ん坊に最初にくれたものは、名前を忘れたが、尼ヶエモノだった。虫が切れるのでいいのだという。母ちゃん（嫁）のときは産婆さんがきて

とり上げたので、赤ん坊にはサトウ湯をくれた。そのうち母ちゃんの乳が出た。（遠人）

#### ウブタテゴハン

生れてすぐたく。一升程度、オカシラツキで産婆、近所の人たちにたべてもらひ、神棚にもあげる。（赤浜）

#### ウブギ

ハダジバンは男女共に黄色。昔は布でまるめ、ひもでしばつて着るものを持った。生れる前に用意しておかないとある。（赤浜）

ウブギには、武田の菱の紋をつける。（下平）

#### セツチンマイリ

生後三日、橋を渡らず近所、向う隣り三ヵ所の便所を廻り、砂糖豆をまいてくる。来られた家ではヒタイにナベスミやローレンでお化粧してくれる。

西横野の一軒在家では、セツチンマイリは生後一週間目で、詣ると筆、墨で「犬」の字をヒタイに書いてくれた。(若宮)  
生後三日目、取上婆さんと、いった大豆、オサゴをもって隣家三軒の便所を、橋を渡らないで廻って詣る。橋は生後百日たなば渡ってはいけないという。(赤浜)

三日目或は一週間目位に、両横の他橋を渡らずに近所の便所を廻つてくる。砂糖米をもつていて、便所に白紙にのせて置いてくる。  
セツチン参りがくると、来られた家では、口紅、鍋墨等を薬指の先につけて、赤ん坊の額に一点足をつけてやる。お化粧してやるという。然し墨で「犬」という字を小さく書く家もある。(芦田谷)

豆をいって、隣三軒のセツチン参りをする、橋を渡らねえでその手前までの家の、家マシ三軒(自分の家を含めて)セツチン参りをするのだが、オサゴをもつて家人があかんぼうを抱いてゆき「はばかり借り借りとくんない」といって來るので、その家では紅、おしろいなどをわざあと(ほんの少し)あかんぼうの鼻の頭につけて祝つてやる。(遠入)  
便所参りはしない。(上宿)

### お七夜

赤飯を作り、嫁さんの実家の親を呼ぶ。(下平)

赤飯をぶかして、オカシラッキで近所の人を呼んで祝う。(赤浜)

生後七日のこと、命名は四、五日の頃から届出前にする。明治、大正の時代は、神主につけてもらうとか、祖父の一字をつけたものだったが、昭和の初めは、○雄、×松をつけ、今は明美、一美とかいう、名前だけでは男か女か判らないものが流行している。  
自分の家のチヨウズバ神、井戸神にお詣りする。親類にひろうする。

(坂本)

命名は懇意な年寄りに頼む。取上親と同様に、盆、暮に届け物をし、死ぬと葬式に出でて義理を果す。(若宮)

名前をつけるのは、子どもの父ちゃんかおじいさんのどちらかだった。先祖の名をもつてつけると丈夫になり、長生きするというので一字もつてつける。けれども早死することもある。(小柏)

うちうらでかんたんにます家もあるが、大きくなる家もある。  
近所や親せきの人を招んで、お吸物など三つぞろえて赤飯と酒を出し

てお祝いをした。招はない家に対しては重箱に赤飯を入れて届けた。

招はれた人は、祝い品として反物や着物などをもつて行ったが、赤飯をもつた家はマイデイルヨウニというので大豆や小豆などを入れてお返しをする。量はわざあと(少)入れる家もあるので一定しないが、いっぽいには入れない。(遠入)

### お宮詣り

男は二十一日、女は三十三日目、オサンゴ(撒米)だけもつていく。  
若宮では男は四十一日目である。(芦田谷)

男は三十一日、女児は三十三日、うぶなさまに詣る。(赤浜)

男は三十日、女は三十三日で、ウヤヤキともいう。誰が連れて行つてもよい。オサゴを供え、赤飯を先祖様に供えお祝して家でもたべる。(若宮)

男は三十二日目、女は三十三日目に八幡様に午前中にお詣りする。

神官が祝詞をあげたが、明治の中ほどに、熊野神社で神主となつてから、祝詞はやめ、今はお詣りだけ行う。

赤坊と産婦とその母親とて詣る。この日には親族を招いて披露し、赤飯をたいてお祝いをする。(坂本)  
生まれて三十三日に村の神社——お荒神さまに連れてゆく。(遠入)  
宮参りのとき道祖神におひねりをあげ、丈夫に育つよう想像をさす。(上宿)

クイゾメとチング

生後百十日目、お膳におかずのほか御訪様の小石を拾ってきて皿に盛りおかずとする。歯を丈夫にするようとの意である。(若宮)

男児は百二十日、女は百十日、河原から石を拾ってきて、お膳を作つて、おかげにする。

(下平)  
ほんのくぼの毛をすり残しておく。これをトトゲというが、いろいろに転んでも、生れた時の毛だけがれているので、火に転ばないといふ。

生後百日目、小さい茶碗に御飯、オカシラをのせて赤ん坊にくれる真似をする。歯を丈夫にするため、茶碗に石をのせて神様にあげる真

似をする。歯を丈夫にするため、茶碗に石をのせて神様にあげる。(赤浜)

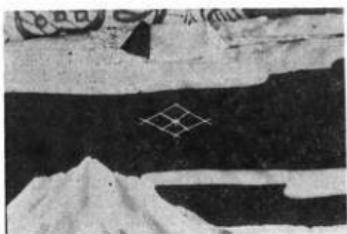
チングを剃る日は決っていない家もある。弱い子は丈夫に育つようにと残すのであって、弱い子はナナツボウズといって、七才までチングを残しておく。(赤浜)

百十日目、膳の上に一搾の御馳走を並べたほか御訪様(産土神)の庭

から石を拾ってきて、(若宮では川原の石の家もある)お膳にのせる。これは歯が丈夫になるためだといふ。

髪すりの時頭部の毛を少し残す。これは転んで鼻血の出るとき、引張って血を止めるためである。(吉田谷)

男児は百日目、女児はそれより早いうちに、茶碗と箸でお食い初めを行なった。石は使わなかつた。今はお食い初めはしない。



子供の衣服の縫紋(下平)

(撮影 吉岡一峰)

うぶ着の襟に菱形(上図の縫紋、参照)に縫いとりをして、チング(頭の後部に少し残す毛)を廻した。鼻血、傷の時にチングを抜くと、早く治った。(坂本)

食いそめは、男百二十日目、女百日目だという。(上宿)  
男の子は百二十日だと思うが、若い初めをする。赤のごはんで祝い、本膳をつくり、おかげには川原から幾つかの小石を拾ってきてお皿に入れつける。この小石をはしではさんでやり「それ食べろよ」といつて食べるまねをしてやる。子どもの歯が丈夫のようにするわけだ。(遠入)

乳不足のときは、米の粉をひいて砂糖を入れてのませた。乳児は殆どない。(若宮)

初誕生  
紅白の大きいアンビン餅をつくり、村人を呼んで祝う。箕の中に子供を入れ、風呂敷に餅を入れて背負わせる。そしてアンビンを尻にあてる。(赤浜)

紅白の餅をつく。箕の上に赤ん坊を立たせて、その尻を餅でたたいてやる。アンコの入った餅五つ位を風呂敷に入れて子供に背負せて立たせやる。餅は産見舞をもつた家や、お祝をもつた処に配る。(吉田谷)

箕の中に赤ん坊を入れ、餅を背負わせ、「五つ六つ歩け」という。疊の上にハダカにして尻を紅白の餅(甘いアンビン)でたたく。近所、親類でお見見舞やお祝をしてくれた家に配る。(若宮)

白い餅をついて、近所や親類にお配りをする。最近では見舞返しに、菓子を配るようになった。(坂本)

初めての誕生日には餅をついて祝つてやる。餅をつくとでっかくしてくれて背中に一つ、前の方に一つずつべつたんべつたんづつてくれる。大神宮さんの前にミの中に入れて立たせてやるのだが、早生の子はタングの餅を背負う子もいた。(遠入)

### (三) 育児

歩けないうちは藁製のイズミ、竹製のユズカゴに入れておく。後にはカツ糸製のハンモックを用いた。(赤浜)

組でしばっておいたり、親が抱くようになるとイズミに入れられた。家におくのであって、畠に持出すことはなかった。(若宮)

竹の籠の目を粗くあんだ物に子供を入れて育てた。イズミという。中に布団をしてその中に子供を入れる。生れて四、五カ月から二才位までの間はこの中で過させる。

子供はなれて割合におとなしくしている。仕事に出た母は、時折乳くれに瘤るようになるのである。(赤浜)

#### 捨い親

歯が早く生えるとオニゴといい、ドーロクジンの前に捨てた。捨つてもらったのを捨い親というが、子め打合せておくのである。(赤浜)

弱い子で心配のときなど、心やすい丈夫なお婆さんんに捨つてもらつたこともあるが、話しておいて捨つてもらつただけで、深いお礼をするわけではなく、その後でも特別のつながりはなかった。(遠入)

生まれつき弱い子は捨て子をする。知っている人に話し合つちあつが、辻などに捨てて来ると、「アカを捨てて来たよう」といつて捨つてくれる。丈夫に育つようといふまじないのようなものだが、その後の関係は何もない。(遠入)

#### 初節供

女子は三月三百にひな人形を、男子は五月五日に武者人形、のぼりう。昭和の初め頃までは、男子の場合は、勇ましい、縁起のよききれいな掛軸、例えば八幡太郎、豊臣秀吉などの絵の軸が、座敷に飾られたりのだった。(坂本)

女子は三月三日、男子は五月五日、初めてのお節供には親類や縁者が

鰯のぼりや五月人形、また三月にはお雛様を贈る。

五月には軒先に菖蒲とモチグサをさし、また菖蒲湯をする。

三月には草餅をつく。(芦田谷)

女子は三月三日、おひな様を親類の者が贈り、これに七、五、三に切った紅白の菱餅をあげる。

男子は五月五日、親類は武者人形掛軸、鰯のぼりを贈る。赤飯をふかして祝う。(赤浜)

女子は三月三日、男子は五月五日、鰯のぼり、人形など親や親類の者が祝いにもつていく。お返しはしない。

五月四日夜、神棚に菖蒲をあげ、母屋、牛小屋などの屋根に餅草と菖蒲をさす。(若宮)

### 四年 祝

#### 初正月

このとき男の子はカゲジ、女の子は羽子板を嫁の家からおくる。(若宮)

### 七年 三

簡単に祝う。十一月十五日に赤飯をふかし、神社にあげ、近所へも配る。(芦田谷)

男子は三才、五才。女子は三才、七才で、特に七つの祝は、衣裳に、今は三万円から五万円位かけている。(坂本)

十一月十五日、簡単に祝ってくれるが、オコワをふかし、神社に詣り、近所の子供にアメを分けてくれる。昔はこうした祝いはしなかつた。(若宮)

### 厄年

男二十五才、四十二才。女十九才、三十三才。厄除け詣りをする。ここで川浦(旧烏森村)の厄除観音、大島(旧甘楽郡高瀬村)の北向観音、西横野村の北向觀音などに行く。靈験あらたかである。

小正月のドン／＼小舎を焼く時、厄年の人は厄投げとして、ミカノー

箱位買って子供に投げてやり、厄落しをする。

また、若宮のお祭りに酒を買ってのんでもらう。（芦田谷・若宮）

力競べ（昔の遊び）

棒押しをした。一本の棒の両端を二人の人が持ち、ヘソの下に当てて、腰をおろして押しつこする。

石かつぎ。大きな石を、かつぎくらべした。二十二貫の石であった。（赤浜）

二十二貫と二十貫の力石は二つあった。丸い形の名で道傍にあって、若衆にかつがせた。（岩ノ平）

玩具の遊び

オテダマ（桐生）オヒート（諸戸）、オナンゴ（秋間・中野谷）、オニ

ンタ（信州）遊び。シングカキ（東京でチンチン。秋間、信州でケダシ、桐生でコンギといふ。）

ゴムヒキ（バチンコ）。赤浜）

しつけ

昔は子供の時からよく働かせた。これが勤勉な人になる修業になつた。朝は五時起床、夜は九時頃寝た。

学校へ入ると女の中は夕飯の手伝、オカズ作りなどさせられた。学校

から帰ると薪拾いに近くの山へ行った。これは男女共で、よいことを背

負って行った。卒業前頃は家の内外の掃除をした。また牛の世話や草む

しりもさせられた。学校卒業すると畠仕事、もとは麦作りと養蚕をやつた。女は冬の中だけ裁縫をやり、松井田の方の和裁の先生のところへ通

つた人もある。

今の子供は朝六時半に起きて夕方は九時半位迄起きている。朝寝でおそ寝になつた。（芦田谷）

### 成人式

年令的には男は二十才の成人式で、女は十九才の厄年を終えると一人前になったという。女になったとき赤飯をふかして祝う家もある。（若宮）

お祝いする人としている。昔の兵隊検査の時と似たようである。やはり赤飯をふかす。女の子は大概立派な着物を作る。（芦田谷）明治から大正五年頃まで、男子青年は、三代前のふじ屋雜貨店を根據にして食べたり、雜談したりして、交際していた。明治の頃、横川あたりで乱暴をはたらいて評判を悪くしたことがあった。女子青年は、娘宿で裁縫などをしていた。

高等科を卒業してすぐ、国鉄に勤めるようになったので、坂本に青年が一人になったこともあった。

昭和八、九年頃に青年会ができた。

戦後、成人式が行なわれて、この頃では女が派手になつてきただ。（坂本）

### 若者組

若者組というのはなかつたようである。

明治大正の頃青年会はあり、これは入牧全体で一団体であった。入会は小学校（高等科）卒業の十六才位で、三十五才位迄入っていた。

青年の仕事は道路修繕、植林の下刈、運動会などをやつた。

青年会から青年団と名が変わった。

処女会というのもあった。真綿の講習だの勤労奉仕だのした。（岩平）

若エ衆の仲間には二十歳ぐらいで入つた。日露戦争前後には若エ衆が中心で時間勤行をやり、毎朝五時にラッパを鳴らしに全村起床して仕事にかかつた。（坂本字原）

昔は盛で三十何人も青年があり、赤浜に青年会館をたてゝ仕事をいろ

### 青年会

いろいろした。道路修理だの他所の人の持山の下草刈などしてやつて金をためた。(赤浜)

### ヨバイ

村うちでたまには行われ、ナツ(夏)バに多かった。昼間に娘と打合せをしておく場合と、見当でやる場合がある。娘のいる家に行き、戸を持ち上げるようにして、音を立てないで開ける。頭が入ればめたものである。娘は声をたてない。いやがつても体でせめて、大体成功する。「まだオクで駄目だ」といわれてこれをまにうけるのは少なく、暫らくイキをぬいて時期を待つて再び行くと、結構ものになつたものだという。ヨバイから結婚に発展する時もあつたし、許されず結局馳落ちて夫婦になつたものもある。

娘の親父に騒がれて失敗した時には、カボチャ棚をこわしたりなどのワルサをした。

付近の部落で、女のヨバイが噂されていた所もある。

中野、黒川、女子のヨバイ

男気楽で寝て待ちか。

という歌もあつた。この歌は行商人が持ち運んだものであろう。娘が行く商人のところに入り込んだ場合もあつたといふ。

またヨバイに入つて、泥棒呼ばわりされて村中騒いだこともある。或は親が承知していても、一応泥棒が入つたと近所に騒ぐと、近所の人は承知の上でその泥棒をさがす。勿論捕まることはなかつた。(岩ノ平)

## 二 婚姻

### 概観

結婚はいつの時代、どこの村でも大きな話題となる。都会では結婚式専業会場で、事務的形式的に行われるようになってきたが、それが次第

にこうした山村にも入りつつある。公会堂や公民館での結婚式がそれである。然しそれでも山村なりに昔からのかきたりによるものも残され、語り継がれていた。

通婚圏は、山村でありながら比較的の村外が多く、昔から信州、次で甘樂郡西牧村が多かつた。「横川の閑所」と、商品流通路にある甘樂郡という、政治的、経済的理由にあつたといふ。この入山地区は行政的にも、もとは甘樂郡西牧村であった。やがて交通の変遷、発達、閑所の廃止、碓氷トンネルの開通、今やバスは横川から軽井沢にも通じるようになつて、通婚圏も急速に拡大しつつある。中山道バイパス路線工事の杭は、既にコンニャク畑の中に打たれている状態である。今ではシモの方から嫁が多く入つてくるようになつたし、村に居付く人も減ってきた。ただ一部、坂本方面は方が悪く縁組を嫌う風があつたのは、果していつまで続くことであろうか。

年命的には女は二十五才まで、男は二十九才頃までにといつて、結婚年令はやや上つてきている。成人式の結婚は殆んどなくなつた。

こうして次第に新らしい風がこの山村にも入つてきているが、現時点ではむしろ旧いしきたりと新らしいものへの中間時代といえるようでもある。「家」と「当人」、前者にやや比重がかけられてはいるが、両者が考慮されるようになつていている。そして昔は親と仲人がすべてを決め、式になつて初めて両人が顔を合せるか、せいぜい見合いの時一度会つただけであったのが、今ではタルイレがすんで婚約が成立すると、嫁は嫁の家に堂々と出入りし、泊ることさえ遠慮しなくなつていて。これは足入婚形式としては「カリブン」ということが行なつていて、これは足入婚とは異なる、あとで式をあげるにしろ省略するにしろ、結局はそのまま居付くのである。

式の日は「アサイチゲン」といって、もらい方が嫁の家に行くことから始まる。婿は仲人に連れられて「婿入り」する。「朝婿」ともいつて、これは明らかに「婿入り婚」の形式である。

嫁はコヤド（チユウヤド、ウンマオリともい）で休み、オチツキを以て次で婿方から迎えられる。昔は馬の鈴の聞えるところまで迎えに出たという。カドイワイをしてタイマツではたきこまれ、トリムスピとなる。婿方の部落の女衆との顔見せは、翌日のオチャヨビ（アトザシキ、ミツメ）である。

嫁の里帰りは、式後三日目から行われるが、その後は殆ど毎月のようにある。婚家の職業によつて相違はあるが、結局農家の嫁ほど里帰りが多くなる。また回数をみると村外婚が多くなるほど里帰りも多くなるのは人情である。生活様式の変化と交通の発達が自然とそなせるのである。

#### (+) 結婚の条件

##### 結婚年令

今では女は二十五才が晚婚とのさかいで、男は二十八、九才がそうである。（坂本）

年令は昔も今とあまり變りはない。私は十七才で嫁入りした。相手は九才ちがいで一度目の嫁だった。頭は丸マダラ（丸頭）。

早く十六才、この頃から二十七、八才。今は二十二、三才位が多く、両者一、三才位違うのがよいという。年上の女房は夫を可愛がるからよいといい、Kさんは八才も年上だった。（赤浜）

同じ年のものは結婚を忌む。食いつくらをするという。（明賀）

##### 嫁の条件

よく仕事をする人が好まれる。今では頭のよい方をとる。「家」と「人」両方考えるが、どちらかというと「家」を中心と考えたがるものである。（赤浜）

嫁選び

結婚は昔から見合いをした。たゞ見合いしてから、今では交際つきあいをするが、昔はしなかつた。今は構に入れれば往々来る。（芦田谷）

見合いということを特別にはしない。恋愛も少なく、某と某女がよいだろうということで話を進める。従つて初夜に気をもむ女が多かった。話が始まるとその気になるもので、大体まとまる。といって離婚といふこともない。

タルイレがすむとあとは自由で、昔はそんなことはなかつたが、今では相手の家の仕事もするし、泊りもある。（岩ノ平）

相手は親が心配してくれた。恋愛結婚など多少という程度。親のいう通りで、結婚式のとき初めて会つたというのさえある。

従つて恋愛した場合など、一人で逃げ出すものもあり、好きになつたが血すじが悪いなどでくれないと、うような場合、村内の家に連れこんで人をたのみ、こういうことになつたので是非くれと頼むのもある。

また他部落の者と恋愛関係が生じ、一方が血統を云々（例えはレブランの系統というように）云つてくれない場合、村のおもだつた人（弁の立つ人、学校長などの例もあった）に行ってもらつて成立させたこともあつた。こうしてもインゴウな人は本当に縁を切つてしまつた。

娘宿や若者宿などというようなものはない。（赤浜）

見合いもあるが、第三者が話してくれるのが多かつた。今では構が入ると往来する。昔は普通五月に構入れ、十一月に結婚式というのが多く、この間は二人は会わなかつたものである。（若宮）

昔は血族結婚をかまわなかつた。（下平）

##### 通婚園

信州が多かつたが、今は下（しも）の方からのが多い。血族結婚（イトコカワセ）というのも多い。山間部であるからさほど財産、身分の違いはなかつた。（赤浜）

むかしは横川に閑所があつて、「入り鉄砲に出女」といつて、女が閑所を通るのが難しく、特に入山に向つて来るのは面倒だったから、嫁は信州からばかりきた。信州に親戚がない人はいない。だから信州言葉

が半々で、兵隊に行つてゐるときは、誰からも信州生まれだといわれた。

(赤坂)

村外が多い。長野県は軽井沢の在。郡内では細野、九十九村、五料。

隣の甘楽郡西牧村。(芦田谷)

長野県、北甘楽郡との縁組が多く、坂本は方が悪いといって少ない。この人の縁組は別れることが多い、もうひとを嫌っている。(岩ノ平)

思賀はもと甘楽郡西牧村北之牧であつたので、嫁のやりとりは、主として西牧村が多かつた。(思賀)

### 仲人

仲人は仲人親ともい、盆、暮、正月に子供のできるまで、品物をもつていて贈物をしてつきあいをする。(芦田谷)

仲人親には盆、暮、正月に仁義をつくした。子供ができるまでという人もある。(若宮)

初めは人を頼み、まとまれば仲人になる。双方の両親が決めてから仲人を頼む場合もある。仲人は親戚の人格のある人または名譽のある人が選ばれる。

仲人、孫までといふけれども、実際は五年位義理をつくす。仲人には節供、三月は菱餅、さんまの開き、五月は赤飯に干したら、正月は餅の下の餅をもつていく。餅は薬でオシメの代りにして松をさしてもつていく。(赤浜)

座敷仲人、とりむすびの座敷で、杯をするだけの役目である。(下平)

### (二) 婚約・結納

#### タル入レ

娘をもらう、くれるということで嫁入りの話が正式にきまり、酒になることをタル入レといふ。

タル入レ酒は酒樽を一本しばりつけたツナギダルで行つたものだが、今は一升びんで間に合わせることの方が多くなつた。「一生(一升)いよいよ」ということだといふ。

仲人がくれ方に行つて酒を届けて帰ると、くれ方では近親者を招いて「娘を誰々のところへくれることになったがよろしく」と披露して、一献やる。トマリゾメはない。(赤坂)

もう一方では、仲人に頼んで酒一升、スルメ一輪、嫁方にもつていく。嫁方では親戚を呼んでオヒロメする。これで婚約は決るわけである。(赤浜)

#### カリブン

娘を連れていく、使ってみて、一、二年して御祝儀をすることがあつた。(下平)

足入れはみられないが、いそがしい時期とか、不幸があった後など、家庭の都合によつてカリブンが行われた。式は後日、日をあらためやることになるが、途中で話が駄目になつて、実家へ戻されるようなことはなかつた。(赤坂)

式をあげないで、嫁を一時かつていき使うことである。式はあるとでやるわけだが、カリブンでは酒はやらないが祝つて飲む。またあとで式をやらないで、そのまま居付きになるのも多い。(赤浜)

#### 結納

昔は品物でしたが、今はお金です。(芦田谷)

式の日取りが決つてからよい日をみて行う。目録を差し出すのだが、仲人が男の系統の者を連れていく。(赤浜)

#### イチゲン

式当日は朝イチゲンといつて、買ひ方で嫁の家へ行く。(芦田谷)

嫁入りのときは姉、叔母などが一緒についていく。女ののみのイチゲンはない。イチゲンが来ると弓張り提灯をもってきて入り、自分の席の前

に置いた。提灯の数が多い程よいといった。(若宮)

婚礼は時期的には四月、十一月が多い。普通御祝儀は聲方でやる。舞

は式の当日、早朝に仲人がつれて近親者と一緒に嫁方に行く。これを朝酒といい、酒が出て御馳走になる。(赤浜)

### (三) 嫁入り

#### 中宿

嫁が中休みするために、嫁入り先の家の近くに中宿をもうける。中宿は親戚或は知人の宅である。(坂本)

コヤド(ウンマオリ)。もらい方の隣の家とか、前の家が嫁の休み場になつており、仕度を直したり休んだりした。コヤドは、戻る位置の家はサルことにつながるのでよくないとされている。ウンマオリの名は、馬で来た嫁がそこで降りるのでついたものである。

コヤドでは、お茶を出さない方が多い。「お茶にする」「お茶をにこす」といってやがるからう。荷物の受け取りでない嫁の出迎えは、コヤドまで行けばよいことになっている。

#### オチツキ

コヤドでは、嫁、仲人、イチゲンに、ボタモチをつくり、吸い物わんに入れて出す。「ヨメガが落着くように」と出すものだらうが、いくら食うために出すのだからといって、或ヨメガサンがオチツキに食いついた、といって「ヨメガサンが食つた」といつて笑われた。なんほか腹がへつていてんだらうが、きっと一緒についてきた人が食いついたことにちがないんだよ、といわれた。トリモチにも出しが、これらは包んで後でもらって行くもので、普通はたべることはしない。お茶は家によつて出したり、出させなかつたりする。(遠入)

花嫁方のイチゲンは、先ずコヤド(ウマオリともいう)に行く。ここでオチツキ(嫁が腹ごしらえをすること)をして、キナコのボタモチが乗つた馬の鉢の聞える所まで迎えに出る。行列は嫁の家に最も近い家に立寄る。(通り過ぎた位置は選ばない)嫁方は弓張りをもつて迎える。嫁方の家に着くと、赤い紙をつけ、水引きで祝ったオガラ一束を敷居の外に

(サズケノモチという)をたべる。(赤浜)

#### 嫁入り

嫁入りは馬で来るのが多かつた。馬にふとんをのせ、嫁をのせて来たが、信州から来る嫁が多かつたので、入山峠まで出迎えるのが村の人しことで、馬を引いて行って荷物を交換してもらつて来る。十八八ごろ、七曲りの急な坂道を、若いからと、いうので長持をかつかせられて参つたことがある。酔での飲みくはない。サカエムカイはない。提灯をつけ

てコヤドまでは出迎えるが、途中で邪魔するような例は聞かない。(赤坂)嫁は馬の背に鞍をのせ、両ガケにしてその中にムコや家族の者にもつて来るオミヤケ(道具とは違うもの)を入れ、嫁はその上に横スワリにしてやつて来た。両ガケはタゾフジでつくり、ウルシをかけてあって、家によつてはその家の定紋をつけたものをつけた。(龍馬)

嫁は江戸づま、うちかけを着るのが多い。行列は大正の初めは馬で行った。人力車の前に馬が立ち、背にタンス一重ね、真中に嫁

が乗つた。あとでは荷車、運送車で荷を届けた。(赤浜)

ガケ(竜馬)  
阪本英一(撮影)

#### 嫁迎え

嫁入りの行列を迎えるために、嫁方が途中まで迎えに出た。これ

を「サカムケエ」といった。今はやらない。門口で姑と嫁の間で親子盃ということをやる。(坂本、下宿)

馬の鉢の聞える所まで迎えに出る。行列は嫁の家に最も近い家に立寄る。(通り過ぎた位置は選ばない)嫁方は弓張りをもつて迎える。嫁方の家に着くと、赤い紙をつけ、水引きで祝ったオガラ一束を敷居の外に

おき、これをまたぎ、次で敷居をまたがせたところで、母親と三度また

いだままで酒盃を交し（これをカドウタイ、カドサカズキという）、カドウタイを始める。またいだままでウタイが終ると、母親が手を引いて勝手に廻り座敷に案内する。（婿養子縁組のときはカドウタイではなく、婿は縁側→玄関から入る）なお、オガラのない所では径三種、長さ二十種位のカヤの束を使う。（赤坂）

線はダイドコ（玄関に当る）の方から入り、オカツテへ連れて行き、そこから座敷に入る。

ダイドコに入るときには、カヤで作ったタイマツの火をつけないものをまたぎ、敷居の所で女のシユウトと一步ずつ足をまたいで、仲人がカドウタイをし、盆のやりとりをしてからダイドコに入る。（赤坂）嫁が家に入るときは、ダイドコからタタミまでたきこむといわれ、仲人は必ずカドウタイをすることにきまっている。このカドウタイは線をくれるとき、娘がよい／＼出ていくときも、嫁をもらってダイドコに入るときにもうたうことになっている。ウタイの文句は「今を初の旅衣……」というのをやる。（電馬）

#### 結婚式（トリムスピ）

この頃ではばほほ公民館で式をあげたり、披露宴をするが、まだ大部分が自宅で行なっている。

いわゆる御祝儀は、仲人によつて進められている。

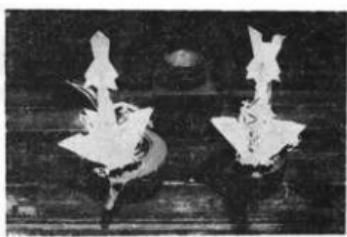
近隣の手伝いが前日からあり、旧家から膳桶を借り、御馳走を作つたり、床の間飾りなどの仕事がある。

式は三夫婦を揃えて並んで席についてもらうこともあるし、高砂の謡を歌つてもらうこともあるが、この頃は儀式ばらなくなつた。（坂本）

トリムスピの席では、嫁が正座に席をとり、その両側に仲人夫婦が席をとると、向つて左側に婿方の近親者、右側に嫁方の近親者が席をとつて、サカヅキゴトになるが、そのときになつて初めて婿が出てきて、嫁と向い合つて坐り、仲人のしごとでサカヅキゴトがあり、小さい子のも



島台(原)  
(撮影 中村和三郎)



雄蝶雌蝶と三三九度のさかづき(原)  
(撮影 中村和三郎)

局三天邊揃うことになる。婚礼は上段の間、ザシキで行われるが、座敷では嫁方のイチゲンは上の座、婿方のイチゲンは下座に坐る。

嫁が来たときもらいの方の方からオマチニヨウボが出る。これで結婚入りのときも、正座に坐るのはもらわれてくる一方、婿で、サカヅキゴトになるときに、仕度をしたヨメゴトが出てきて、婿の前に婿と向き合つて坐り、三三九度のサカヅキがすむと、そのまま席を外して下つてしまつた。（久保）

つた雄蝶、雌蝶のチョウシでサカヅキをとり交し、これがすむと仲人のウタイがある。このウタイが終ると婿の用はなくなり下つてよいことになり、ハマをとつてごたつにでもあたつていればよい。酒宴になつても嫁は坐らない。そのうちに嫁も疲れたから向うに行つて休ませてもらいます、といつて下り、こたつなどで休む。婿方に来た嫁方のイチゲンは、サカヅキゴトが始まるときには、故所のついた弓張提灯を自分の前において、ローソクの火をつけ、サカヅキゴトが終るまでは火を消さないでおいた。（赤坂）

ここで三三九度のトリムスビが行われ、次で披露宴となり、これには縁のオシタクがつく。この間仲人は嫁方を、次で婿方を紹介する。普通二、三時間位で、この間吸物が三通りある。人に酒をすすめるため三回出すという。（赤浜）

#### トコイリ

新婚の夜、共に寝るのをトコイリ（アラバチツリ）という。気に入らないのを親が授けたのは、一週間ももたないというけれど、そのうちによくなるものである。（赤浜）

#### ミトドケ

宴が終ると、イチゲンの人の中で嫁に近い総代役の人がミトドケをした。（若宮）

#### 四 披露・里帰り

##### アトザシキ

式の翌日、手伝いにきてくれた隣近所の人に対しては、アトザシキで酒をもてなして挨拶する。このとき婿、嫁が酒をつぐ。（赤浜）

##### ミツメ

式の翌日をミツメというが、嫁はマダを直し、近親者や近所の衆を招いて酒宴をし、このときは嫁が酌をする。いまはイチゲンの帰ったあとでこれをやる。このときは婿も出て酌をするが、これもだん／＼簡略になってきて、新婚旅行に出かけるのも多くなったので、一日でみんなすませる風が多くなった。（赤坂）

##### ワカイシ座敷

普通は披露が全部終ると朝になるが、披露が終つてワカイシ座敷となり、村の衆と一緒に酒を飲む。イチゲン、次で友人達親しいものを昼間、嫁の来る前に呼んで宴を張っているから、ワカイシ座敷を合せ計四度酒の宴が行われることになる。最近の若い者は酒の量が減ったといふ。（若宮）

#### ノゾツコミ酒

嫁さんを見に行くときはノゾツコミをした。障子に穴を開けてみると、もじらの方の家から酒を出した。酒の出しようによつては障子を裂くこともあつたが、大がいが隣の家で二升や三升の酒を用意してくれた。（遠入）

##### サトガエリ

サトガエリは三日目であった。今では式の翌日新婚旅行の一泊で行き、帰つてから嫁の家にお客に行くようになった。（若宮）

式から三日目にするが、婿と嫁の外にどちらか一方のショウトがついで行き、みんな先方へ泊つてくる。ショウトは、この日がくれば方への初対面となる。（久保）

式の翌日、仲人は婿、嫁、婿の父親が共に嫁の実家に行く。婿、嫁は泊つてくるが、そのとき嫁の父親が送つてくる。（赤浜）

里帰りは三百目に行われた。この日嫁は嫁ぎ先を訪ねる。これを「あとたずね」という。（坂本、下宿）

昔は里帰りといって、式後二、三日で嫁の家へ嫁が帰つたが、今はたいがいしない。新婚旅行に行くためである。（芦田谷）

##### トンビのハネ

仲人へのお礼の軽いことをいうのだと思うが、御祝儀のすんだ後で何日かたつてお札をもつて行く。お札はもじらの方の方が重いことになってきて、新婚旅行に出かけるのも多くなつたので、一日でみんなすませる風が多くなつた。（赤坂）

##### 嫁が里に帰る日

正月。餅を持って帰る。仲人に三枚、家には五枚。三枚の場合は米が一枚、粟が一枚。五枚の場合は粟が一枚、他は米の餅。

五月節供。餅をもつて帰る。

八朔節供。オコワに干だらをそえてもつていく。

オセイボ。塩引きをもつて帰る。

典休み。うるごみの餅をもつていく。(黒賀)

正月。娘は「餅(ます)」の下」という切餅を持参した。

三月。菱餅とサンマの干物を持参した。(坂本下窓)

ヒキナオシ

兄が死んでしまったので義弟が兄の嫁と結婚することをヒキナオシといふ。「ぜひ家のケブを立ててくれやあ」と父母から頼まれて一緒にいた。(狐置)

働きがないとか親が気に入らないなどがその理由だが、仲人が条件をつける。終戦直後の一例では、女をつくったので出てきたのであったが、慰しゃ料一〇万円と、嫁入り道具は持帰った(若宮)

### 離縁

## 三 葬 制

### 概 観

将にこの世を去ろうという状態になったとき、その人の魂を呼び戻そうとする行為は、今までの調査でもどこの村でも行はれていた。ここではセントラ参り、村中で川に入つて行はう水ごり、合せて一千回になるようするセントラ参り、呼び返し、産土様への百度詣り、千本旗、ハダシマイリなど様々な形で真剣そのものに行つた。セントラ参りに際してのタチを川に投げ、その流れる方向で生死を占うことも併せ行なわれている。

今回の民俗調査を行つた坂本、入山地区には寺院が一つもない。すべて他地区に菩提寺をもつてゐるわけである。入山地区は行政的に旧甘楽郡西牧村で、従つて菩提寺も西牧村にあつた。葬儀は僧侶が三十数軒の道をとんでくるわけである。或は松井田町に菩提寺がある。葬儀は区長が責任者となつて采配をふるい、各戸男女一名ずつ二日間

奉仕する。部落が小さいので、小柏部落では四戸だけでやるものもあるが、二つの部落が一つになって、その都度葬式組をつくり、すべてが運営される。ホーバイなどという言葉は聞かれない。

棺は村人によつて作られるが、立棺から最近は寝棺になつた。この方が死者も楽に往生できるし、穴掘りも楽だからといふ。そして棺は北向きに埋めることになつてある。石塔は南向きでも、死骸は北向きになつてゐる。そして埋めたあと墓の周囲に魔除けのメツバジキを生けたり、弔旗の竹で猪除けを作るのも山村らしい。そして埋葬した上に竹を三本組合せて立て、その頂から小石を糸で結えて垂らし、この糸が早く切れると早く成仏できるというが、この糸は魂の現世との往来のたゞないと考へたことであろう。

墓地は殆んど個人墓地で、しかも特定の位置を選ばず、どこでも畠の隅などを利用している。

葬儀が二つ続くと、葬列のあとにもう一人形を入れた小さい棺箱があり、これを三人目として埋葬し、それで終りとする習慣が、形こそ違つてもやはり残されている。

三十五日、四十九日で位牌を仏壇にあげたり、キネの音をさせて餅をついて供養するのは、位牌オサメというが、これで仏になりきるというわけである。靈魂がそれまで家に残つてゐることを意識したことであろう。それからは年忌が一つ一つの区切りとされ、三十三年にエダトウバ、ナガレトウバを立てて、トモライアゲをして、死者は先祖の組に仲間入りをする。

### (+) 死・喪

#### お見舞

病気見舞は、入院したときなどに出掛けるが、親戚は病院まで行き、近所の人達は帰つてから行く。(竜馬)

#### 死の予兆

人の凶事はデキゴト、御不幸という。死に際しては屋根で大きな声でカラスが鳴くという。（岩の平）

センクラ（千度）参り

久保人が肺炎にかかって死にそうになったときのことだが、村の衆がみんなで遠入の荒神さんに行つてお参りしたことがある。ぜひよくなるように、こので、みんなでセンクラ（千回）になるようにお参りした。

水ごりは下の方の川でやつた。（久保）

センゴリ（水ごり）

センゴリともい、十死に一生というような大病のときなどに、村中で川へ行つてやつてやる。合せて一千回になるようにやるものなので大がいは十人でやる。

病人の家からもつて行つたオワツの上にタチ（劍）をのせておいて、人が數をかぞえ、他の人たちが裸になつて川へ入り、

「サンゲサンゲ、六根清浄、大山、石尊大権現」

と唱えてこりをとり、タチに水をかけてやる。

タチ（劍）はアラヤギという木（イチイ）でつくったもので石尊さんからうけて来たものを使う。石尊さんは塔玉県の石尊さんのことと、タチは今も佐藤家（当主佐藤一氏）の神だなに上げてある。センゴリをしてからタチをとつて川の中へ投げこむと、流れる向きで生死を占うというが、逆に流れたらダメ、マトモに流れれば助かるといわれた。おわんの中にたまつてある水は捨てずにもつて来て病人に飲ませると、直る人は直るといわれた。

話者は三回こりをとつたことがあるが、一度は「水に入るのは寒くていやだな」といったら「おめえかんじょうしろ」というのでかんじょうしたこともある。かんじょうする人はタチを捧げて口をすすぎ、手を清めてからやるが、裸にならず、水にも入らない。病人の名前はかんじ

ようする人がいう。「病氣で困るからせひ命をつないでくれる」といつて、みんなでこりをとるものだ。（遠入）

お百度参り

重い病氣のときなど、病氣が直るよう、近親者や子どもたちを集めてお百度参りというのをやつた。隣り近所の人も入つてやつてくれたが、荒神さんに上つて拝んでは鳥居の下まで来て、また石段を上つて拝んだ。誰がいい出すというのでもないがやつたようだ。

子どもの時分、水ごりもした。（遠入）

呼び返し

八十以上になった人はかわいそらだから呼び返さない。呼び返しには屋根などには上らない。兄弟や、オカミサンが息をひきとつた人の枕元で大きな声で「父さん、いま死んだら困るからもう一度生き返りとくれよう」といって呼び返す。時間にしては三十分ぐらいだろう。それでもだめのときは近親から、もうだめだからやめてくれといつてやめる。（赤坂）

恩賜の岩吉さんという人の話では、まだオトカナナヤツツのころ、ぐあいが悪くって息をしなくなつちやつて、いくら呼ばつても變りがなくつて、「もうだめだからあきらめで葬式をどうするか考えべえ」というような話をしていたが「それでももう一度呼び返すべえ」というので大声でよんだら生き返つたという。

岩吉さんにその時のことを聞いたら、目をうすうすあけるとき、前方をきれいな川が流れ、きれいな花などが咲いていて、向うの方で坊さんみたいな人が「こっちへ来う、こっちへ来う」と呼んでいたといふ。こっちの方でもみんなが呼ぶので、うつらうつらして気がついたらそのとき生き返つたという。そのときは本当にいい気持だったという。岩吉さんは七十すぎの年老だが、それからは元気な人だつた。（赤坂）

病氣の重い人ができた時は、百度詠り、千本旗などいう事をした。

百度詣りは、諏訪神社の鳥居から拝殿迄の間をよく裸足で往復して百回まわった。千本旗は小さな旗を千本作っておき、十人位の人数でやはり鳥居とお宮の間を往復して一度拝む毎に一本ずつこの小旗を上のるのである。

その外御懸講の先達に病人を拝んで貰う事は屢々あった。昭和十年頃

迄これはやつた。（芦田谷）

重病のときは、八幡様に千本旗をあげたり、千社参りをする。

神主にたのんで、ひきめの御祈祷をしてもらう。

井戸をのぞいて、名を呼べば助かるという。（下平）

ハダシマイリ

人が死にそうになるとハダシマイリをした。大病人が出ると村中といつても七、八人だが、千本の旗を立て、入山神社にお百度ハダシ詣りを

した。一回詣ると旗を立て、また詣って立てるなどを繰返すのである。

終ると帰ってきて庭先で御獄経を唱えた。これも昭和十年頃が最後であつた（若宮）

死人がであると杵で立ち臼をついて音をさせる。普段は、から臼つくな

といし、杵を臼の中に入れておいてはいけないという。（下平）

臼 棚

神棚にはアオザサの葉をあげ、半紙を張ってふさいでしまう。なお十一月十五日（二十日）の間に死人があると、その家と近親の家だけは正月のお飾りをしない。（岩ノ平）

人の死んだときその家では、竹籠の葉をとめて来て神棚へ上げてケガ

しないようにする。この籠の葉はヒトノカ位は上げておく。これは上げるものも外すのも他人であれば誰でもよい。（赤坂）

神 棚

神棚にはアオザサの葉をあげ、半紙を張ってふさいでしまう。なお十一月十五日（二十日）の間に死人があると、その家と近親の家だけは正月のお飾りをしない。（岩ノ平）

人の死んだときその家では、竹籠の葉をとめて来て神棚へ上げてケガ

しないようにする。この籠の葉はヒトノカ位は上げておく。これは上

げるのも外すのも他人であれば誰でもよい。（赤坂）

寺への通知

寺には一番先に早く知らせる。寺には昔は弁当をもって歩いて行った

が、今は電話で知らせる。寺は十戸中七戸が甘楽郡下仁田町（旧西牧

村）本宿の長楽寺、一戸は松井田の金剛寺、一戸は本宿の觀福寺である。以前は全宿長樂寺の檀家であったが、先代の住職のときから現在のようになつた。寺からは小坂、杉木崎、滑、松井田を経て車でくる。（岩ノ平）

通帳、マクラナオシ

目を落した瞬間、北枕にして、枕を落す。オコーリといつて、いくらか額口の毛をすり、手拭を額にかけ、刃物を額の上におく。手を組ませる。（下平）

人が死ぬと北枕にし、刀をのせる。（芦田谷）

死が迫るとその病人を枕許で呼ぶが、死ぬと北枕にねかせ、猫が三回

跳び越すと生き返るといって、そうしないようにも刃物（日本刀か草刈

鎌）を置く。（岩ノ平）

人が死ぬことを不幸といい、先ず班長に知らせ、班長は隣組の家々に

そのことを伝え、近隣ではお見舞に行く。そこで親類や、知らせる必要のある人のところへ、ツゲを立てる。

ツゲはよそに出る時は、二人で組んで行く。

一時は甘楽までも出向いたが、今は行かないで電報をうつ。（坂本）

部落内の者の仕事で、このころは有線電話で間に合せるものが多くなつてゐる。交通事故の多いこの頃では、ツゲに出た人が事故にあっては

申証けないという施主の意向がそうなつた。（赤坂）

組合の人が親戚などに告げに行く。この際、必ず一人でいく。（芦田

谷）

枕直しをしたあと近親者に連絡、次で区長に、区長は部落の人間に通知して、死者の出た家に集める。また区長は近い所にはツゲを出す。ツゲは

確実を期して一人、行先で死者の名前、葬儀の日時などを紙に書いて知らせる。ツゲはただ返すものではないとして、御飯をたいて出したたり、酒を出してきてなすことになっている。また区長の指図で埋葬承認を得

るために役場に行く人、引物の注文その他賣出しの人が出る。(岩ノ平)  
一人で出る。小遣錢をもたせる。ツゲには御馳走してやるものだ。いつツゲが来るか判らないから、米一升と粉一升は、とっておくものだとう。(下平)

## (二) 葬 送

村人の奉仕  
デキゴトがあると区長が部落の人を集める一方、施主は引物について金額、親類の数などを通知し、あとは区長に一任する。

近親者と村中、赤浜と岩ノ平(両部落で区長は一名)の各戸男女一名が一日間奉仕する。村人の奉仕としてはツゲ、ツクリゴト(棺、墓標などを作る)などで、ツゲがミタチカヨタチ崩るとキヨメの準備を女衆がする。(岩の平)

花籠(切り花やお金を入れる。出棺の折、門の所で振り、参集の人々供養になるからといって金を拾う。たゞ金を撒くのは結婚した一人前の人の場合である。お年寄の時はその金をお守りにする)棺(寝棺、立棺まちまちである)位牌、香箱なども組合の人が作る(芦田谷)

オナンシは飲みくいのための台所準備をする。オトコシは阿弥陀堂にある葬儀用具を借りてくる。これは共有のもの。

三十六本の竹の骨で花かごを作ったり、色紙を使って、しか花を作れる。この頃では、竹細工にかごを編む人がいないので困る。このような飾りは、葬式の前日に立てる。(坂本)

ごしょどうぐーはながど、さきどうる、たつがしら(四、てんがい、たいまつ(二)ゆみや(一)と、棺台のまわりにつける四十九えんと六地蔵を作る。(下平)

久保と竜馬は一つになつていて、小柏は入らないで、ふつうはそこ四戸だけでやつていて、四戸きりだから人が足りないときは手伝いに行

くことになっているが、頼まれたことはないし、手伝いに行つたこともない。  
組の香でんは百円にきまつたが、このころでは、物価も上ったこともあるってだんだん値上げの形になり、五百円程度になつていて。(久保・竜馬)

赤坂の場合には狐置と組になつていて、葬式をやるときは施主の家からのお願いのしかたで人数が変る。狐置と手伝いに行つたり来たりすることになつていて、頼み方によつて男女一人で来てくれたり、男だけ一人で手伝いに来てくれる。

手伝いに行くときも同じことで、赤坂と狐置は一つである。(赤坂)

近親者が寄つて、お線香をあげて、十時頃まで仏のことを話す程度で、お通夜という言葉も余り使われなかつた。(赤坂)  
オツヤといい、友人や近親者で行う。通夜が取引にぶつかると一夜続けて行う。お通夜のときの線香は一本で、二本あげてはいけないとう。連れを引張るからというわけである。(岩の平)

## 枕 団 子

洗わない米を外で、三本棒を立てて炊く、まゆ玉にまるめ、おして作る。墓に入れるときに入れる。(下平)

## ジャンボンがけ

湯宿をするものは、麻でたすきをした。これは背中で交わらないかけ方でジャンボンがけといい、通常はさける。(下宿)

モンペイ  
道路の方を向けて立てる。モンペイを見て、旅人や乞食が来る。今は内向きになつた。七日ぐらい立てておく。

## ニッカン

死人を湯であいてやり、更に酒であいてやる。ニカンに使つたものは川に流す。(芦田谷)

棺箱ができると、時間的には通夜の最中であるが、近親者が寄り、湯をわかしてホッカンをする。死者は裸にされきれいにふかれる。洗ったサラン、お湯は川に持つて流したあと、家の外で塩を身体にふりかけて清める。

老衰死の場合は、普通の場合よりはよい着物を着せるが、何れも麻のタスキを十字でなくかけ、脚絆、ワラジをはかせ、テッコウをつけ、足には裏とコハセを除いた足袋をはかせ、サラシで袋を作りその中にオサゴを少し入れ、麻で作った紐を通して首にかけてやる。財布や袋に、三途の川の渡り賃として十円、五円のお金を入れてもたせたり、酒の好きな人は盃をもたせることもあり、生前趣味をもつていたもの、生前用いた道具を入れてやる場合もある。

終ると仏壇を新らしくつくつて花をあげる。棺は普通奥の部屋に移す。（岩の平）

善光寺のお血脉は、必ずした袋の中に入れてやる。その年、その家で一人目の死者のときは、古いひなを一つ入れてやる。三人目の出ることをさけるためという。（下宿）

### 穴掘り

野道具としてサガラ、スコップ、ツルハシなど死者の家のものを用いる。使ったあと塩、酒をかけて清め、一週間は用いない。

穴は葬式の日の朝掘る。それも午前中に掘ることになっている。帳場などの役のない若い人が作業する。棺は村の器用な人によって作られる。一三年前から寝棺となつたが、それまでは立棺であった。立棺では穴を掘るのがおおごとであるし、立棺では死者が窮屈だらうとのことで変更したのである。

穴を掘り終るときキヨメをその場でのんでもらう。（岩の平）穴は深く掘り、棺は北に向ける。埋めたあと、あんどんをかぶせ、板を十文字にし、花を立てる。（下平）

穴掘りは、手伝いに来てくれた他部落の人々がやってくれるもので、鍬やその他の道具はソウレイのある家のものを使う。

穴を掘り上げるとキヨメが出るが、トクリに酒を入れてサカヅキをつけて来る程度で、鍬などの道具にかける。使った道具は墓のそばに一週間おいておく。

### 穴ぼり人

原部落にアキジーヤという穴ぼりの男がいた。（下宿）

### 墓地

墓地は各家ごとにあり、本家、分家がみんな一つの墓ということはない。（赤坂）

個人墓地で、場所は畠の隅が多く、別に墓地としての届けをしていない。（岩の平）

### 菩提寺

赤坂や孤置は、むかしは天下領だったのでそのときのつながりから苦提寺は、甘樂郡下仁田町本宿の、曹洞宗長楽寺が本山で、そこから坊さんに来てもらう。遠いのでふだんは来ることがないが、いまの坊さんはハイヤーで来たりして村民からは評判がいい。（赤坂）

### 棺の材料

棺や位はいなどにはモミ板を使う。安いからだが、自分の家に木があり、板がある家は松を使う。（赤坂）

棺道具　棺の道具——担ぐものなどは竜馬のお堂にある。竜馬のお堂は、今こそ小さいが、もとは松井田の補陀寺の隣居寺で、大正のころの大火灾で全焼してしまったために小さくなつたという。補陀寺にある宝物のオマ

ンダラは、「中将姫の織つたもの」だといわれ、バスの糸で織つたネジナカだという。いあるアミダ様は立派なもので本山の方へもって行きたいそなうだが村としちやあやれるものではない。（久保）

松井田の菩提寺から坊さんがきて、先ず書きもの（戒名書きなど）をする。読経、お焼香、出棺となる。出棺の際は表座敷を通る。棺は四人で担ぐ。

### 出棺

葬列は(1)燈籠(近親者) (2)幟旗(近親者) (3)竜頭四本(伯、叔父、伯母、甥、姪) (4)位牌(長男) (5)香箱(近親者・故人と親しかった人) (6)膳・枕板(長男・妻) (7)棺 (8)天蓋(故人の目上か本当に近い人) (9)弔旗・花輪・造花・生花等の順でノベ(墓場)に行く。墓場で左廻り三回する。(芦田谷)

葬列は、先燈籠二人、これは近所の人を先頭にして、硬貨や切紙を入れた花かご二つが続く。葬列を作つて野邊送りの読経になるまでの間に花かごをゆすり、硬貨を撒いて、子供たちが多い見送る人達に拾つてもらう。次に四本の竜頭を持つ人、死者の名旗、弔旗、花輪、これらは近隣の人々。次に近親者が役付きとなつているもの弓、香箱、膳、相続人の持つ位牌。次で近親者は棺付き、その後に一族の最上級の人が天蓋を持ち、その後が会葬者である。

近親の女人々は、黒の紋付きの正装をして、花輪と香箱の間に入る。弓は葬列が庭を三周りするうちに、北に向けて射る。弓は竹の皮を外にして作るものである(坂本)。区長が役付きを読み上げ、夫々の持物を持ち終ると行列を作つて出発する。

棺は縁側から出る。カソッキ(孫が当る)にかついてもらうのが大往生といい、孫のコシに乗れば一番幸せだという。孫のいない場合は身近い目下の人である。(父、夫など目上の者は墓地には行かない) 棺かづぎはワラゾクリをはく。位牌は長男が持つ。この人は△形のサラシ布を

麻ひもで額に結える。膳は病人を看病した人が持ち、その際頭からサラシの頭巾をぱかりかぶる。これらのサラシ布は死者と共に埋めることになつてゐる。

食物では茶碗にテントモリに盛つて、箸を一本立てて御飯、小麦粉で作ったタンゴ(平にして真中をくぼました形のもの)などを持つて行く。(岩の平)

### ゾウリ

カンツキという棺を担ぐ人と、位はい持ち——相続人とがゾウリをはく。昔はつくつたのだが今は買って来る。このだけはえんがわの上でゾウリをはき、そのまま下へおりることになつてゐる。(赤坂)

### 服葬

むかしは近親者が死んだときは、女は麻の白無垢を着るのがふつうとされていたが、昭和の初ころから黒無垢が流行するようになつて、今ではみんな黒無垢を着る。女はまた、頭に白い三角の布をかぶる。

入山の方の補陀寺の関係では、竹を細くしてつくったハシのようなのに白紙を卷いたものを一本づくばり、葬列の出る前にエリにさして行き、埋葬のときに埋めるが、赤坂はない。(赤坂)

### 埋葬

埋葬には、近親者が順に土をかけ、村人が埋め、土をのせる。土葬である。(芦田谷)

埋葬は、近親者と隣組の者とで行う。弔旗の竹を割り、弓とともに、いのしし除けを作る。この式がすんで家に帰ると、門口で塩を使ってきよめをする。座敷に上つて、お茶を一ぱいぐらいい飲んで、すぐ墓参りをする。(坂本)

棺を穴に入れる、身内的人は一握りの土をかけ、あとはオテンマの人が土をかぶせて始末する。

埋葬が終るとワラジをはいて帰る。そのワラジで養蚕すると蚕がよくとれるといい、会葬者の中にはもらつて帰る人がいる。

ダンゴを重箱一杯入れて持つて行つたうち、仏様には少しあげ、残りの三分の一位は持帰り身内のがそのままたべる。仏様にあげたダンゴ、御飯は鳥が早くきてたべるとよい往生をしたという。

墓標のほかに長さ約四十厘米の六角塔婆を、死人の頭の位置に立てる。また墓の周囲にメッパジキを生ける。これを除霊けといふ。

埋葬した上に竹を三本組合せて立て、そこから小石を糸で結えて垂らす。この糸が早く切れると早く成仏できるという。

埋葬を終えて帰宅後坊さんが説教する。(岩の平)

きよめ—御苦勞より、その日の御馳走をして、のべ送りの念仏をする。(下平)

北向きに埋める。石塔は南向きでも、死体は北向き、從つて死人の背中から拌むことになる。頭の向く方に卍印をつけているから判る。(若宮)

葬儀の饅食は、親戚と村の人は死者の家で行う。ナマグサモノは避け、精進アゲ、アツアゲ、豆腐を主とした料理である。

遠くから来た人の食事はパンですませ、この人達は休憩所で休む。(岩ノ平)

ひきもの

葬式の引物は、ここ一、二年まんじゅうは少なくなつて、砂糖、ふとんがわ(布)、茶などが多く使われている。

香典—このころは五百円ぐらいが普通である。葬礼の諸経費に比べて、香典の合計は、一割ぐらいにたりない。(坂本)

### (三) 仏の供養

#### 死後の供養

葬儀後、命日の七日ごとに墓参をして、三十五日か四十九日で床の間にかざつてある仏(位牌)を、仏壇にあげる。このときに供養をする。

(坂本)

一七日まで毎日墓参をする。組合各戸から一人である。

三十五日—アンコ餅を作つて、近親者、村人にたべてもらう。

四十九日—三十五日と同様にする。

新盆—近親者、組合の人が焼香くる。

三年忌—必ず塔婆をたてる。

その後七年忌、三十三年忌まで法要をいとなむ。三十三年忌には別れ塔婆(枝塔婆ともいふ)を立てる。(芦田谷)

埋葬後一週間、毎日村の女衆が詣る。このときはその家でお茶を飲む程度で、三十五日、四十九日にはキネの音をさせる意味で餅をつき、親戚に配る。大きい塩あんのアンビン餅で、四十九日の餅といふ。葬儀の日に四十九日の忌明けをやつてしまふ家もある。

月の命日には毎月墓参をする家もある。

新仏一位牌を新仏壇におき、三十五日或は四十九日がきて仏壇にあげる。これを位牌おさめといふ。

一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、二十七年忌、三十三年忌でエダトウバ(ナガレトウバともいふ)という木の枝の皮をはいて塔婆を作り、坊さんを頼んでそれまでの本当の位牌は、位牌堂におさめる。(岩の平)

お墓に一週間位お灯明をあげる。

四十九日—四十九日の餅つき、お見舞をもらつた家に返し、來た人にも出す。

かたみわけ—四十九日がすんでから、子供や兄弟がお位牌をもらって行つて、位牌の披露をする。オキヤクボトケといって、村の人を呼ぶこともある。

あとは百カ日、一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十

三年忌、二十七年忌、三十三年忌はトモライアゲでエダトーバをあげる。(下平)

法事一年、三年、七年ぐらいたものであるが、三十三年たてば仏の意味も薄くなってしまう。ナガレトウバをたてるもんだというが、とくにすることはないし、寺に改まって行くこともしない。(恩賀)

年忌には、一、三、七、十三、十七、二十一、三十三年の各年忌があつて、ていねいな人はみんなやるが、三十三年忌のトモライアゲというのをすると、仏は先祖さまの組に入り、センゾサマといわれるようになる。その後はトモライ(年忌)をしない。

トモライ(年忌)をするときは、親せきを招んで、ホウジヨウ(方丈)に来てもらい、お経を上げてもらって、酒やごちそうを出し、風呂敷やマンジユウなどをヒキモソンにした。風呂敷には何年忌というのを染めてやり、マンジユウは横川でつくってもらつた。(赤坂)

#### アラボンミマイ

仏になつて最初のお盆のときアラボン見舞をする。盆の十五日までにお線香をもつたり、仏が好きだったものをもつて女シヨが行き、お線香を上げて来ることをいう。仏の葬式後四十九日供養がすんでいない場合は、まだ仏になつていないので翌年の盆がアラボン(新盆)になる。(遠入)

#### 四 その他

##### 子ども、未婚者の葬式

子どもや、人にならない人(未婚者)は墓場尻へ埋める。小さい子はお寺さんで戒名をもらって拝んでもらつた札と一緒に入れて埋める。ふつうにはごく内輪だけですませる。大きくなつた子どもや、未婚者については、親の考え方で大きくも、かんたんにもしている。トムライには行つたり来たりするが、ふつうは村内だけですませることが多い。(赤坂)

生まれて誕生前に死んだ幼児は、塔婆をもらい、お經をあげて身内で埋葬する。(岩の平)

養蚕期農繁期に死人が出ると、身内だけが寄つて、村人は埋葬に手伝うが、僧侶は頼まず、ツケも出さない。そして後に日を選んで本葬にする。(岩の平)

##### 不幸つきのマジナイ

お葬式が二つ重なつたときのマジナイがある。最近細野の親せきで出合つたのは、葬式が八月、九月と続いてしまつたので、葬列の後にもう一つ棺箱——みかん箱に人形を入れたもの——をつくつてお墓にもつて

行き、合せて三つやつたことにしていた。

村うちで以前やつたのは高橋さんの家のときで、特別に小さな棺箱をつくり、それに人形をつくつて入れてふたをし、墓地にも別の穴を掘つて埋めた。形だけ三つの葬式をしたということにしたものだから人形の方には塔婆などはたてない。中に入れた人形もどんな人形だったかは知らないが、「一度あることは三度ある」ということを人形によつて三度目でオワリとしたものである。(赤坂)